

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。関連の研究集会、シンポジウムの案内、人材の募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。海外の学会の参加報告やフィールドの体験談なども歓迎します

本ニュースは年4回（大体2月、5月、8月、11月）発行されます。次回140号は1月下旬締め切り、2月中旬発行予定です。

（編集担当 中井俊一）

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 140

1995. II. 22

1995年度日本地球化学会春季シンポジウム

主 催 日本地球化学会
日 時 3月28日（火）
13:00-16:12 口頭発表
16:00-19:00頃 ポスターセッション
（プログラムは2頁に掲載）



会 場 日本大学文理学部
地球惑星科学関連学会1995年合同大会の会期中に開催されます。今年はポスター会場に多少のアルコール飲料が用意される予定ですので、盛り上がったディスカッションが期待されます。奮って御参加下さい。

3月27日（月）～30日（木）に開催される地球惑星科学関連学会1995年合同大会全体のプログラムは、大会実行委員会から、別途本会会員に送付される予定です。会場への交通や参加費等については、この合同大会プログラムを参照してください。

春季シンポジウムに関しての問い合わせ先

〒183 東京都府中市幸町3-5-8

東京農工大一般教育化学教室 赤木 右

tel. 0423-67-5619 fax. 0423-66-8199 e-mail akagi@cc.tuat.ac.jp

1995年会は東海大学海洋学部で開催

日 時 1995年11月10日（金）～12日（日）

場 所 東海大学海洋学部

課題講演 西部北太平洋域の大気化学、海底堆積物の変質と古海洋環境の復元、地球表層生物圏の微量元素の化学（いずれも仮題）などを検討中。（2-3頁に詳細を掲載）

講演会の開催 一般市民に対する地球化学の啓蒙活動として、静岡新聞・SBS静岡放送との共催による講演会の開催を予定。

年会連絡先：〒424 清水市折戸3丁目20番1号

東海大学海洋学部海洋科学科

1995年度日本地球化学会年会準備委員会

岡部 史郎 tel. 0543-34-0411 内線 2290

fax. 0543-34-0937

（又は加藤 義久 tel. 0543-34-0411 内線2296, fax. 0543-34-0937,

e-mail; ykato@simizugw.cc.u-tokai.ac.jp）

編集者 中井俊一、鍵 裕之

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学理学部地殻化学実験施設

電話 03-3812-2111(内) 4450 ファックス 03-3816-1784

発行者 日本地球化学会 〒113 文京区本駒込 5-16-9 学会センター C21

日本学会事務センター内 電話 03-5814-5801

地球化学会春季シンポジウムプログラム

講演 (G会場, 3月28日)

(座長: 矢吹貞代, 鍵裕之, 佐野有司)

13:00~14:00

- 01 赤外発光分光の地球化学研究への応用の可能性 (筑波大物質) 鍵 裕之
- 02 カルボナドダイヤモンドの起源と年代: U-Th-Pb systematics (米国地調・ワシントン大) 立本光信・○小嶋 稔
- 03 富士山麓湧水の微量元素濃度によるクラスター分析 (北里大医療衛生・北里大衛生・農環研) 岩下正人・○島村 匡・稲垣路子・山崎慎一
- 04 Geochemical study of thermal springs in the Virunga volcanic area, Zaire and Rwanda (電力中研・東工大草津白根) ○V.S. Mambo・大場 武・木方建造
- 05 南太平洋深層海水中の³He/⁴He比 (広島大理・東大海洋研) ○佐野有司・高畑直人・蒲生俊敬

14:00~15:00

- 06 東京湾と黒潮海域における海水の希土類元素 (東大海洋研) 野崎義行・○張 勁
- 07 北太平洋における海水中イットリウムとランタノイドの鉛直分布 (東大海洋研) ○張 勁・天川裕史・野崎義行
- 08 海底表層堆積物におけるポロニウムの挙動 (北大地球環境・北大水産) 成田尚史・○今井大蔵・角皆静男
- 09 セリウムアノマリの解釈について (農工大工・電通大自然) 赤木 右・増田彰正
- 10 炭酸カルシウム生成に伴うホウ素同位体分別 (上智大理工) ○池田久太郎・大井隆夫・小坂知子・向田政男

15:00~16:00

- 11 干潟における微生物的 sulfur cycle の同位体地球科学 (九大理) ○山中寿朗・村江達士
- 12 過去50万年間の琵琶湖の古水深変動-ヒ素含有量からの地球化学的推定 (東大理) 豊田和弘
- 13 中国, 新疆, 砂漠域におけるストロンチウム同位体組成の変動 (理研地球科学・中国新疆生物土壤砂漠研) ○矢吹貞代・岡田昭彦・樊 自立・常青
- 14 Gypsiferous soils in Tarim Basin, Xinjiang, China (中国新疆生物土壤砂漠研・理研地球科学) ○常 青・樊 自立・田 長彦・岡田昭彦・矢吹貞代
- 15 イラン北部エルブルズ山脈における先カンブリア系/カンブリア系境界の層序と炭素同位体組成変動

(東大理・東大教養・イラン地調) ○木村浩人・松本 良・角和善隆・B. Hambi

16:00~16:12

- 16 Cenomanian-Turonian (Cretaceous period) carbon isotope events recorded in far eastern terrestrial organic carbon (東北大理) 長谷川卓

ポスターセッション (ポスター会場)

3月28日 午後4時30分より

- 01 標準添加ガラスビードを用いたレーザーアブレーション ICP 質量分析装置による HFS 元素の定量分析法の開発 (丸文科学機器部・福島大教育・東北大理) ○高久雄一・増田公彦・木村純一・吉田武義
- 02 CO₂ レーザー法による珪酸塩の酸素同位体分析の問題点 (東北大理) ○佐藤久夫・Liu Yu・林謙一郎・大本 洋
- 03 近赤外~赤外域での方解石と粘土鉱物との混合物の拡散反射スペクトル: リモートセンシングへの応用 (東大理) ○山本 彩・宮本正道
- 04 電子スピン共鳴を用いた破碎石英の評価法 (阪大理) ○平井誠・金森 博・池谷元何
- 05 α線照射及び破碎によって石英中に生じる E' 中心の ESR (阪大理) ○河野日出夫・山中千博・池谷元何
- 06 電子スピン共鳴 (ESR) でみるサンゴの縞模様とそのリズム (阪大理・台湾師範大・台湾大) ○岡俊英・池谷元何・石再添・陳千高
- 07 山中湖底で発見された沈水樹と湖の形成 (地球科学研・日大) ○浅井和見・田場 穰・遠藤邦彦
- 08 湿性降下物に含まれる非海塩性硫酸イオンのイオウ同位体比 (山形大理・ウェザーニューズ・三菱マテリアル中研) ○柳沢文学・佐々木みどり・加藤 賢・大日方裕・廣瀬美由紀・上田 晃
- 09 山形県におけるエアロゾルの経時変化と化学組成 (山形大理・鶴岡高専) ○大日方裕・柳沢文学・小谷 卓

1995年度清水年会の課題講演

① 西部北太平洋域の大気化学

IGBP/IGAC (International Global Atmospheric Chemistry) のアジアでの活動の一つとして APARE (East Asian/North Pacific Regional Experiment, Convener: H. Akimoto) が進められている。その関連の活動として、本課題講演では人為起源物質の化学・輸送・変質過程について、その影響を大きく受ける西部北太平洋域での海洋大気化学研究の最新の研究成果を議論する場を設けたい。大気-海洋間での

物質交換はどちらの方向のフラックスも海洋生物と密接な関係にある。海洋化学との関連も重視し、この海域を中心とした陸上、航空機、船舶などによる観測結果やモデリングなども含め、幅広く今後の研究方向を議論する機会としたい。

問い合わせ;

秋元 肇 (東京大学先端科学技術センター tel. 03-3481-4502, fax. 03-3481-4562, e-mail; akimothj@tansei.cc.u-tokyo.ac.jp)
植松光夫 (北海道東海大学工学部 tel. 011-571-5111, 内線614, fax. 011-571-7879, e-mail; h00568@sinet.ad.jp)

② 海底における記録と変質-古海洋復元に向けて
人類による環境破壊によって地球環境の変貌が危惧されている。将来の地球環境を予測するためには、現在ばかりでなくごく近い過去の研究も重要であるという認識から、わが国でも IGBP/PAGES (Past Global Change) に対応して、古環境変遷を解きあかすべく様々な分野で研究が進んでいる。海底堆積物は過去の海洋環境の変遷を記録している重要な試料であるが、一方では時間経過と共に化学的にも変質している。そこで、この課題講演では堆積物中に記録された過去の海洋環境に係した情報を正しく評価することを視点にして、海洋物質フラックス、海底境界層の物質循環、など現在の海洋と海底付近で起こっている現象も重視し、堆積物の変質と古海洋復元に関する最新の研究成果を議論したい。

問い合わせ;

大場忠道 (北海道大学大学院地球環境科学研究科 tel. 011-706-2233, fax. 011-747-9780, e-mail; oba-tad@env.hines.hokudai.ac.jp)
加藤義久 (東海大学海洋学部 tel. 0543-34-0411, 内線2296, fax. 0543-34-0937, e-mail; ykato@simizugw.cc.u-tokai.ac.jp)

③ 地球表層生物圏の微量元素の化学

近年の炭素・窒素に関わる地球環境問題に関連して環境中での微量元素の役割について、再び関心が払われている。しかしながら、ここ10年ぐらい研究方法、分析方法、結果の解釈等でさまざまな問題を抱えている。さらに、微量元素の研究領域は、大気、海洋、陸水、土壌、生物と広範囲に渡っている。この課題討論では、地球表層生物圏 (大気、海水、土壌、陸水、生物) に係した元素の分布、循環、反応、存在状態等について分析方法も含めてできるだけ幅広く議論することにより、地球環境における微量元素研究の今後の方向を探りたい。

問い合わせ;

鈴木 敏 (静岡大学理学部 tel. 054-237-1111, 内線5820, fax. 054-238-0491, e-mail; seysuzu@

toubu2.shizuoka.ac.jp)

豊田恵聖 (東海大学海洋学部 tel. 0543-34-0411, 内線2292, fax. 0543-34-0937)

“Geochemical Journal” と「地球化学」の販売委託先の変更について

1994年当初以来、松久 GJ 編集委員長、大隈 GJ 編集庶務、野尻会計幹事、増澤庶務幹事で検討を重ねてきた、1995年度からの GJ と「地球化学」の外部への販売委託先の変更について、日本学会事務センターから、1994年度より GJ の印刷 (technical editing を含む) を委託しているテラ学術図書出版に変更することで1994年5月28日の評議員会で承認を得ましたが、その後テラ出版と交渉を重ね、1994年12月に契約書および覚書を締結しました。これにより、1994年以前の GJ および「地球化学」のバックナンバーもテラ出版を通して販売されることとなり、これまでの全バックナンバーの在庫 (規格段ボールで60個) が、2月上旬に学会事務センターからテラ出版に移されました。会員および寄贈先へのこれら雑誌の配布は、本学会から、従来通り日本学会事務センターを通して行われます。

今回の変更および契約書の締結により、テラ出版との交渉、連絡を含め、これら本学会の雑誌の出版全体に対する継続的担当責任者をおく必要性が明らかとなり (編集についてはそれぞれの編集委員長が責任者です)、現在 GJ 編集庶務の大隈多加志会員に、出版担当幹事をお願いし、会長の委嘱する追加評議員になっていただくことが、2月18日の評議員会で承認されました。

なお、テラ出版は GJ の他に、Journal of Geomagnetism and Geoelectricity (地球電磁気地球惑星圏学会) や Journal of Oceanography (日本海洋学会) などの製作、出版も行っており、また1994年12月5-9日に San Francisco で開催された American Geophysical Union の Fall Meeting では、TERRAPUB のブースを出して GJ も陳列し、また EOS 77 [44] (Nov.1,1994) に GJ の広告も掲載するなど、GJ の海外での販売拡大に向けての活動を開始しております。学会も、テラ出版と協力し、販路拡大の方策を検討しつつあります。庶務幹事 増澤敏行

研究助成「鳥居基金」募集のお知らせ

1995年度10月-1996年度3月分応募期限

1995年7月31日 (月)

応募方法・所定用紙に記載した申請書を、7月31日 (月) までに学会事務局へ (当日消印有効)

提出先・〒113 文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内
日本地球化学会鳥居基金委員会

交付申請書は前号添付の用紙、もしくはこれを複写したものをご使用下さい。なお、この件についてのお問い合わせは本委員会委員長もしくは本会庶務担当幹事（下記）まで。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地殻化学実験施設

脇田 宏

tel. 03-3812-2111 (内) 4621

fax. 03-3816-1784

〒484-01 名古屋市中千種区不老町

名古屋大学大気水圏科学研究所

増澤敏行

tel. 052-789-3498

fax. 052-789-3449

第32回理工学における同位元素研究発表会

表記関連学会が開催されますので御案内いたします。

会期：1995年7月10日（月）～12日（水）

会場：国立教育会館（東京都千代田区霞が関3-2-3）

内容：それぞれの研究分野において、その専門的成果を得るにいたった放射性および安定の同位元素ならびに放射線の利用の技術に重点をおいた論文と、これら同位元素、放射線の利用の基礎となる研究とします。

発表形式：口頭発表またはポスター発表

発表申込区分：地球科学・宇宙科学・環境科学安定同位体その他の区分があります。お問い合わせ下さい。

発表申込：所定の申込書（1件1通）により申込む。申込書は下記宛請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込2-28-45

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会

運営委員会

tel. 03-3946-9681（ダイヤルイン）

発表申込締切：1995年2月28日（火）

講演要旨：発表申込あり次第、所定の原稿用紙をお送りします。口頭発表、ポスター発表とも、1件につき原稿用紙1枚。

講演要旨原稿締切：1995年4月15日（土）

研究発表会への参加：無料

主催 日本アイソトープ協会

共催 日本地球化学会他

1995砂漠化機構解明シンポジウム

期 日 1995年2月28日（火）～3月2日（木）

場 所 科学技術庁研究交流センター

茨城県つくば市竹園2-20-3

tel. 0298-51-1331

シンポジウムの主要課題

1. 砂漠形成史
2. 砂漠化機構及び環境変動
3. 砂漠化と気候変動
4. 半乾燥地域における生態系の保存及び回復機能
5. 砂漠化のシミュレーション及び砂漠化防止への応用

連絡先 〒100 東京都千代田区霞ヶ関2-2-1

科学技術庁研究開発局

地球科学技術推進室 今泉孝男

tel. 03-3581-5271 内線427

03-3581-0779（直通）

fax. 03-3506-1960

第18回極域気水圏シンポジウムのお知らせ

南極域では、南極観測における主要な研究計画として、「氷床ドーム深層掘削観測計画」が進められており、第36次観測隊はドーム基地に越冬して深層掘削を開始しようとしております。また昭和基地では、「南極大気化学観測計画」が実施されております。北極域ではスバルバル、グリーンランド等で地球科学に関するさまざまな観測が実施されております。一方国内では、これまでに得られた氷床コアの分析とデータ解析、衛生データの解析等を始めとして、南極、北極域の試料を用いた多方面にわたる研究が続けられております。

今年も南北両地域を中心とした気象学、雪氷学、海洋学に関連する研究成果と今後の研究展望等に関するシンポジウムを開催いたします。ふるって御参加ください。

なお今年は北極関連の講演を中心に特別セッションを設ける予定です。

記

日 時 平成7年7月18日（火）・19日（水）

会 場 国立極地研究所・講堂

発表申込締切 5月8日（月）必着

連 絡 先 国立極地研究所

気水圏シンポジウム係「古川晶雄」

〒173 東京都板橋区加賀1-9-10

tel. 03-3962-5580 fax. 03-3962-5719

e-mail:glacier @ nipr.ac.jp

名古屋大学人間情報学研究科助手公募

本学会宛に、下記の人事公募の案内がありましたのでお知らせ致します。

記

1. 所属：物質・生命情報学専攻・環境情報論講座
2. 採用人員：助手1名
3. 専門分野：地球環境科学；自然環境そのもの、あるいはその情報の処理についての研究
4. 応募資格：(1)博士の学位を持つか、または近い将来に博士の学位を取得見込みの者
(2)年齢が30歳前後あるいはそれ以下の者
5. 採用予定年月日：決定後なるべく早い時期
6. 提出書類：(1)履歴書
(2)業績リスト：全著者名、発行年、論文題目、雑誌名、巻・号、頁の順番で記載する。主要論文（3編以内）の冒頭に○印を付し、別刷りをそれぞれ3部提出する。リストの下に所属学会を記入する。
(3)研究概要：これまでの研究の概要を1500字程度にまとめたもの。
(4)研究構想：今後の研究構想・抱負を1500字程度にまとめたもの。
(5)推薦書：推薦状（推薦者の連絡先を明記）1通または応募者本人に関して参考意見を述べることのできる人（1名）の氏名・連絡先。
7. 応募書類提出期限：1995年3月31日必着。封書、簡易書留による郵送とし、封筒の表に「環境情報論応募書類在中」と朱書すること。
8. 応募書類提出先：〒464-01 名古屋市中千種区不老町 名古屋大学大学院 人間情報学研究科長 横井英夫
9. 問い合わせ先：〒464-01 名古屋市中千種区不老町 名古屋大学大学院 人間情報学研究科 西川輝昭
tel 052-789-4856

“Nobel Gas Geochemistry and Cosmochemistry”の割引販売のお知らせ

昨年の1月17日から19日に、希ガスの地球・宇宙化学に関する国際ワークショップが京都で開催されました。この会議のプロシーディング“Noble Gas Geochemistry and Cosmochemistry”（Ed. by j. Matsuda）が、テラ学術図書出版社より、刊行されま

した。本書の内容については、次号に書評をのせる予定です。定価は10,000円ですが、本会会員には、7,000円の割引価格で販売します。購入は地球化学会会員と明記の上、テラ学術図書出版社へ、直接ファックスでお申し込み下さい。出版社より書籍と請求書をお送りします。

連絡先 テラ学術出版社

tel. 03-3718-4403 fax. 03-3718-4406

担当 押田恵司

第15期第13回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会 議 事 録

日 時 1994年7月6日（水）13時45分～16時15分

場 所 日本学術会議第6部会議室（6F）

出席者 角皆静男委員長・石渡良志・小嶋 稔・

柴田 賢・末野重穂・諏訪兼位・野津憲治・

増田彰正・山中健生

1. 報告事項

(1) 学術会議関係（諏訪委員より）

① 第16期日本学術会議会員が決まった。

② 5月24日から26日に第118総会が開催され、数理科学国際研究所（仮称）設立の提案を含んだ「新しい方式の国際研究所の設立について（勧告）」が採択された。また、「女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言（声明）」が採択された。

③ 第16期から国際対応のための第7常置委員会が発足する。また、地球環境研連、国際学術協力事業研連が新たにできる。

④ 6月27日の運営委員会で、地球化学・宇宙化学研連から出された「日本における地球化学の研究教育体制の確立について」、天文学研連から出された「21世紀に向けた天文学の長期計画について」、鉱物学研連から出された「日本における鉱床学の研究と研究一大学院学生との教育交流推進について」などの対外報告が承認された。

⑤ 平成7年度の科学研究費補助金審査委員候補者の研連への推薦依頼は7月上旬で、9月5日までに第4常置委員会へ回答する。

⑥ 平成7年度から科研費の時限付き分科細目として、「光生物学」、「極微細構造工学」、「そしゃく」の3つが発足する。平成8年度については、第4部では「地圏環境システム」を推薦する。

⑦ 惑星科学研連を作る希望が出されているが、当面は地球物理学研連内に小委員会を作ることで対応する見通しである。

2. 審議事項

(1) 前回議事録：

議事録(案)を承認した。

(2) 地球化学の将来計画:

「日本における地球化学の研究教育体制の確立について」の対外報告は、学術会議会員や学会関係者に意見を求めた上で、幹事が最終案をまとめ、5月25日の第4部会に提出し了承された。6月27日の運営審議会では2ヶ所修正の上で承認された。なお、学術会議会員の選出方法に関わる部分は、見直しの要望書を提出することが適当との意見にしたがい、委員長が要望書の原案を作成したが、その取り扱いには第16期の研連に申し送ることとなった。

(3) 平成7年度科学研究費補助金審査委員候補者の推薦:

研連における選考は昨年度と同じ方式で行うこととし、委員長名で関連17学協会へ推薦依頼を出し、回答を待って次回の委員会で選考を行うことを決めた。

(4) 第16期研連委員の学会等への推薦依頼について:
第15期の構成を基本的には踏襲し、宇宙空間研連と日本生化学会が1期交代で出す1名の枠については、宇宙空間研連を地球物理学研連(惑星系)に変更することが了承された。したがって、第16期研連委員定数12名の内訳は、学術会議会員(1)、日本地球化学会(5)、日本地質学会(1)、日本鉱物学会(1)、日本岩石鉱物鉱床学会(1)、日本化学会(1)、地球物理学研連(流体系)(1)、地球物理学研連(惑星系)(1)であることが確認された。このうち学会推薦の9名については、正式には後に第4部長名で行うことになるが、推薦依頼の手続きをとることが了承された。

(5) 次期委員会への申し送り事項

次期委員会へ、①科研費審査委員候補者の選考方法、②学術会議会員選出方法の見直しについての要望書、③対外報告に盛り込まれた地球化学の将来計画の実現化、を申し送ることが了承された。

(6) 次回(第14回)委員会:

1994年9月1日15時からを予定することとした。

第15期第14回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会
議事録

日時 1994年9月1日(木) 15時~17時

場所 日本学術会議第4部会議室(6F)

出席者 角皆静男委員長・青木謙一郎、石渡良志・小嶋 稔・柴田 賢・末野重穂・野津憲治・増田彰正・矢内桂三・山中健生

議事に先立ち、第16期日本学術会議会員が7月21日付けで発令されたことにともない、当研連の指名会員が訪

訪兼位会員から青木謙一郎会員に変わったことが報告され、第14回委員会の議事に参加することが了承された。

1. 報告事項

(1) 学術会議関係(青木委員より)

① 第16期日本学術会議会員が7月21日付で発令になった。第119回日本学術会議総会が7月26日~28日に開催され、役員が決定した。会長は伊藤正男氏、副会長は利谷信義氏と西島安則氏、第4部長は伊達宗行氏、副部長は竹内郁夫氏である。

② 第16期の第4部への申し送り事項は、学術会議の活性化と第4部の役割、大学改革について、科学教育問題、研連の再編成、女性科学者問題、会員推薦制度、国際対応情報センターの整備、の7項目である。

が採択された。

(2) 地質科学総合研連(角皆委員長より)

8月31日に研連が開かれ第16期への申し送り事項が検討された。

(3) その他(角皆委員長より)

天文学研連より、1998年8月に日本で開催予定の国際天文学連合第23回総会を学術会議が共催するための申請を共同で行って欲しいとの申し入れがあった。

2. 審議事項

(1) 前回議事録:

議事録(案)を承認した。

(2) 平成7年度科学研究費、細目「地球化学」の第1段審査委員候補者の推薦

科学研究費、細目「地球化学」の第1段審査委員候補者3名のうち継続の2名を除く1名の候補者の選考を行った。昨年度と同様、関連17学協会に推薦を依頼し、15学協会からの推薦を受付けた。資源地質学会、日本古生物学会からは推薦がなかった。まず、候補者の決定方法については原則的に昨年度の方法を踏襲することを確認した。継続委員の研究分野は、第1段審査委員がAグループ(固体地球関係)1名、Bグループ(大気水圏生物圏関係)1名、第2段審査委員1名がAグループであるので、今回は候補者第1位はBグループ第2位はAグループから選出することとなった。

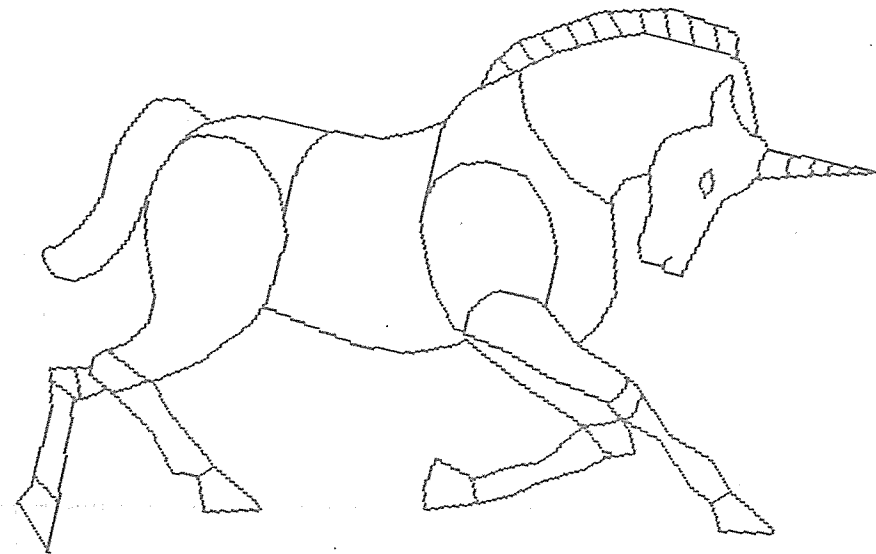
各学会から推薦された候補者は16名であったが、このうち1名は推薦に係わる留意事項を考慮して、選考から外した。具体的な選考作業は、第6回研連委員会です承された投票方法によることとし、まず候補者をAグループとBグループに分け各グループの1位を選出し、Bグループ1位、Aグループ1位の順で全体としての順位を決めた。

(3) 第16期研連への申し送り事項

次期研連への申し送り事項が委員長から提案された。内容は、研連の構成、科研費審査委員の選考方法、第15期対外報告に盛られた地球化学の将来計画の実現、学術会議の会員選出方法や組織の見直しに対する要望書の提出、日本地球化学会との関係強化の5項目から成っている。この案に対するコメントがある場合は早急に委員長宛に送るが、最終案は委員長に任せることが了承された。

(4) 第16期研連の構成について

各学会に依頼してあった第16期研連委員が報告され、重複して推薦された委員の取り扱いを決めた。地球物理学研連から推薦される2名については、研連発足後推薦を依頼することが了承されたが、発令が遅れるので、第17期からも研連推薦にするかどうかを次期の委員会で検討するように申し送ることとなった。



第16期活動計画決まる

平成6年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、9月28日から30日までの3日間、第120回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、総会の概要及び第16期活動計画についてお知らせします。

日本学術会議第120回総会報告

日本学術会議第120回総会は、平成6年9月28日から3日間にわたって開催されました。

この中で、①第16期の活動の指針となる「第16期活動計画(申合せ)」を賛成多数で可決しました。その他②第2部世話担当の「環境法学・環境政策学研究連絡委員会」の設置及び第3部世話担当の「技術革新問題研究連絡委員会」を「技術革新・技術移転問題研究連絡委員会」に名称変更することを内容とした日本学術会議会則の改正、③運営審議会附置将来計画委員会を改組して、移転準備委員会を設置することをいずれも賛成多数で可決しました。

なお、活動計画の内容は、下記のとおりです。

第16期活動計画(申合せ)

今世紀後半、世界は大きく変化し、今や重大な転換期を迎えるに至った。人類は、多くの新たな問題に直面し、21世紀に向けてその生存と繁栄のための新たな世界秩序を模索している。ここにおいて人類の「知」の適切な行使が求められ、学術に対する期待が高まるとともに、学術自体のあり方もまた問いなおされようとしている。このような世界情勢の中で、我が国の諸活動における学術の重要性はますます増大しており、我が国の将来は一に学術の発展にかかっているといっても過言ではない。

本会議は、科学が文化国家の基礎であるという確信に立って、科学者の総意の下に、我が国の平和的復興、人類社会の福祉に貢献し、世界の学界と提携して学術の進歩に寄与することを使命として設立された(日本学術会議法前文)。その後半世紀にわたり、本会議は我が国の科学者の内外に対する代表機関として、学術の進展に貢献してきたが、上記の学術の重要性にかんがみ、本会議の果たすべき役割は、さらに増大しつつある。

本会議は、その役割を遂行するために、以下のとおり第16期における活動計画を定め、人文・社会科学及び自然科学を網羅する我が国唯一の機関であるという特色を生かしつつ、これに即して活動する。

1. 活動の視点

日本学術会議は、第16期の活動において、以下の視点を重視する。

(1) 歴史的転換期における新たな展望の探求

人類の歴史は、今や重大な転換期を迎え、その先行きはきわめて不透明である。人類社会は、21世紀に向けてその未来を切り開くために、学術の発展をますます必要とし、学術の主体性を確立することを求めている。日本学術会議は、学術と社会との深い関わりに思いをいたし、人文・社会科学及び自然科学にわたる我が国の科学者の

総意を結集し、人類社会の新たな展望の探求のために、学術が果たすべき役割を考察する。

(2) 日本の学術研究体制の方向づけ

学術が果たすべき役割からみたと、日本の学術研究体制の現状には、早急に改善すべき点が多々存在する。特に、その中軸をなす大学、研究機関、学術団体は、研究の進歩に伴う新たな専門分化や、急速に進行しつつある学術の国際化、情報化に早急に対応することを迫られている。また、これらは、研究上の後継者を含む人材育成における深刻な困難に直面し、その克服の方法を模索している。日本学術会議は、日本の学術研究体制が新たな状況に対応し、人類社会の期待に応える研究成果を生み出すことができるように、その方向づけについて協力する。

(3) 国際学術活動への積極的貢献

我が国における学術の国際交流は、従来ややもすると先進諸国の学術を受容することに重点が置かれてきた。しかし、今や我が国には、国際平和の推進や環境問題の解決等、地球的、国際的規模の課題について、自らの研究を充実させつつ、広く世界の学術の発展に積極的に寄与することが求められている。

このため、日本学術会議は、日本の学術が受け身の態勢を脱し、その特色を生かしつつ、世界の学術の発展のためにイニシアティブを発揮することができるように、自らの役割を果たすべきである。

2. 重点課題

日本学術会議が対応すべき学術上の課題としては、(1)各学術分野に共通する学術研究体制上の当面の重要課題、(2)現在、人類社会が直面している重要課題で、人文・社会科学から自然科学にわたる総合的な知見が必要とされているもの、(3)今後重要となると予想される学術的な重要課題のうち、本会議として特に先見性を発揮して研究環境の整備等を訴えるべきもの、が考えられる。

本会議は、これらの中から早急に取り組むべき重点課題を設定し、人文・社会科学から自然科学にわたる全分野の科学者の意見を結集して検討にあたる。

これらのうち、特に緊急な対応を要する課題は、機動的かつ早急に審議を行い、その結果を対外的に発表する。さらに、第16期中に発生するであろう新たな問題についても、遅滞なく対応する。

日本学術会議は、発足して50年近くになるが、本会議そのもののあり方についても常に検討を続ける必要がある。現時点において取り組むべき重点課題を以下に示す。

(1) 21世紀に向けての新しい学術の動向
「知」の総合化や学術諸分野の再編成など、新しい学術の動向を、とりわけパラダイムの転換を中心に把握し、21世紀に向けての学術のあり方について検討する。

(2) 学術研究体制の整備

① 学術団体の支援・強化方策

さまざまな困難に直面している学術団体の現状を踏まえ、その支援・強化等の方策について検討する。

② 大学・研究機関における研究基盤の改革

大学院重点化やセンター・オブ・エクセレンスの構想等我が国の研究体制の新しい動向を把握し、大学・研究機関における研究基盤の改革について検討する。

③ 優れた研究者の養成・確保と教育

若者が理工系を始めとして長期の学習を要する学術分野を離れる傾向が指摘されていることから、優れた研究者の養成・確保方策について、教育のあり方をも含めて検討する。

(3) 科学者の地位と社会的責任

女性科学者の研究環境の改善について声明を発した第15期に引き続き、学問・思想の自由、科学者の地位と倫理・社会的責任について検討を深める。特に、我が国の若手研究者の研究環境を改善し、研究意欲を向上させるために、科学者の地位・処遇、研究費の配分、業績評価のあり方等について検討する。

(4) 学術情報・資料の充実・整備

① 学術における情報化の推進

今後極めて重要となるデータベースの作成やコンピュータ・ネットワーク・システムの整備など、学術における情報化の推進方策について検討する。

② 公的資料等の保存・施設の整備と公開

公的資料等の保存、その施設・設備の整備と公開手続の確立についてさらに前進させる。

③ 知的財産権

急速な情報技術の進展に伴い、顕在化してきた知的財産権の問題について、専門家の養成の問題をも含めて検討する。

(5) 国際学術交流・協力の推進

① 学術における国際化の推進と国際対応力の強化

学術分野における国際化の推進と国際対応力の強化方策について、いわゆるメガサイエンスにおける国際協力のあり方をも含めて検討する。

② 国際的にバランスのとれた学術交流・協力のあり方
欧米諸国との交流に偏っている現状を見直し、バランスのとれた学術交流・協力を実現するために、アジアを始めとする世界の諸地域との学術交流・協力のあり方や交流・協力のための基盤の育成方策について検討する。

③ 学術国際貢献のための新システム

学術分野における国際貢献のために必要とされ、第15期において検討された新たなシステムの構築について、さらに努力する。

(6) 高齢化社会の多面的検討

高齢化の急速な進行に直面しつつも、健やかに老いることのできる社会の実現のため、生き甲斐の問題や小児期からのライフスタイルの改善、雇用・年金・医療・福祉など高齢化社会に伴う経済上、法律上の諸問題、高齢化社会に向けての研究開発体制、高齢化社会に適合しうる医療とケアのシステムなどについて、老人医学を始めとする諸科学が協力して多面的に検討する。

(7) 生命科学の進展と社会的合意の形成

生命科学とその応用の急速な進展のもとら倫理的、社会的諸問題について、自然科学と人文・社会科学との協力の下に検討し、これら諸問題の解決方策の検討及びこれに対する社会的合意の形成に資する。

(8) 学術と産業

学術と産業の関わりの実態分析の上に立ち、今日の学術と産業とがそれぞれにとって有する意義と問題点とを明らかにするとともに、企業と大学・研究機関における適切な研究の役割分担や基礎的研究の研究体制など、学

術と産業との関係のあり方を行政の位置づけをも含めて検討する。

(9) 地球環境と人間活動

人類の経済社会活動の拡大等に伴い深刻化している環境問題について、エネルギーや土地の利用などの人間活動との関連や、ライフスタイルのあり方、人口と食糧の問題の検討を含め、持続可能な発展のための方策、及びこれに対する我が国の貢献のあり方について検討する。

(10) 脳の科学とこころの問題

今後の学術研究において重要な学際的課題となることが予想される脳の科学とこころの問題について、21世紀に向けての学術研究上の課題と展望とを明らかにするとともに、今後の研究体制のあり方について検討する。

(11) アジア・太平洋地域における平和と共生

国際的な平和の問題が新たな様相を呈している冷戦後の世界情勢を検討する中で、特にアジア・太平洋地域における平和と安全に関連する諸要因を分析し、貧困の克服と福祉の増進、経済発展と科学技術、文化の相互関係と多様な価値の共存の問題など、平和と共生に寄与するための学術的視点について、アジア・太平洋地域に重点を置いて検討する。

(12) グローバリゼーションと社会構造の変化

世界が、国際化・情報化・市場経済化などを通じてグローバルゼーションに向かって大きく変化している中で、我が国の産業空洞化、日本型経営・雇用慣行の変化、多国籍企業や知的財産権の問題、市民生活・文化へのインパクトなど社会構造に生じている新しい課題を洞察し、これに抜本的に対処するため、学術的視点から検討する。

3. 重点課題の審議

上記の重点課題の審議は、常置委員会及び今期の当初設置する特別委員会(別表2)がこれにあたる。両委員会は、速やかに審議を行い、第16期中(緊急性のあるものについては、1年ないし2年以内)に検討結果を発表する。常置委員会、特別委員会及び研究連絡委員会は、相互の連絡・協力を密にする。

なお、常置委員会及び特別委員会の所掌事項は別表1及び2に示すとおりである。

(別表1及び別表2省略)

※参考

〈常置委員会名〉 (事 項)

第1 常置—研究連絡委員会活動活性化の方策及び日本学術会議の組織に関すること。

第2 常置—学問・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること。

第3 常置—学術の動向の現状分析及び学術の発展の長期的動向に関すること。

第4 常置—創造的研究醸成のための学術体制に関すること及び学術関係諸機関との連携に関すること。

第5 常置—学術情報・資料に関すること。

第6 常置—国際学術交流・協力に関すること(第7 常置委員会の事項に属するものを除く)。

第7 常置—学術に関する国際団体への対応及びその団体が行う国際学術協力事業・計画への対応に関すること。

〈特別委員会名〉

高齢化社会の多面的検討

生命科学の進展と社会的合意の形成

学術と産業

研究者の養成・確保と教育

地球環境と人間活動

脳の科学とこころの問題

アジア・太平洋地域における平和と共生

グローバリゼーションと社会構造の変化

(注) 特別委の検討事項は「2 重点課題」の関係項に同じ。

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。関連の研究集会、シンポジウムの案内、人材の募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。海外の学会の参加報告やフィールドの体験談なども歓迎します。

本ニュースは年4回（大体2月、6月、9月、11月）発行されます。次回141号は5月中旬締め切り、6月上旬発行予定です。（編集担当 中井俊一）

編集者 中井俊一、鍵 裕之

〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部地殻化学実験施設

電話 03-3812-2111 (内) 4450 ファックス 03-3816-1784

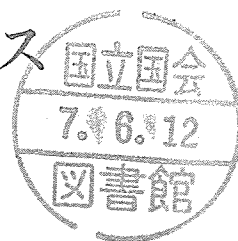
発行者 日本地球化学会 〒113 文京区本駒込5-16-9 学会センター C21

日本学会事務センター内 電話 03-5814-5801

日本地球化学会ニュース

No. 141

1995. VI. 7



1995年度日本地球化学会年会のお知らせ

主催 日本地球化学会（共催 日本化学会）
開催 11月10日（金）～12日（日）
会場 東海大学海洋学部 静岡県清水市
内容 一般講演（15分）
ポスターセッション
課題講演（20分）
1) 西部北太平洋域の大気化学
2) 海底における記録と変質—古海洋復元に向けて
3) 地球表層生物圏の微量元素の化学
4) 自然災害の地球化学
* 課題講演の内容は3ページの記事を参照して下さい。
* 十分な討論時間を持つために、一般・課題講演を通じ、口頭発表は1演者1件に限らせていただきます。2件目からはポスターセッションで発表をお願いします。
* 発表は原則としてOHPとします。
* スライドを希望する場合は、講演申込時にお申し出下さい。ポスターセッションの展示法については、申込者に改めてお知らせします。

講演申込締切り

7月25日（土）必着
本号添付の所定の申込用紙又はそのコピーをご使用下さい。

講演要旨原稿締切り

9月16日（土）必着
別添の“講演要旨作成上の注意”に従い作成してお送り下さい。

要旨集代

参加費

地球化学会会員 1,000円
非会員 2,000円 学生 無料

総会

懇親会

11月11日（土）開催
11月11日（土）18時30分から
ホテルサンルート清水（予定）で開催
会費 5,000円（学生 3,000円）

講演会

年会の開催時期にあわせて清水・静岡地区の高校・大学生および市民を対象とした地球科学の啓蒙活動として、静岡新聞社・SBS静岡放送および中部電力株式会社の共催を得て講演会を開催します。

題目 「南極と北極の神秘」
開催 主催日本地球化学会、共催静岡新聞社・SBS静岡放送、中部電力株式会社
日時 1995年11月12日（日）13～16時
場所 清水市文化会館
講師 次の方々を予定しております。
（助）日本極地研究振興会理事長 日本地球化学会名誉会員
鳥居 鉄也
アラスカ大学地球物理学研究所所長 赤祖父俊一

参加申込締切り

10月7日（土）必着
参加登録、懇親会、小集会、要旨集の申込には本号添付の申込用紙をご使用下さい。

送金

要旨集代、参加費および懇親会費は10月7日までに郵便振替でご送金下さい。
郵便振替 00830-5-50500
日本地球化学会1995年準備委員会

宿泊の予約

日本交通公社清水支店でお世話します。別紙を参照の上お申込下さい。また、東海大学社会教育センター・三保研修館も利用できます。当館は1室に5名前後のグループが宿泊するのに適します。料金は3,000円（食費を含みません）からで学生の皆さんにお薦めします。詳しくは下記まで直接おたずね下さい。東海大学社会教育センター・三保研修館 〒424 清水市三保2438番地 Tel. 0543-35-3315 Fax. 0543-34-9769

年会申込・連絡先

〒424 清水市折戸3丁目20番1号
東海大学海洋学部海洋科学科
1995年度日本地球化学会年会準備委員会 岡部 史郎
Tel. 0543-34-0411 内線2290
（または加藤 義久 Tel. 0543-34-0411 内線2296, Fax. 0543-34-0937, e-mail: ykato@simizugw. cc. u-tokai. ac.jp）

1995年兵庫県南部地震に関連した 特別措置のお知らせ

日本地球化学会 会長 半田 暢彦

1995年4月24日

1995年兵庫県南部地震で被災された皆様には、お見舞い申し上げます。

日本地球化学会では、今回の地震の被災者となられた会員の方々の窮状をささやかながら軽減していただこうと、関係幹事および評議員会で協議しました結果、以下の措置を執らせて頂くことといたしました。

地震時（1月17日）に、学会に登録している自宅住所または勤務先住所が災害援助法適用地域に該当し、被災した会員（一般正会員、学生正会員、賛助会員）のうち、希望する会員には、1995年度1年分の会費を免除といたします。

振込票あるいは口座自動引き落としにより、既に1995年度会費が納入されている場合には、これを1996年度会費に振り替え、1996年度会費が前納されているものとします。

この措置の適用を希望する会員は、1995年7月31日までに、日本学会事務センターの本学会宛、書面にて、その旨ご連絡下さい。

日本学会事務センターでの本措置の手続き事務完了後、本措置が実施された旨、措置の適用を希望した会員には通知いたします。

被災された会員が、転居等によりこの通知を受取にくい可能性もありますので、会員各位には、機会がありましたら、該当するお知らせの会員に本措置についてお知らせいただけるよう、お願い申し上げます。

なお、災害援助法適用地域は、以下の兵庫県10市10町および大阪5市です。

兵庫県：神戸市、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、明石市、三木市、洲本市、津名郡津名町、淡路町、北淡町、一宮町、東浦町、五色町、三原郡西淡町、三原町、緑町、南淡町
大阪府：豊中市、大阪市、池田市、吹田市、箕面市

この件でご不明の点等がございましたら、本学会庶務幹事にご連絡下さい。

〒113 東京都文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター 日本地球化学会
Tel. (03)5814-5801 Fax. (03)5814-5820

〒464-01 名古屋市中区千種区不老町

名古屋大学 大気水圏科学研究所

増澤 敏行（庶務幹事）

Tel. (052)789-3498 Fax. (052)789-3449

E-mail: masuzawa@ihas.nagoya-u.ac.jp

【選挙公示】

日本地球化学会1996・1997年度役員選挙の
立候補者および推薦候補者の届出について

本学会会則により1996・1997年度役員選挙を以下の日程で行います。

立候補者・推薦候補者締切	7月28日必着
選挙広報・投票用紙・会員名簿発送	8月下旬
投票締切	9月29日必着
選挙結果公表（総会）	11月11日

つきましては、下記の要領で会長・副会長・監事・評議員に対して、それぞれ立候補者および推薦候補者の届け出をしていただくようお願いいたします。

1. 会長1名、副会長1名、監事1名、評議員20名を選出します。
2. 立候補者の届け出は、届書を立候補者自身が、(1)本委員会に持参するか、または(2)本委員会宛に送付して下さい。
3. 推薦候補者の届け出は、推薦候補者名と推薦者名を記した届書に推薦候補者の承諾書を添えて、推薦者またはその代表者が、(1)本委員会に持参するか、または(2)本委員会宛に送付して下さい。なお役員選出細則第8条により、次の方々は次期評議員に選出することができません。
安部喜也、石渡良志、日下部実、杉崎隆一、鈴木德行、富樫茂子、中井俊一、野尻幸宏、松久幸敬
4. 第2項、第3項に記した以外の方で届け出が行われた場合には、届け出を受け付けることはできません。郵送の場合は裏に（選挙）と記入し、「書留郵便」として下さい。

5. 届け出の締切は、1995年7月28日（必着）です。
6. 本委員会の所在地は次の通りです。

〒113 文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地殻化学実験施設

中井 俊一

Tel. 03-3812-2111(内)4450 Fax. 03-3816-1784

第1回「鳥居基金」受賞者決定

「鳥居基金」委員会委員長 脇田 宏

第1回の「鳥居基金」助成について13名の会員から応募がありました。慎重に選考を行った結果、下記の方々に決定いたしましたので、ご報告いたします。

益田晴恵会員（大阪市立大学）10万円 海外派遣

第8回水一岩石相互作用国際シンポジウムに出席

ロシア共和国（1995年8月16日～22日）

平原 靖大会員（名古屋大学）10万円 海外派遣

ドイツ連邦共和国（1995年4月1日～10日） マックスプランク研究所との協同研究

青野辰雄会員（放射線医学研究所）

10万円 国内研究集会

1995年地球化学若手会開催 1995年8月4日～6日

研究助成「鳥居基金」募集のお知らせ

1995年度10月～3月分応募期限

1995年7月31日（月）

応募方法：所定用紙に記載した申請書を7月31日（月）までに学会事務局へ（当日消印有効）

提出先：〒113 文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内

日本地球化学会鳥居基金委員会

交付申請書は本号添付の用紙、もしくはこれを複写したものをご使用下さい。なお、この件についてのお問い合わせは本委員会委員長もしくは本会庶務担当幹事（下記）まで。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地殻化学実験施設

脇田 宏

Tel. 03-3812-2111(内)4621 Fax. 03-3816-1784

〒484-01 名古屋市中区千種区不老町

名古屋大学大気水圏科学研究所

増澤 敏行

Tel. 052-789-3498 Fax. 052-789-3449

平成6年度日産学術研究助成

対象者の決定のお知らせ

平成6年度日産学術研究助成に対し、本学会から一般研究2件、奨励研究5件の推薦を行いました。日産財団より2月23日付けで次の2件の採択の通知がありました。

奨励研究 東京大学教養学部 鈴木勝彦 160万円

奨励研究 東京都立大学理学部 奈良岡浩 160万円

なお本年の研究助成募集に関しては、本号の8ページをご覧ください。

1995年度清水年会の課題討論

- 1) 西部北太平洋域の大気化学

IGBP/IGAC (International Global Atmospheric Chemistry) のアジアでの活動の一つとして APARE (East Asian/North Pacific Regional Experiment, Convener; H. Akimoto) が進められている。その関連の活動として、本課題講演では人為起源物質の化学・輸送・変質過程について、その影響を大きく受ける西部北太平洋域

での海洋大気化学研究の最新の研究成果を討論したい。大気-海洋間での物質交換はどちらの方向のフラックスも海洋生物と密接な関係にある。海洋化学との関連も重視し、この海域を中心とした陸上、航空機、船舶などによる観測結果やモデリングなども含め、幅広く今後の研究方向を議論する機会としたい。

問い合わせ；

秋元 肇（東京大学先端科学技術センター、Tel. 03-3481-4502, Fax. 03-3481-4562, e-mail: akimothj@tansei.cc.u-tokyo.ac.jp）

植松光夫（北海道東海大学工学部、Tel. 011-571-5111 内線 614, Fax. 011-571-7879, e-mail: h00568@sinet.ad.jp）

- 2) 海底における記録と変質—古海洋復元に向けて
人類による環境破壊によって地球環境の貌が危惧されている。将来の地球環境を予測するためには、現在ばかりでなくごく近い過去の研究も重要であるという認識から、わが国でも IGBP/PAGES (Past Global Change) に対応して、古環境変遷を解きあかすべく様々な分野で研究が進んでいる。海底堆積物は過去の海洋環境の変遷を記録している重要な試料であるが、一方では時間経過と共に化学的にも変質している。そこで、この課題講演では堆積物中に記録された過去の海洋環境に関係した情報を正しく評価することを視点にして、海洋物質フラックス、海底境界層の物質循環、など現在の海洋と海底付近で起こっている現象も重視し、堆積物の変質と古海洋復元に関する最新の研究成果を討論したい。
問い合わせ；

大場忠道（北海道大学大学院地球環境科学研究科、Tel. 011-706-2233, Fax. 011-747-9780, e-mail: oba-tad@env.hines.hokudai.ac.jp）

加藤義久（東海大学海洋学部、Tel. 0543-34-0411 内線 2296, Fax. 0543-34-0937, e-mail: ykato@simizugw.cc.u.-tokai.ac.jp）

- 3) 地球表層生物圏の微量元素の化学

近年の炭素・窒素に関わる地球環境問題に関連して環境中での微量元素の役割について、再び関心が払われている。しかしながら、ここ10年ぐらい研究方法、分析方法、結果の解釈等でさまざまな問題を抱えている。さらに、微量元素の研究領域は、大気、海洋、陸水、土壌、生物と広範囲に渡っている。この課題討論では、地球表層生物圏（大気、海水、土壌、陸水、生物）に関係した元素の分布、循環、反応、存在状態等について分析方法も含めてできるだけ幅広く議論することにより、地球環境における微

量元素研究の今後の方向を探りたい。

問い合わせ；

鈴木 款（静岡大学理学部 Tel. 054-237-1111
内線 5820, Fax. 054-238-0491, e-mail; seysuzu@toubu2.shizuoka.ac.jp）
豊田恵恵（東海大学海洋学部, Tel. 0543-34-0411内線2292, Fax. 0543-34-0937）

4) 自然災害の地球化学

自然災害は、最近の雲仙岳噴火、阪神大震災に見られるように人的・経済的にも莫大な損害をもたらす。自然科学の研究体制そのものにも影響を及ぼす。予測される静岡県を中心とする東海地震の予知に関しても社会的関心は極めて高くなってきている。地球化学の分野では、地下水、温泉や火山ガスなど気体や流体にみられる化学変化を自然災害予知に結びつけようとする研究が進められてきている。自然現象の予測は本来地球化学のカバーする領域であるが、予知に結びつくためには観測の揺らぎの中から予知に結びつく本質的現象をいかに拾い出すかに関わってくる。この課題討論では、地球化学の様々な研究から地震予知、火山噴火予知などにどのように貢献できるのかを討論したい。そこで、従来の地球化学的観測結果や、それに関わる実験的研究の成果をまとめて、自然災害に対する地球化学の取り組むべき姿を探りたい。

問い合わせ；

野津憲治（東京大学理学部地殻化学実験施設
Tel. 03-3812-2111内線4624, Fax. 03-3816-1784, e-mail; notsu@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp）
川邊岩夫（名古屋大学理学部地球惑星科学科,
Tel. 052-781-5111内線2521, Fax. 052-789-3033）
和田秀樹（静岡大学理学部地球科学科 Tel. 054-237-1111内線5808 Fax. 054-238-0491, e-mail; sehwa@toubu2.shizuoka.ac.jp）

日本地球化学会

1994年第3回評議員会議事録

日時：1994年10月11日（火）15：00-19：00

場所：名古屋大学大気水圏科学研究所会議室

出席者：半田暢彦会長、高岡宣雄副会長、赤木右、安部喜也、池谷元伺、石渡良志、植松光夫、兼岡一郎、日下部実、齋藤和男、杉崎隆一、鈴木徳行、田中剛、富樫茂子、中井俊一、中村俊夫、野尻幸宏、野津憲治、福島和夫、増澤敏行、松久幸敬、村江達士（以上評議員）、岡部史郎（加藤

義久評議員の代理）

1. 前回議事録を承認した。

2. 報告事項

2.1 庶務・幹事会（増澤評議員）

- 1) 平成6年度「研究成果公開促進費」交付申請書を提出し（6/15）、交付決定通知書（8/12）、および送金通知書（9/12）を受領した。（174万円）。
- 2) 平成6年度「研究成果公開促進費」状況報告書を提出した（10/1）。
- 3) 8月末現在での住所不明会員6名の所在確認を行った。
- 4) 1995年度からの学会費の預金口座自動引き落としを実施した。初期登録料250円/件、引き落とし手数料200円/回は学会が負担する。9月30日申込締切で申請者は151名。
- 5) 会費未納会員へ会費納入申請書を発送した（4年以上5名、1-3年71名）。
- 6) 1995年度からGJと地球化学の販売をテラ学術出版に委託するにあたり、12月中旬に契約書を締結すべく作業中である。
- 7) 2件の学会等の後援を承認した。
- 8) 研究助成2件、学術賞候補者推薦4件、教官公募6件、書評依頼2件を回覧した。
- 9) 調査アンケート2件に回答した。
- 10) 「地球化学」Vol. 28No. 1およびNo. 2（1994）とVol. 27No. 1およびNo. 2（1993）が当初印刷部数が少なく遅れて会費を納入した会員への配付部数が不足しているため各100部を復刻する。

幹事会は10月8日14：00-18：00に東京大学山上会館201号室で開催した。出席者は、半田会長、高岡副会長、赤木、坂田、中井、野尻、増澤、松久の各幹事と大隅GJ編集庶務で、第3回評議員会の議事内容について整理した。

2.2 編集

(1) Geochemical Journal（松久評議員）

Vol. 28No. 3（Crater Lakes 特集号）を発行し、305頁となった。No. 4が印刷中で10月中旬に発行予定。No. 5とNo. 6（Basalt Geochemistry 特集号の見込み）もほぼ編集が完了しつつある。10月8日現在の投稿論文は33編。No. 3から英文入会申込書を巻末に綴じ込んでいる。

(2) 地球化学（杉崎評議員が代理報告）

Vol. 28No. 2を9月中旬に刊行し、総ページ155pとなった。

(3) ニュース（中井評議員）

No. 138を8月に発行した。No. 139は学会賞募集、春季シンポジウム、鳥居基金の募集、会員1,000名達成などが主記事で、10月20日ごろ原稿締切で11月上旬に発行の予定。

2.3 行事（赤木評議員）

1995年地球惑星科学関連学会合同大会は日本大学

で3月27日-30日に開催する。地球惑星科学関連学会連絡会では、常設事務局の設置、各学会の欧文誌の合本化の検討を進めている。1994年会（杉崎評議員）の申込状況は、研究発表280件（内ポスター50件）、参加申込350人、エキスカージョンの参加申込20人である。1995年度年会（代理岡部会員）は11月10-12日に東海大学海洋学部（清水）で開催の予定。

2.4 会員（富樫評議員）

6月に全会員数が念願の1,000名に達した。これを記念して、年会懇親会の席で1,000名目の新入会員に会長から図書券と会長の著書が、前後数名に評議員から寄贈された著書が贈呈される。GJには英文の、地球化学には和文の、本学会入会申込書の毎号への巻末綴じ込みを開始した。

2.5 委員会

(1) 将来計画委員会（高岡副会長）

各委員にFax、手紙等で意見を聞いている。その中で地球化学の良い教科書の必要性が話題となっており、今後検討を継続していく予定である。

(2) 鳥居基金委員会（中井評議員代理報告）

「鳥居基金」応募要項および応募書式を整備した。1995年4月から9月に実施の第1回募集を1995年1月末締切で行う。

(3) 日産学術助成推薦委員会（半田会長）

平成6年度日産学術助成は、推薦委員会による応募書類（一般研究3件、奨励研究5件）の審査をへて、一般研究2件、奨励研究5件を推薦した。

2.6 学術会議

(1) 平成7年度科学研究費細目地球化学の一段審査委員候補者推薦（半田会長）
評議員による郵送投票を行い、上位6名から会長と副会長が研究分野も考慮して、固体系流体系各1名を推薦した。

(2) 第16期日本学術会議研究連絡委員会委員候補者の推薦（半田会長）

評議員による郵送投票を行い、地球化学宇宙化学研究連絡委員会には石渡良志評議員、野津憲治評議員、田中剛評議員、半田暢彦会長、松田准一会員の5名と補欠として日下部実評議員、下山晃会員の2名を、鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会には富樫茂子評議員を、陸水研究連絡委員会には安部喜也評議員を、海洋科学研究連絡委員会には野崎義行会員を推薦した。

(3) 地球化学宇宙化学研連（石渡評議員）

7月6日と9月1日に第15期最後の委員会があった。そこでは、第16期への申し送り事項をまとめた。特に本研連と本学会の幹事会や評議員会との

連携の必要性が指摘された。

(4) 陸水研連（安部評議員）

7月8日に15期最後の委員会があり、15期のまとめを行った。

(5) 海洋科学研連（半田会長）

6月13日に委員会が開かれ、現在進行中の大型プロジェクトおよび第16期の課題について議論した。

3. 審議事項

3.1 入会退会承認

1994年5月1日から8月31日までの入会退会者を以下のとおり承認した。

入会（18名）：（正会員）山本政儀、甲斐綾子、Christian FOUILLAC、（以下学生）小藤久毅、島田顕臣、阿部理、三ツ口丈裕、岡俊英、小村哲司、河野日出夫、米延仁志、熊本雄一郎、柴田智郎、佐藤圭子、小田浩、西尾嘉朗、下川修司、山中寿朗
退会（6名）：（正会員）今枝一男、殷建華、中村栄三、藤井隆（逝去1994.7.16）、田中信也、竹花大介

また、その他の移動は以下のとおりである。

学生→一般（1名）：久保紀重

国内→海外（3名）：坂巻幸雄、豊田新立川和代

この結果会員数は以下の様になった。

	正会員(学生)	賛助会員	名誉会員	計(在外)
1994年5月1日	968(68)	17	9	994(30)
入会	18(15)			18(+1)
退会	-6(0)			-6(0)
変更	(-1)			(+3)
1994年8月31日	980(82)	17	9	1,006(34)

3.2 会長が委嘱する追加評議員の承認

会長が委嘱する追加評議員として加藤義久会員（1995年度年会担当；東海大学海洋学部）に委嘱することを承認した。

3.3 日本地球化学会学会賞受賞者選考細則の一部改正

1994年度受賞者選考委員会からの提案に基づいて検討を行い、学会賞受賞者選考細則の一部を下記のように改正することを承認した。

1) 第2条の「5名の委員」を「6名の委員」に改める。

2) 第3条の「委員の任期は一年とする。ただし重

任を妨げない。」を「委員の任期は2年とし、毎年委員の半数を改選する。」に改める。

3) 第4条の「委員は、学会賞等の受賞候補者の被推薦者、および推薦者であってはならない。」を「委員は、学会賞等の受賞候補者の被推薦者であってはならない。」に改める。

4) 「第9条：本細則の改正は評議員会の議決による。」を新たに設ける。

5) 「附則：本細則は1994年10月11日より施行する。」を新たに設ける。

3.4 日本地球化学会受賞規定の一部改正

学会賞等の英文名称について、この春以来検討を重ねてきたが、受賞規定の各賞名に英文名称を付加する形で、下記のように改正することを承認した。

1) 第1条の、「柴田賞」を「柴田賞(The Shibata Award)」に、「日本地球化学会賞」を「日本地球化学会賞(The Geochemical Society of Japan Award)」に、「日本地球化学会奨励賞」を「日本地球化学会奨励賞(The Geochemical Society of Japan Award for Young Researchers)」に、「日本地球化学会功労賞」を「日本地球化学会功労賞(The Merit Prize of the Geochemical Society of Japan)」に改める。

2) 第10条の「本規定は1990年10月2日より施行する。」を「本規定は1994年10月11日より施行する。」に改める。

3.5 1995年度学会賞等受賞者選考委員会委員の選出
受賞者選考細則の改正をうけて、1995年度学会賞等受賞者選考委員会委員として、投票の結果、任期1年の委員として田中剛評議員、脇田宏会員、高岡宣雄副会長の3名を、任期2年の委員として野津憲治評議員、日下部実評議員、石渡良志評議員の3名を選出した。委員長を、田中剛評議員に委嘱した。

3.6 1994年度総会提出議案について

1994年度総会に提出する議案として

- 1) 1993年度事業報告ならびに決算報告および監査報告
- 2) 1994年度事業中間報告ならびに決算中間報告
- 3) 1995年度事業計画ならびに予算案を審議のうえ、原案通り承認した。

4. 次回

1995年第1回評議員会

2月18日(土) 14:00-17:00 東京大学本郷

1995年第1回幹事会

2月4日(土) 14:00-18:00 東京大学本郷

1995年第1回評議員会議事録要旨

1995年第1回評議員会は、2月18日(土)14時より半田会長を始め21名が出席して、東京大学山上会館地階001号室で開かれた。以下に議事録の概要をまとめる。正式な議事録は次回評議員会で承認後、ニュースおよび「地球化学」に掲載する。

1. 庶務、編集、行事、会員に関する報告および各委員会ならびに学術会議研連等からの報告があった。
2. テラ学術図書出版とGJ等の販売に関する1995年度契約書を締結した。GJおよび地球化学のバックナンバーを日本学会事務センターからテラ学術図書・出版へ輸送した(段ボール60個)。
3. 1995年度学会賞等受賞候補者の推薦を1995年1月末に締切り、計7件の推薦があった。
4. 1995年度第1回鳥居基金の募集を1995年1月末に締切り、海外渡航11件、集会2件の応募があった。
5. 11月7日に第16期の第1回地球化学宇宙化学研連委員会が開催され、担当会員は青木謙一郎会員で、委員長に石渡評議員が選出された。
6. 平成7年度科学研究費研究成果公開発表(B)の企画立案を蒲生俊敬会員にお願いし、「深海底の温泉を知っていますか」という学術講演会を科学技術館サイエンスホールで11月27日に開催する申請書を提出した。
7. 本学会を取り巻く国内および国外の状況についての情報を集積し、総会の際に副会長から報告していただくこととした。
8. 1994年9月1日から12月31日までの入会16名(正会員16名、内学生4名)、退会2名(正会員2名)を承認した。その結果正会員993名(学生84名を含む)、賛助会員17名、名誉会員10名、計1,020名(在外35名を含む)となった。
9. 会費の長期滞納者4名の除籍を承認した。
10. 1996-97年度役員選挙選挙管理委員として、投票の結果、中井評議員、富樫評議員、石渡評議員が選出され、委員の互選により中井評議員が委員長となった。
11. 1996年度年会開催地を北海道大学地球環境科学研究科(札幌市：責任者角皆静男会員)とすることを承認した。
12. 会員情報確認書に掲載する会員向けアンケートの内容を承認した。
13. 1995年度会員名簿で、ハンドブック機能を強化することを承認した。
14. 池谷評議員から提案のあった兵庫県南部地震に関連した論文集の発行などについて、意見交換の結果、

野津評議員に取扱を一任した。

なお、1995年度の会議日程は、第2回幹事会6月10日(土)(名古屋大学大気水圏科学研究所)、第2回評議員会6月17日(土)(東京大学山上会館地階001号室)、第3回幹事会11月4日(土)(東京大学本郷)、第3回評議員会11月9日(木)(東海大学海洋学部；清水)第4回評議員会(新旧合同)11月12日(日)(清水市内)の予定。

【新入会員紹介】(1994.9.1-12.31)

正会員 16名(内学生4名)

前川 竜男 地質調査所地殻化学部
吉村 潤也 熊本大学大学院理学研究科地学専攻
小池 祐一 近畿大学理工学部化学科
山田 隆二 京都大学理学部地質学鉱物学教室
吉岡 崇仁 名古屋大学大気水圏科学研究所
吉井 直美 千葉県環境研究所大気第二研究室
金 龍 沅 北海道大学大学院地球環境科学研究科
川上 紳一 岐阜大学教育学部
辻 治雄 甲南大学理学部化学科
北田奈緒子 大阪市立大学理学部地学教室
TANYILEKE, Gregory
Inst. Geol. Mining Res.,
Cameroon

徳永真由美
田中 伸幸 財電力中央研究所狛江研究所
平田 静子 中国工業技術研究所
原 久雄 陸上自衛隊少年工科学校第二教育部
今栄 直也 神戸大学大学院自然科学研究科

【変更者紹介】

正会員一名 名誉会員 1名
猿橋 勝子 地球化学研究協会
学生→一般 3名
矢板 毅 日本原子力研究所プロセス化学研究室
高橋 尚毅 山形テレビ技術局
山本 茂 資源エネルギー庁長官官房鉱業課
一般→学生 1名
立川 和代 U.M.R.39, CNES/CNRS,
Toulouse, France
国内→海外 3名
松原 佳代 Centre de Recherches,
Petrographiques et Geochemiques,
Vandoeuvre, France
坂田 将 Dept. Geol. Sci., Indiana Univ.,
Bloomington., IN, U.S.A.
山下 勝行 Dept. Geol. Univ. Alberta,
Edmonton, Canada
海外→国内 3名

新垣 武

石川 剛志 静岡大学理学部地球科学科
田中 教幸 北海道大学大学院地球環境科学研究科
所属変更 25名(内学生14名)
坂本 充 滋賀県立大学開設準備室
鈴木 徳行 北海道大学大学院地球惑星物質科学教室
坂本 尚義 東京工業大学理学部地球惑星科学科
渡辺 一樹 海上保安庁水路部企画課海洋研究室
鈴木 昌弘 東京大学海洋研究所海洋生化学部門
寺田 信之 財電力中央研究所物理化学部
篠原 亮太 北九州市環境科学研究所アクア研究センター

根山 敦史 コンピューターソフト開発(株)技術本部
角皆 静男 北海道大学大学院地球環境科学研究科
乗木新一郎 北海道大学大学院地球環境科学研究科
渡邊 修一 北海道大学大学院地球環境科学研究科
成田 尚史 北海道大学大学院地球環境科学研究科
奥田 耕三 北海道大学大学院地球環境科学研究科
小笠 恒夫 北海道大学大学院地球環境科学研究科
武井 直子 北海道大学大学院地球環境科学研究科
春日井智恵 北海道大学大学院地球環境科学研究科
川村 嘉勝 北海道大学大学院地球環境科学研究科
佐々木建一 北海道大学大学院地球環境科学研究科
澤田理栄子 北海道大学大学院地球環境科学研究科
清水 統 北海道大学大学院地球環境科学研究科
浜原 和広 北海道大学大学院地球環境科学研究科
荒巻 能史 北海道大学大学院地球環境科学研究科
兎東 直昭 北海道大学大学院地球環境科学研究科
鶴島 修夫 北海道大学大学院地球環境科学研究科
大槻 晃久 北海道大学大学院地球環境科学研究科

1995年度地球化学若手会

1995年度地球化学若手会を下記の要領で開催いたします。つきましては、皆様方お誘い合わせの上奮ってご参加下さい。

記

開催日程 8月4日(金)から6日(日)
4日 15時 受付, 16時~17時 講演,
20時 ナイトセッション
5日 午前 自己紹介, 午後 講演
19時 ナイトセッション
6日 午前 講演 昼食後解散
テーマ 水圏をとりまく化学過程
開催場所 培本塾 (静岡県榛原郡榛原町)
参加費 学生 ¥9,000 一般 12,000

問い合わせ先

青野 辰雄

〒311-12 ひたちなか市磯崎3609

放射線医学総合研究所

海洋放射生態学研究所

Tel. 029-265-7137 Fax. 029-256-9659

e-mail t.aono@nirs.go.jp

南 秀樹

〒005 札幌市南区南沢5-1-1

北海道東海大学海洋開発工学科

Tel. 011-571-5111 (ex650)

Fax. 011-571-7879

1995年地球化学研究協会学術賞
「三宅賞」の受賞候補者および
研究助成候補者の推薦依頼について

三宅泰雄教授退官記念事業として1972年に設立された地球化学研究協会は、その翌年から、地球化学に顕著な業績をおさめた科学者に、毎年、地球化学研究協会学術賞「三宅賞」を贈呈しています。

さらに1983年からは、海外シンポジウムに出席・論文を発表し、または海外の学術研究調査等に参加する地球化学の若手研究者に対し、助成を行っています。

なお、賞金および助成金は本協会を母体として、1983年に創設された公益信託「地球化学研究基金」（受託者 東洋信託銀行株式会社）から贈られます。

つきましては、下記の要領により、受賞候補者および研究助成候補者のご推薦をお願いします。なお、最近3年間の三宅賞受賞者および昨年の研究助成受領者は次の通りです。

三宅賞

第20回（1992）東京大学教授 兼岡 一郎博士
「希ガスの同位体比によるマントル二重構造の研究」

第21回（1993）作陽短期大学教授 馬淵 久夫博士
「考古学試料の鉛同位体地球化学」

第22回（1994）学習院大学教授 長沢 宏博士
「微量元素のケイ酸塩の各相間の研究」

研究助成

第10回（1994）広島大学理学部地球惑星システム学科
助教授 五十嵐文二博士
「Primitive Xe in the atmospheres of Earth and Mars」（アメリカ、カリフォルニア、1994年9月）

工業技術院地質調査所鉱物資源部主任
研究官 篠原 宏志博士
「マグマの脱ガスと熱水系の形成に関

する研究」（カナダ、ビクトリア、1995年5月）

記

三宅賞

1. 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は、1年1件（1名）とします。
4. 規定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務局までお送り下さい。

研究助成

1. 研究助成は地球化学の研究者で、海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者、ならびに海外における学術調査研究などに参加する者に対して行なわれます。
2. 助成金は1件10万円とし、年に3件とします。
3. 規定の用紙に推薦候補者（各締切日において満40才迄とする）のシンポジウム出席については略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、開催年月日）、論文題目、推薦理由等を、海外学術調査に関しては、略歴、研究業績、調査地（国名、地域名）、調査目的・計画、推薦理由、同行者などを記入して、協会事務局までお送りください。

三宅賞の贈呈および研究助成者の発表は、1995年12月2日（土）、東京で行ないます。

申込締切日は 三宅賞は 1995年8月31日

研究助成は 第1回締切 1995年8月31日

第2回締切 1995年1月15日

地球化学研究協会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話 03-3330-2455（FAX 兼用）

第22回日産学術研究助成募集について

日産科学振興財団よりの研究助成の案内について要旨を掲載します。

このうち一般研究助成および奨励研究助成について、課題1の「人間特性の理解」および課題2の「地球表層部の自然メカニズムの理解」に関して、本学会を推薦依頼先団体に追加する旨連絡がありました。各推薦学協会の推薦枠は、一般研究については2件以内、奨励研究については全件推薦となっております。財団への学会からの推薦の締切は平成7年8月31（木）です。申請希望の方は、7月28日（金）必着で、下記庶務幹事増澤敏行まで、申請書をご提出下さい。申請用紙は下記財団あて御請求下さい。一般研究への申請希望が2件を超える場合

には、評議員会内に設置する推薦委員会で選考のうえ、2件以内を財団へ推薦いたします。

増澤 敏行（日本地球化学会庶務幹事）

〒464-01 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大気水圏科学研究所

Tel. (052) 789-3498

Fax. (052) 789-3449

＜助成の対象＞

I. 総合研究

1. 「人間－自然環境系」に関する研究
人間と自然環境との共存に関する学際的総合研究。
2. 「人間－人工環境系」に関する研究
人間活動の所産としての人工環境と人間生活の係わりを総合的に把握した学際的総合研究。

■助成、金額は1件当り1,000万円限度で数件の採択を予定している。

II. 一般研究・奨励研究

つぎに例示するような先駆的または独創的基礎研究を助成の対象とし、課題1については人文・社会科学を含めた学際的研究に助成する。

◆研究課題

1. 工学・認知科学などにおける人間の特性に関する基礎研究
人間の知的機能や感覚・運動機能に学びあるいは適合する研究の必要性が高まっている。この研究では、工学・認知科学などにおける①人間の特性の表現と理解に関する基礎研究、ならびに②これを踏まえた境界領域の基礎研究を期待する。
2. 地球表層部における自然のメカニズムの理解に関する基礎研究
フロンによるオゾン層の破壊、地球温暖化、砂漠化のような、大気・海洋・地表面で構成されている環境の人為的变化を予測し、防止するために、地球表層部における自然のメカニズムの理解を目的とした基礎研究を期待する。

■助成の要件（一般研究）

- ① 既ね45歳以下の研究者が主体となって、いくつかの専門領域にわたり、緊密な連携のもとに行われる、実質的な研究体制を条件とする。
- ② 研究期間は原則として2～3年とする。

■助成・金額（一般研究）は1件当り1,000万円限度で10件程度の採択を予定している。

■助成の要件（奨励研究）

- ① 若手の研究者（35歳以下）が自ら計画した研究課題を推進する有望な個人研究に助成する。特に博士号取得後の研究基盤確立のための支援を重視

する。

② 研究期間は原則として1年とする。

■助成・金額（奨励研究）は1件当り200万円限度で25件程度の採択を予定している。

III. 海外共同研究

現地の自然や生活文化を踏まえて、つぎに例示するようなフィールドワークを主体にした、自然科学と人文・社会科学を含む学際的な研究に助成する。

◆研究課題

1. 人間－自然系における自然環境の保全と人間生活との調和に関する研究
2. 都市環境の解析と改善に関する研究

IV. その他助成「ワークショップ」

※詳細は事務局まで問い合わせして下さい。

＜応募要領＞

■申請方法

※総合研究および海外共同研究は、直接当財団研究助成係に申請すること。

※一般研究および奨励研究は、当財団指定の43学・協会の推薦を要しますので、各学・協会へ直接申請下さい。

■推薦の枠

※一般研究は、各学・協会に2件以内の推薦を依頼しております。

※奨励研究は、各学・協会とも原則として申請のあった全件の推薦を依頼しております。

■締切日

直接公募の受付け締切は、平成7年8月31日（木）です。一般研究、奨励研究の本学会の締切は、平成7年7月28日（金）です。

■申請用紙

申請用紙は送料分の切手（1部190円速達分460円）を同封の上、助成区分の種類（総合研究、一般研究用、奨励研究用、海外共同研究用）と必要部数を明記して当財団研究助成係宛請求下さい。

資料請求・問い合わせ先

財団法人 日産科学振興財団研究助成係

〒104 東京都中央区銀座6-17-2

日産ビルネット2

Tel. (03) 3543-5597

Fax. (03) 3543-5598

神戸大学地球惑星科学科教官公募のお知らせ

1. 職名・人員 助手・1名
2. 所属部門
地球科学大講座 教育研究分野：地殻テクトニクス
3. 専門分野および内容

- 活断層とネオテクトニクスに関連する教育・研究を行い、野外実習の指導のできる方を公募いたします。
4. 応募資格 学位（博士）を取得された方あるいは取得見込みの方を希望します。
5. 着任時期 決定後なるべく早い時期を希望する。
6. 提出書類 (1) 履歴書
(2) 業績リスト（論文については査読の有無で区別のこと）
(3) これまでの研究経過（1000字以内）および今後の教育・研究計画（1000字以内）
(4) 応募者について意見を伺える方2名の氏名と連絡先（外国人の研究者でも可）
(5) 主要論文の別刷りまたはコピー（5編以内）
7. 公募締め切り 平成7年9月20日（水）必着
8. 問い合わせ先
神戸大学理学部地球惑星科学科 地殻テクトニクス
宮田隆夫
Tel. 078-803-0569 Fax. 078-803-0490
9. 書類提出先
〒657 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学理学部地球惑星科学科
学科長 伊東敬祐 宛て
書類は封筒に「地殻テクトニクス助手応募書類」と朱書きし、簡易書留で郵送してください。

通商産業省工業技術院研究職
選考採用者の募集について

工業技術院の全国15の研究所では次のとおり研究者を募集しています。各所「募集概要」を必要な方は5月中旬頃から随時発送しますので、下記へご連絡願います。

①募集人員：約30名。②募集分野：化学、物理、電子、機械等広範囲な分野で募集しています。③応募資格：博士課程修了者または見込者（学位取得が可能な者）かつ昭和37年4月2日以降生まれの者。④給与：博士課程修了後ただちに採用された場合は、247,600円の基本額と諸手当。⑤提出書類：履歴書、学部・修士・博士それぞれの修了及び成績証明書、修士及び博士論文の要約、研究業績の要約2～3点。⑥公募締切：平成7年7月31日。⑦選考方法：提出書類等をもとに8月～9月上旬に採用予定の各研究所で行う予備審査と9月中に最終審査を実施して候補者を決定。⑧採用予定日：平成8年4月1日。⑨書類提出先：希望する研究所へ直接。⑩その他：公務員宿舍、土日祝日休み、有給・夏季休暇あり。

連絡先：筑波研究支援総合事務所 研究企画調整官室

Fax. 0298-55-3833（電話での問い合わせ不可）
第11回日本腐植物質研究会の開催

主催：日本腐植物質研究会
日本腐植物質研究会は腐植物質に関連した研究の発展と知識の交流をはかり、自由な討論の場を作ることを目的として発足しました。1984年より毎年1回の研究会を開催しています。本年度は、土壌中の腐植物質の特徴、天然水中の腐植物質の特徴、および腐植物質と金属、放射性核種、有害有機物との相互作用に関連する3つのテーマを設定して、地球表層における腐植物質の挙動と役割について研究発表と討論を下記の要領で行う予定にしています。皆様の研究発表および参加を歓迎いたします。講演または参加ご希望の方は下記宛にご連絡下さい。

日 時：1995年11月16日、17日（金）
場 所：日本原子力研究所東海研究所
（JRR 常磐線東海駅下車）
講演申込締切：1995年8月15日
講演要旨および参加申込締切：1995年9月15日
参加費：会員 1,000円 非会員 3,000円
連絡先：〒319-11 茨城県那珂郡東海村白方白根2-4
日本原子力研究所東海研究所環境安全研究部
天然バリア研究室内
第11回腐植物質研究会準備委員会 長尾 誠也
Tel. 0292-82-5085 Fax. 0292-82-5934

日本水文学会
1995年度学術大会および総会のお知らせ

会 期：1995年6月17日（土）～18日（日）
会 場：日本大学文理学部（世田谷区桜上水3-25-40）
Tel. 03-3329-1151
日 程：6月17日（土）9時30分～
シンポジウム、一般研究発表、総会、懇親会
6月18日（日）9時30分～17時
一般研究発表
費 用：大会参加費 1,000円（学生 500円）
予稿集代 1,500円
懇 親 会 5,000円

「DESERT TECHNOLOGYⅢ」
第3回国際沙漠技術会議

主 催：日本沙漠学会
共 催：米国工学財団
後 援：本学会他
表記の会議が1995年10月15日（日）夕刻～20日（金）昼まで、富士五湖のひとつである本栖湖、富士本栖湖ホテルにて開催されます。現在、口頭発表が締め切られ、

1995年度日本地球化学会年会

[A] 講演申込用紙 **7月25日（土）必着**

講演番号 ←（学会事務局で記入）

研究題目

発表者所属（複数のときは、所属名の右肩に番号を付ける）

発表者氏名（○印は連名の場合の講演者。所属が複数のときは氏名の右肩に番号を付ける）

講演抄録（和文、150～180文字以内）

キーワード（10文字以内の日本語で、最大5個まで。言葉同士は・で区切ること）

ふりがな欄（発表者全員の氏名のふりがなを記入）

○御希望の発表形式について、次の何れかを○で囲んで下さい。

課題講演：課題1 課題2 課題3 課題4

一般講演：口頭 ポスター

発表分野（一般講演のみ）：大気・降水 岩石・地殻 鉱床 有機物 生物 陸水 温泉
熱水 地球外物質 海洋 堆積物 火山 その他（ ）

○返信用（上記と同じものをお書き下さい。）

演題

氏名（所属）

住所 〒

氏名

様

1995 年度日本地球化学会年会

[B] 参加申込用紙

10月7日(土) 必着

ふりがな

氏 名

所 属

連絡先(自宅・勤務先)

〒

○参加登録(いずれかを○で囲んで下さい)

講 演: 有 無

参加費: 会員 1,000円 非会員 2,000円 学生 無料

要旨集: 要 4,000円 不要

懇親会: 参加(一般 5,000円 学生 3,000円) 不参加

送金合計 円

○送金先

郵便振替 00830-5-50500 日本地球化学会1995年準備委員会

送 金 日 月 日

○要旨集送付先(必ず御記入下さい)

住所 〒

氏名

様

○申込用紙送付先 〒424 清水市折戸3丁目20番1号

東海大学海洋学部海洋科学科

1995年度日本地球化学会年会準備委員会

岡 部 史 郎

電話 (0543) 34-0411, Fax (0543) 34-0937

講演要旨作成上の注意

- 1) ワープロで記入して下さい。
- 2) 全体の記入枠は、A4 の用紙に縦横それぞれ235×165mm 内に設定して下さい。刷り上がりは B5 版になります。
- 3) 枠内左上端に横 40mm×4 行サイズの講演番号記入用の空白を残して下さい（例参照）。番号は印刷に廻す時に委員会で挿入します。
- 4) 演題，所属，発表者（講演者の左側に○を付す）は例示に準じて記入し，本文は 5 行目から始めて下さい。
- 5) 下欄の 2～3 行に英文で演題，所属，発表者（講演者の左側に○を付す）をお書き下さい（例参照）。
- 6) 図表が必要な場合は，本文欄内に直接記載もしくは貼りつけて下さい。
- 7) 用紙は，A4 版のワープロ専用紙か，それに相当する上質紙を縦型に使用して下さい。
- 8) 印字は鮮明をお願いします。そのためには 24 ドット以上であることが望ましいですが，24 ドット以上でも，プリントの薄いものや不鮮明なものはご遠慮下さい。
- 9) 一般講演は 1 枚，課題講演は 2 枚以内の用紙にお書き下さい。

（例）

1A 01 熱帯における化学物質の使用とその地球汚染への影響

○立川 涼・田辺信介・A. Ramesh・岩田久人（愛媛大農）

最近，北極圏における農薬汚染の実態が明らかにされ，およそ8,500トンにのぼる大量のBHCが海水に残存し，毎年500トンを超える量が海流によって南下していると報告された。人工化学物質による北極圏の汚染は急速に進行し，その原因は東欧やソビエトなど極域周辺の国々ばかりでなく，低緯度開発途上国における人間活動や産業活動の影響も ……………

Use of Chemicals in the Tropical Environment and Impact on Global Pollution

○R. Tatsukawa, S. Tanabe, A. Ramesh and H. Iwata

(Faculty of Agriculture, Ehime University)

◆お申込み・お問い合わせ先

J T B 清水支店 〒424 清水市相生町7-20
 *営業時間 (月~金) 09:30~17:30
 (土) 09:30~12:30 日曜祝日休業
 TEL (0543) 51-0939
 FAX (0543) 51-2257

----- 切り取り線 -----

1995年度日本地球化学会年会宿泊申込書

お申込日 19 年 月 日

宿 泊 者 氏 名	室タイプ ※0をつけて ください。	宿 泊 日			希望ホテル番号		備 考
		11/9	11/10	11/11	第1希望	第2希望	
例) 田 中 一 郎	シングル ・ ツイン	×	○	×	1	2	
	シングル ・ ツイン						
	シングル ・ ツイン						
	シングル ・ ツイン						
	シングル ・ ツイン						

※希望ホテルが満室の場合、他のホテルに変更が可能かどうか必ず○をつけてください。
 (可 ・ 不可)

申込代表者		自宅電話	() -
勤務先 部 局 名		勤務先電話	() - 内線
クーポン 郵送先住所	〒 - 自宅・勤務先		

*クーポンの発送は、10月中旬にさせていただきます。

1995年度日本地球化学会年会宿泊のご案内

謹 啓

皆様方にはご清栄のこととご推察申し上げます。

さて、1995年11月10日(金)～12日(日)に東海大学で開催されます学会の宿泊を、JTB清水支店がお世話させていただくことになりました。

ここに、ご案内させていただきます。

当地清水においては、皆様のご訪問に対して充分といえるだけの宿泊のご準備ができかねますのでお早めのお申込みをお待ちしております。

敬 具

◆宿泊ホテル及び料金

No	ホテル名	場 所	室タイプ	料金(税サ込)	会場までの交通
1	ホテル サンルート清水	静岡鉄道 新清水駅 徒歩1分	シングル ツイン	9,500円 8,500円	新清水駅前より バス20分 東海大学前下車 徒歩3分
2	ホテル クエスト清水	JR清水駅 徒歩2分	シングル	スタンダード 10,500円 デラックス 11,500円	JR清水駅前より バス25分 東海大学前下車 徒歩3分
3	シーグランド清水 ステーションホテル	JR清水駅 徒歩2分	シングル	9,800円	JR清水駅前より バス25分 東海大学前下車 徒歩3分
4	清水サンポート ホテル	静岡鉄道 新清水駅 徒歩1分	シングル	7,500円	新清水駅前より バス20分 東海大学前下車 徒歩3分
5	三保地区(相部屋)	JR清水駅 より バス25分	和室 相部屋	11/10 12,000円 11/11 15,000円	徒歩5分 ※2泊4食

*各ホテルの宿泊料金は、1泊朝食付(税サ込)のお一人様の料金です。
尚、宿泊料金の他に~~お一人様につき通信費500円を各ホテルにお支払いいただきます。~~

◆お申込みの方法及びお申込み期限

ご宿泊をご希望の方は、申込書に必要事項をご記入の上、右記住所に1995年10月9日(月)までにお申込みください。

予約確認後、「宿泊クーポン」「ホテル地図」「郵便振込用紙」をお送りいたします。

お支払いは、郵便振込でお願いいたします。

宿泊の予約は申込順に受付させていただきますので、満室の場合は同等の他のホテル(上記記載以外含めて)にお泊まりいただくこともございます。

(お申込みは、FAXをご利用いただいても結構です。)

◆取消料について

宿泊予約確認後、宿泊を取消しされる場合は、下記の料率で取消料がかかります。

宿泊日の5日前まで	4日～2日前	前 日	当 日
無 料	宿泊料金の30%	50%	100%

プログラムが決定されました。砂漠化防止、砂漠開発のための様々な技術を多方面から検討いたします。ポスターも含め80件以上の発表が予定され、第1回米国サンタバーバラ(1991)、第2回ハワイ(1993)にも増して活発な会議となると期待されます。

〒812-82 福岡市東区馬出3-1-1

九州大学医学部衛生学講座

Tel. 092-641-1151 (内線3363, 3362)

Fax. 092-632-6402

E-mail momura@eisei.med.kyushu-

性雨研究会

JO

)

円)

か] 大会議

942-0001

下車西へ5

デー法、ス
則(兵庫県

態系

7, 兵庫県
必ず事前に
3)

ナー
察一

よるプレゼ
なセミナー

日本地球化学会

「鳥居基金」委員長

殿

年度 第 回「鳥居基金」交付申請書

年 月 日

申請者(代表者)氏名

印

所属機関・職名	所 属 機 関	所 属 機 関
〒	〒	〒
Tel ()	Tel ()	Tel ()
(内線)		

1995年度日本地球化学会年会宿泊のご案内

謹 啓

皆様方にはご清栄のこととご推察申し上げます。

さて、1995年11月10日（金）～12日（日）に東海大学で開催されます学会の宿泊を、JTB清水支店がお世話させていただくことになりました。

ここに、ご案内させていただきます。

当地清水
でお早め

◆宿

No	1	2	3	4	5

*各ホテル、宿

◆お
ご宿
(月)
予約
お支
宿泊
記
(お

◆取
宿泊

申請者に関する事項		所属機関・職名		住所		Tel ()		Fax ()		E-mail ()	
自宅住所		〒		〒		〒		〒		〒	
渡航目的・期間・主な渡航国		[研究の目的]		[他の研究助成への申請]		決定時期					

プログラムが決定されました。砂漠化防止、砂漠開発のための様々な技術を多方面から検討いたします。ポスターも含め80件以上の発表が予定され、第1回米国サンタバーバラ（1991）、第2回ハワイ（1993）にも増して活発な会議となると期待されます。

日本地球化学会

「鳥居基金」委員長

殿

申請者（代表者）氏名

印

〒812-82 福岡市東区馬出3-1-1

九州大学医学部衛生学講座

Tel. 092-641-1151（内線3363, 3362）

Fax. 092-632-6402

E-mail momura@eisei.med.kyushu-

(1)-B 国内研究集会用

年度 第 回「鳥居基金」交付申請書

年 月 日

性雨研究会
00

)
円)
か] 大会議

3-942-0001
下草西へ5

ゲー法、ス
則（兵庫県

態系

7, 兵庫県
必ず事前に
4)

ナー
際一

よるプレゼ
なセミナー

1995年度日本地球化学会年会宿泊のご案内

謹 啓

皆様方にはご清栄のこととご推察申し上げます。

さて、1995年11月10日（金）～12日（日）に東海大学で開催されます学会の宿泊を、JTB清水支店がお世話させていただくことになりました。

ここに、ご案内させていただきます。

当地清水
でお早め

プログラムが決定されました。砂漠化防止、砂漠開発のための様々な技術を多方面から検討いたします。ポスターも含め80件以上の発表が予定され、第1回米国サンタバーバラ（1991）、第2回ハワイ（1993）にも増して活発な会議となると期待されます。

展望講演・研究口頭発表約75件（半分以上が海外から

〒812-82 福岡市東区馬出3-1-1

九州大学医学部衛生学講座

Tel. 092-641-1151 (内線3363, 3362)

Fax. 092-632-6402

E - mail momura@eisei.med.kyushu -

u.ac.jp

業績(発表論文)

(2)

性雨研究会

00

 γ

四)

か] 大会議

3-942-0001

下車西へ5

ダー法, ス

則（兵庫県

態系

17, 兵庫県

必ず事前に

 $\xi)$

ナ一

際一

よるプレゼ

なせミナ一

宿

N C

1

2

3

4

5.

*各ホテ
尚、宿

お宿
(月
予約
お支
宿泊
記記
(お

◆ 取
宿泊

〔助成を受けようとする集会名・予定期日〕

〔研究の目的〕

〔他の研究助成への申請〕

決定時期

(大学院)

[illegible]

1995年度日本地球化学会年会宿泊のご案内

謹 啓

皆様方にはご清栄のこととご推察申し上げます。

さて、1995年11月10日(金)～12日(日)に東海大学で開催されます学会の宿泊を、JTB清水支店がお世話させていただくことになりました。

ここに、ご案内させていただきます。

当地清水
でお早め

◆宿

No
1
2
3
4
5

*各ホテル
尚、宿

◆お
ご宿
(月)
予約
お支
宿泊
記記
(お

◆取
宿泊

プログラムが決定されました。砂漠化防止、砂漠開発のための様々な技術を多方面から検討いたします。ポスターも含め80件以上の発表が予定され、第1回米国サンタバーバラ(1991)、第2回ハワイ(1993)にも増して活発な会議となると期待されます。

展望講演・研究口頭発表約75件(半分以上が海外からの講演)が英語で主として午前および夜に行われる他、後述のようにポスター、ビデオ、展示発表およびワークショップについては継続して受け付け中です。

登録は、ホテルの収容人数の関係から、申込順となりますことをご了承下さい。(御発表者以外の参加者は先着40～50名に限定させていただきます。)

日 程: 1995年10月15日(日)～20日(金)

場 所: 富士本栖湖ホテル(山梨県、富士五湖) 河口湖駅からバス。Tel. 0555-87-2300 Fax. -2330 東京営業所 03-3574-0012 or 1388 Fax. -1393

登録申込先: 〒180 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

成蹊大学工学部 小島紀徳

Tel. 0422-37-3750 Fax. -3871

正規の申込締切は7/15日ですが、ホテルが満杯になり次第、登録を中止させて頂くことがありますのであらかじめご了承下さい。

第7回ヒ素シンポジウム開催のお知らせ

開 催 日: 1995年11月24日(金)・25日(土)

場 所: 大博多ホール
(福岡市博多区博多駅前 大博多ビル12階)

特別講演: 環境中ヒ素の今日的话题

—地下水中ヒ素の動態— (3件)

一般講演: ヒ素に関するあらゆる分野の演題を歓迎致します。

- ・ヒ素の生体への影響
- ・環境におけるヒ素の分布と化学形
- ・生物によるヒ素の生体濃縮と生体内変換
- ・環境からのヒ素の除去方法
- ・ヒ素の分析法
- ・ヒ素の化学と工業

発表方法: スライドまたはOHPを用いた口頭発表(発表10分、質疑5分を予定)

参 加 費: 3,000円(抄録代を含む) 懇親会費5,000円

申込締切: 1995年7月31日

参加・発表を御希望の方は、下記宛ご連絡下さい。参加および演題申込に関する案内を送り致します。

第7回ヒ素シンポジウム事務局

事務局長 横田 裕之(九州大学医学部衛生学助教授)

〒812-82 福岡市東区馬出3-1-1

九州大学医学部衛生学講座

Tel. 092-641-1151(内線3363, 3362)

Fax. 092-632-6402

E-mail momura@eisei.med.kyushu-u.ac.jp

酸性雨講演会

[環境の酸性化による生態系影響]

主 催: 大気汚染研究協会酸性雨分科会、酸性雨研究会

日 時: 1995年7月12日(水) 13:00～17:00

(開場12:50)

(資料代 800円)

場 所: 大阪府立労働センター[エルおおさか]大会議室
(大阪市中央区北浜東3-14 Tel. 06-942-0001
地下鉄谷町線京阪電鉄・天満橋駅下車西へ5分)

[講 演]

- (1) 乾性沈着測定法の確立に向けて
—代理表面法、三段ろ紙法、デニューダー法、スクラバー法などの現状と課題— 玉置 元則(兵庫県立公害研究所)
 - (2) スウェーデンから見た酸性雨問題
小沢徳太郎(スウェーデン大使館)
 - (3) 環境の酸性化と森林・湖沼・河川の生態系
佐竹 研一(国立環境研究所)
- 講演会終了後、懇親会を行う予定です。

[連絡先]

玉置元則(654, 神戸市須磨区行平町3-1-27, 兵庫県立公害研究所 Fax. 078-735-7817, 参加者は必ず事前に葉書か Fax. で申し込んで下さい。先着200名)

社団法人日本工学会主催

第28回 国際会議のための準備セミナー

—英語によるプレゼンテーションの実際—

国際会議で発表する予定のある方、英語によるプレゼンテーション能力の向上を図りたい方に最適なセミナー

日 時: 1995年6月24(土)・25日(日)

会 場: OVTA—幕張

海外職業訓練センター

千葉県美浜区ひび野1-1

参加費: 80,000円

宿泊費: 18,000円(2泊・食事付)

定 員: 18名

参加申込みおよび詳細問い合わせ先

〒107 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル

社団法人 日本工学会
Tel. 03-3475-4621 Fax. 03-3403-1738

4TH - CONFERENCE ON PETROLEUM GEOCHEMISTRY AND EXPLORATION IN THE AFRO-ASIAN REGION

上記国際会議の案内が本会宛に参りましたのでお知らせ
します。

開催場所: ARUSHA-TANZANIA

開催期間: JUNE 2-6, 1996

問い合わせ先: The 4th AAPG Conference
Secretariat Tanzania Petroleum Development
Corporation

P.O.Box 5233

DAR ES SALAAM

TANZANIA

EAST AFRICA

Telephone 255-51-29661/2 & 36086

Fax 255-51-29663/20775

Telex 41219 Petrol

41293 Oil Exp.

Attn Mr. Y. S. Mwalyego

Ms. F. K. Mpanju

Mr. E. A. Kilembe

第16期第1回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会 議事録

日時 1994年11月7日(月) 13時30分~16時45分

場所 日本学術会議第4部会議室(6F)

出席者 石渡良志委員長, 青木謙一郎, 秋元 肇, 日下
部 実, 田中 剛, 野津憲治, 半田暢彦, 宮本
正道

1. 報告事項

(1) 学術会議関係(青木委員より):

- ① 日本学術会議とその中の研究連絡委員会について説明があった。
- ② 第16期には、本研連に関係する小委員会として、Science Museum 推進小委員会、ICDP 小委員会が発足する。

(2) 第15期研連からの申し送り事項(石渡委員長):

本研連の構成、科研費審査委員の選出方法、第15期対外報告に盛られた地球化学の将来計画の実現、学術会議の会員選出方法や組織の見直しに対する要望書の提出、日本地球化学会との関係の強化の5項目にわたる第15期研連からの申し送り事項について説明がなされた。研連の構成に関連して、地球物理学研連に推薦を依頼する2名については、できる限

り早く決まるように努力している。

2. 審議事項

(1) 前回議事録:

議事録(案)を2ヶ所訂正の上、承認した。

(2) 委員長、幹事の選出:

委員長に石渡委員、幹事に青木、秋元、野津、宮本各委員を選出した。

(3) 惑星科学研連設立の要望について:

新たに惑星科学研連を設立する要望が出されており、地球化学・宇宙化学研連の立場や協力のあり方について議論をした。

(4) 第16期の活動方針:

自由討論の後、各委員が次回の研連委員会に案を持ち寄って検討することとなった。

(5) 次回(第2回)委員会:

1995年2月24日13時30分から予定することとした。

書 評

Noble Gas Geochemistry and Cosmochemistry Edited by J. Matsuda

Terra Scientific Publishing Company

本書は1994年1月に京都において開催された「希ガスの地球化学および宇宙化学」に関する会議の中で発表された講演の内容について、大阪大学理学部宇宙地球科学科の松田准一氏がまとめた論文集である。すでに希ガスの宇宙地球化学については、1978年に E.C. Alexander 氏と小嶋稔氏により編集された Terrestrial Rare Gases, 1983年に小嶋稔氏と F.A. Podosek 氏により刊行された Noble Gas Geochemistry, さらに1984年に B.A. Mamyrin 氏と I.N. Tolstikhin 氏により書かれた Helium Isotopes in Nature が発行されている。しかし、最も新しい Helium Isotopes in Nature が世に出てからすでに10年を経過しており、この間の希ガスの地球化学および宇宙化学の研究の進歩には著しいものがあり、本書の刊行がそのギャップを埋めるという意味でもタイムリーである。

希ガス元素は化学的には極めて不活性であり宇宙地球化学のいろいろなプロセスにおいて、他の揮発性元素である水素、炭素、窒素などに比べてその元素のソースについての情報を保存する性質がある。また、試料の取り扱いについては、基本的には化学反応が関与しないため化学を専門とする研究者の知識を要求しない。このような観点から、希ガスの地球化学および宇宙化学の研究者には物理学出身者や地球物理学出身者が多いのが特色である。アメリカではカリフォルニア大学 Berkeley 校物理学教室の J. Reynolds 氏の研究室で学んだ人達、我が国では東京大学および大阪大学理学部出身のグループ

がこの分野において活躍している。本書のもととなる会議は東京大学理学部ついで大阪大学理学部において希ガスの地球化学および宇宙化学の研究を指導してきた小嶋稔氏の定年退官を記念するものであった。実際、本書に掲載された論文の日本人の著者の大多数が小嶋氏の研究室の出身者であり、編者の松田准一氏は小嶋氏の高弟である。

本書は 1. Planets, Meteorites and Cosmic Dusts, 2. Mantle and Crust, 3. Waters, Gases and Diamonds, 4. Basic Properties の4章から構成され、各章には5編から8編の論文が掲載されている。すべての論文がレフリーにより査読され、そのコメントに対して改訂されるという通常の学術雑誌の編集と同じプロセスを経たものという。内容から判断して個々の論文は100%オリジナルなものからすでに学術雑誌に掲載されたものを焼き直したもので種々のものがあり、その学問的な価値もまた多様である。なお、本書の最後には付録として J. Reynolds 氏による、創世期の希ガスの地球化学および宇宙化学の研究についての短いまとめが掲載されている。

本書の希ガスの同位体比測定についての技術的な側面では、J.D. Gilmour 氏と G. Turner 氏による RELAX (Refrigerator Enhanced Laser Analyser for Xenon) 質量分析計とその I-Xe 年代測定への応用が興味深い。本法は試料を冷却することで濃縮し、Xe に対してイオン化が効果的で他の元素を励起しにくい波長のパルスレーザーを用いてイオン化した後、time-of-flight タイプの質量分析計で検出するもので、従来の方法に比べて100倍程度の感度の向上が達成されている。彼らはこの方法を Bjurböle 隕石中の3個のマイクロコンドリユールに適用して I-Xe 年代測定を行った。その結果従来の方法で得られた結果と良く一致しており、RELAX 質量分析計の信頼度が確かめられた。また従来の測定方法による隕石の Xe 同位体比については、Eugster 氏らの分化したアコンドライトの Pu-Xe 年代についての論文が掲載されている。

希ガスの同位体比を使った基礎的な物理学への貢献としては、古い問題であるダブルベーター崩壊についての報告が Podosek 氏らによってなされた。彼らは複数の Te 鉱床から試料を採取し、その Xe 同位体比を精密に測定することで、 ^{130}Te が ^{130}Xe に壊変する半減期を約 2.9×10^{21} 年と報告している。一方、希ガス同位体比の地球化学における重要な応用例は希ガスをトレーサーとした堆積盆地における流体移動の解明や火山・テクトニクスとの関係、さらに珪酸塩鉱物中の希ガスの分配や拡散に関する研究、そしてマントルなどの希ガスのリザーバーとしての進化モデルである。これらの研究例については、

本書に過不足無く取り上げられている。この分野における最近の重要な発見は上部マントルにおけるソーラータイプの Ne の発見であり、その同位体比(マントルの $^{20}\text{Ne}/^{22}\text{Ne}$ 比が大気値より25%高い)は今後の大気の進化モデルにとって重要な制約条件となる。これに関連した論文が Patterson 氏らによって報告されている。

以上のことをまとめると、本書は希ガスの地球化学および宇宙化学について最新の情報が集められており、専門の研究者だけでなく地球惑星科学の大学院レベルの教科書としても薦めることができる。

(広島大学 佐野有司)

Noble Gas Geochemistry and Cosmochemistry の割引販売のお知らせ

本書の定価は10,000円ですが、本会会員には7,000円の割引価格で販売します。購入は地球化学会会員と明記の上、テラ学術出版社へ、直接ファックスでお申し込みください。出版社より書籍と請求書をお送りします。

連絡先 テラ学術出版社

Tel. 03-3718-4403 Fax. 03-3718-4406

担当 押田恵司

書 評

「沈み込み帯のマグマ学」(全マントル ダイナミクスに向けて)

巽 好幸著

東京大学出版会 定価3296円

昨年40歳になったばかりの巽好幸氏が、これまで10数年間行ってきた自分の研究をまとめた著作を出版した。書かずにはいられずに書いたことが伝わる生き生きとした意欲作で、普段の、大声で、歯切れよく早口の議論がそのまま紙面にあらわれている。「沈み込み帯のマグマ学」と題して、プレートの沈み込みに伴うマグマの発生、進化を中心にすえているが、全地球的な視野で捉えており、固体地球科学全般を扱っている書である。日本が沈み込み帯に位置しており、多くの地学現象はプレートの沈み込みと関わっているためか、この分野に関連した研究は世界的に見ても日本から多く出されているが、巽氏はその中でも第一人者で先導的な役割を果たしている。この本からは、この分野での最新の成果を知ることができるばかりでなく、巽氏の研究姿勢が色濃くにじみ出ており、地球科学研究の醍醐味が伝わってくる。関連分野を研究している人はもちろん、今まで固体地球科学に興味を持たなかった人にも一読を勧めたい本である。

通常の学術書とは構成が異なり、最初の章で著者が主
(P.16に続く)

第2回アジア学術会議開催される

平成7年3月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、新規に学術研究総合調査費などを計上した平成7年度予算及び2月に開催された第2回アジア学術会議の概要についてお知らせします。

平成7年度日本学術会議予算

平成7年度政府予算(案)は、平成6年12月25日に閣議決定されましたが、日本学術会議関係の予算決定額は、11億2,339万4千円でした。その概要については次のとおりです。

【主な経費の概要】

(1) 学術研究総合調査

15百万円(平成7年度新規)

科学研究者の研究環境の改善と研究意欲の向上に関して、国内において意識調査及び実情調査を行う

とともに、外国においても実情調査を行い、結果を整理・分析し、日本学術会議において問題解決のための有効な方策について提言するもの。

(2) アジア学術会議の開催

22百万円(昨年度同額)

アジア学術会議は、アジア地域の各国を代表する科学者が一堂に会し、アジア地域において学術の果たす役割、学術交流の在り方等について討議することにより、相互理解を深め信頼関係を築くとともに、アジア地域ひいては世界の学術の発展に資するために実施するもの。

平成7年度日本学術会議関係予算決定額表

(単位:千円)

事 項	予算決定額	備 考
日本学術会議の運営に必要な経費	1,123,394	対前年度比 93.5%
1 審 議 関 係 費	292,820	重要課題の特別検討、移転準備委員会、I GBPシンポジウム、公開講演会、学術研究総合調査(新規)等
2 国際学術交流関係費	208,750	
(1) 国際分担金	69,505	
(2) 国際会議国内開催	66,211	7年度開催(神経生理学、健康教育、ロボット、憲法、真空物理学、獣医学の6会議)
		8年度開催(理論・応用力学、国際関係、熱帯医学、地域学会、化学熱力学、畜産学の6会議)
(3) 代表派遣	44,006	
(4) 二 国 間 交 流	6,823	
(5) アジア学術会議の開催	22,205	
3 会 員 推 薦 関 係 費	20,000	
4 そ の 他 の 事 務 費 等	601,824	一般事務処理費等

第2回アジア学術会議～科学者フォーラム～の概要について

日本学術会議は、アジア地域の各国科学者の代表を東京に招き、本年2月6日(月)から9日(木)までの4日間、三田共用会議所(東京都港区)において第2回アジア学術会議～科学者フォーラム～を開催しました。

会議には、中国、インド、インドネシア、日本、大

韓民国、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナムの10か国の学術推進機関(アカデミー等)から推薦された人文・社会科学系及び自然科学系の科学者20名が出席し(日本からは伊藤正男日本学術会議会長及び利谷信義副会長が出席)、「アジアにおける学術交流のための方策」をメインテーマとして活発な討議を行いました。

初日の6日には、タイのチュラポン王女殿下、イン

ドのメノン博士による特別講演が行われたほか、高岡総理府次長(内閣総理大臣あいさつ代読)、藤田学士院院長をはじめ、国会議員、関係学協会の方々約200名をお迎えし、開会式及び歓迎レセプションが開催されました。

翌7日からは、それぞれの国籍や専門分野を超えて、アジア地域における学術の振興という共通の目的の下、熱心な討議が行われました。

その結果は、次項議長サマリーとして取りまとめられ、9日に無事閉会しました。

開催に当たり御支援、御協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

議長サマリー(要約・仮訳)

第2回アジア学術会議～科学者フォーラム～
1995年2月6日～9日、東京

1. 第1回アジア学術会議(1993年11月、ACSC)の提案に基づき、第2回アジア学術会議が日本学術会議の主催により、アジアの10か国から20名の科学者を集めて開催された。参加国として新たにベトナムが加わり、暖かく迎えられた。開会式において、タイ王国のチュラポン王女殿下及びインドのメノン博士による「アジアにおける学術交流のための方策」をテーマとした講演が行われた。また、村山総理大臣及び藤田学士院院長から祝辞が送られた。

2. 前回の議長サマリーの諸原則を議論の出発点とし、最近の科学の動向、21世紀に向けた世界の状況を踏まえ、アジアの科学者の継続的かつ効率的な学術交流のためのテーマを巡って総合的な検討がなされた。

3. 討議の中で、参加者は、経験に基づくユニークで示唆に富むアイデアを紹介し、幅広い観点から意見を交換した。要点は次のとおりである。

(1) 科学分野における協力は、人々の「生活の質」の向上だけでなく、アジア地域における「持続可能な発展」も目的としなければならない。

(2) 環境破壊、人口爆発等の地球的課題への取組みに際し、人文・社会科学者と自然科学者が密接に協力していくことが重要である。

(3) アジア地域においてとりわけ重要な「持続可能な発展」を確保し、国際的な共同研究を促進するために、人材育成が重要である。このための国際協力は、平等互恵の原則の下に推進されなければならない。

(4) 化学、農学、医学等の特定の分野において現在行われている、また、将来行われるであろういくつかの試み(「アジア化学推進機構」、「アジア応用システム分析研究所」、「アジア伝統医学推進機構」、「自然災害の緩和のための科学協力」)が地球的課題を解決するための方策として紹介された。また、「共生」という概念に関して議論があった。

4. 参加者はACSCにおける中長期的な研究目標として「持続可能な発展」を取り上げた。このテーマは、さらなる検討を通じて、より扱いやすいサブテーマへと細分化される必要がある。また、21世紀を見据えつつ、アジアの知の伝統を生かし、人文・社会科学及び自然科学の融合を図るという、新たな観点から研究を行っていくことも将来の目標である。

5. これらの問題を議論する場として、ACSCのあり方は大きな関心を集めた。

将来の展開としてACSCを恒久的な組織にすることの可能性についても議論があった。参加者は別紙に示された基本理念、目的及び活動に概ね同意し、各自、持ち帰って関係方面とさらに議論することとなった。

6. ACSCの目標を達成するため、参加者は努力を続けることに同意し、少なくとも新組織が確立するまでの間は日本学術会議によりACSCが毎年開催されること、また、将来的には日本以外でも開催されることが望まれた。なお、日本学術会議が新組織の事務局となり、また、各国は各々の窓口となる機関を決めるべきであるとされた。

新組織について

1. 基本理念

- アジア共通の課題について審議、建議する組織
- アジアの知の伝統を踏まえ、人文・社会・自然科学の融合を図る組織
- アジア域内各国各地域に広く開かれ、他の国際学術団体とも連携を図る組織

2. 目的

「持続可能な発展」と「生活の質」の向上を目指して国際学術協力を推進するため、人文・社会・自然各分野の科学者が国籍や専門を超えて意見、情報の交換を行う場となること。

3. 活動

- 科学者に関する提案とそのフォローアップ
- 学術情報の収集・解析・普及
- アジアの学術界の連携強化
- 進行中の研究活動の評価・調整
- 総会の開催、シンポジウム・ワークショップの支援

日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録をもとに編集された次の日学双書が刊行されました。

日学双書No.22「尊厳死の在り方」

〔定価〕1,000円(消費税込み、送料240円)

※問い合わせ先

財団法人日本学術協力財団(〒106 港区西麻布3-24-2 交通安全教育センタービル内 ☎03-3403-9788)

(P.13より続く)

張する沈み込み帯のモデルが提示され、次章からそのモデルを支持する証拠を次々と重ねていく。このあたりの展開は、あたかも推理小説を読むように謎解きに引き込まれていく。そこには、固体地球科学のいろいろな分野、たとえば地球化学、地球物理学、岩石鉱物学の最新の成果が盛り込まれており、その内容を正確に理解するためにはこれらの分野の基礎的な知識が不可欠である。この本では基礎知識は簡単に触れるだけであるので、学部学生など初学の読者は、別の教科書で勉強した上でこの本を読むと内容の理解が深まるであろう。

第7章まで読み終わると「異モデル」がユニークな客観事実のような錯覚を持ってしまう位に説得力を持つ。「成程、ご説ごもっとも」とすべてが分かってしまった気になるが、本当は分からないことも多く、著者自身が最も批判的な読者としてより整合性のあるモデルを求め

ていることを、読者は読み取らねばならない。この本では、対立するモデルの紹介や配慮が足りないが、それを詳しく扱うと著者の主張が薄まってしまうので、敢えて所々で紹介するにとどまっているのであろう。巻末の文献も充実しているので、読者が自分で探して読む楽しみを残してくれている。

最終章は議論の迫力がそれまでの章といささか異なっているが、著者自身が今進展しつつあるマントルダイナミクスの中に身を置いていることの現われであろう。著者の研究に対する姿勢は、最後の文に現われている。「何度も妄想を行い、その都度予想外の結果が出て、また全体像を練り直す。この楽しさのために毎日を過ごしているようなものだ。」全く同感である。著者の異氏が若くして自分の学問を作ったことに感服しつつ、今後の研究成果が新たな書物になることを期待して止まない。
(東京大学 野津憲治)

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。関連の研究集会、シンポジウムの案内、人材の募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。海外の学会の参加報告やフィールドでの体験談なども歓迎します。

本ニュースは年4回(大体2月、6月、9月、12月)に発行されます。次回142号は8月下旬締切り、9月下旬発行予定です。(編集担当 中井 俊一)

編集者 中井俊一、鍵 裕之

〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部地殻化学実験施設

電話 03-3812-2111(内)4450 ファックス 03-3816-1784

発行者 日本地球化学会 〒113 文京区本駒込5-16-9 学会センター C21

日本学会事務センター内 電話 03-5814-5801

日本地球化学会ニュース

No. 142

1995. IX. 7

1995年度日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会
日時 11月10日(金)~12日(日)
会場と交通 東海大学海洋学部(清水市折戸3-20-1) 本誌2~3ページをご覧ください。
プログラム 本誌をご覧ください。
参加費 会費 1,000円、非会員 2,000円、学生 無料
申込締切 発表申込は締め切りました。
参加、懇親会、小集会、要旨集の申込は、10月7日(土)までに、参加申込用紙(141号で配布)を年会準備委員会まで郵送して下さい。
送金要領 10月7日までに郵便振替で送金ください。
郵便為替 00830-5-50500 日本地球化学1995年準備委員会
総会 11月11日(土) 14時00分からB会場
懇親会 11月11日(土) 18時30分からホテルサンルート清水(新清水駅前)
会費 一般 5,000円、学生 3,000円
講演会 中高大学生および市民を対象とした地球科学の啓蒙活動として講演会を開催します。
題目 「南極と北極の神秘」
開催 主催 日本地球化学会、共催 静岡新聞社・SBS静岡放送、中部電力株式会社
後援 清水市、静岡市、静岡県
日時 11月12日(日) 13-16時
場所 清水市文化会館
参加費 無料
講師 (財)日本極地研究振興会理事長 鳥居鉄也 名誉会員
アラスカ大学地球物理学研究所所長 赤祖父俊一 教授
問い合わせ先 〒424 清水市折戸3丁目20番1号 東海大学海洋学部海洋科学科
1995年度日本地球化学会年会準備委員会
岡部 史郎 Tel. 0543-34-0411 内線2290
(または加藤 義久 Tel. 0543-34-0411
内線2296, Fax. 0543-34-0937, e-mail; ykato@simizugw.cc.u-tokai.ac-jp)
会期中緊急連絡先: 東海大学海洋学部 地球化学会年会 Tel. 0543-34-0411

日本地球化学会1996・1997年度役員選挙について

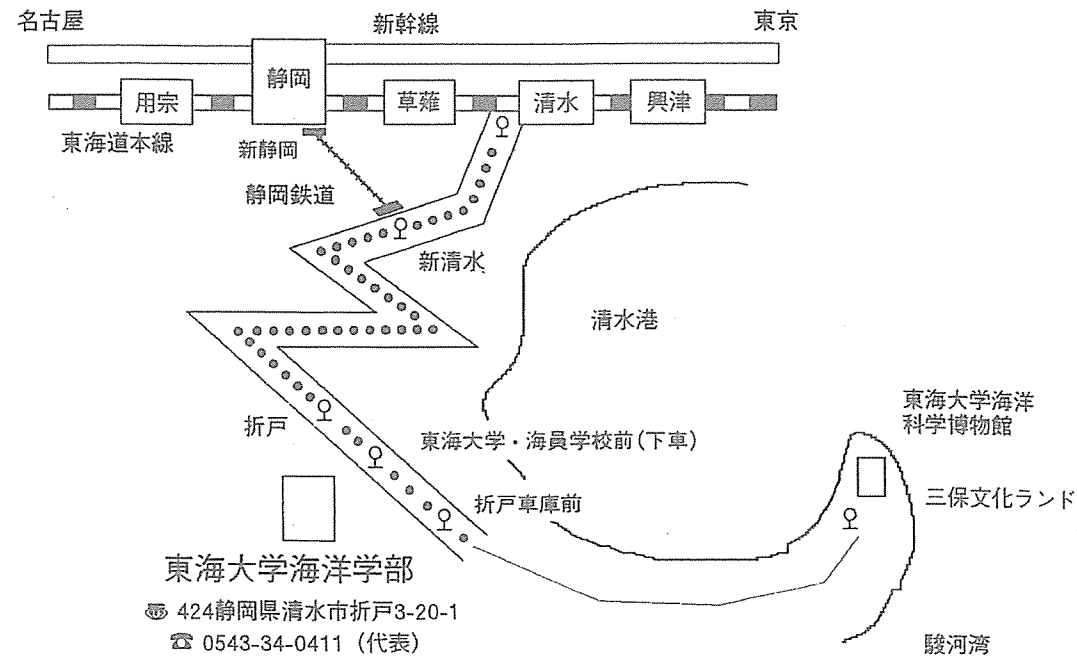
本会会則により1996・1997年度の選挙が行われます。会員各位には必ず投票をお願いいたします。
選挙公報・投票用紙・会員名簿発送 8月下旬
投票締切 9月29日必着
選挙結果公表(総会) 11月11日
選挙公報の、評議員に今回選出できない会員のリストから、日下部 実会員が抜け落ちていました。慎んでお詫びいたします。
[問い合わせ先] 中井俊一: Tel. 03-3812-2111(内)4450
(9月14日以降) 富樫茂子: Tel. 0298-54-3557

本会会計の現状について、財政委員会報告

15ページ以下をお読み下さい。



東海大学海洋学部案内図



交通のご案内

J R東海道線清水駅下車、三保文化ランド、三保車庫、あるいは三保灯台行きバス(約20分)にて東海大学・海員学校前下車。徒歩2分。

夜間集会「地球化学・地球化学をめぐる現状と課題」の開催について

日本地球化学会
会長 半田 暢彦

1989年に建議された「地球科学の推進について」の見直し作業が行われ、本年6月、文部省測地審議会は「地球科学における重点的課題とその推進について」をあらためて建議しました。この中では、人材育成の面で地球化学の充実発展が記されています。実質的にはこれに対応出来る形で、本学会の将来計画委員会、日本学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡委員会で地球化学研究体制の構築のため検討されつつあります。

また、多くの方々の努力により本学会の出版体制は、軌道に乗りつつありますが、これにともなって本学会の財政にいくつかの修正するべき点が顕在化しつつあります。

これらの点について、会員の皆様方との意見交換を通して、地球化学に関する教育・研究の将来像を築き、本学会の財政のあり方を探りたいと思います。このため、以下の要領で夜間集会を開催します。多数の会員の皆様が参加されますことを希望します。

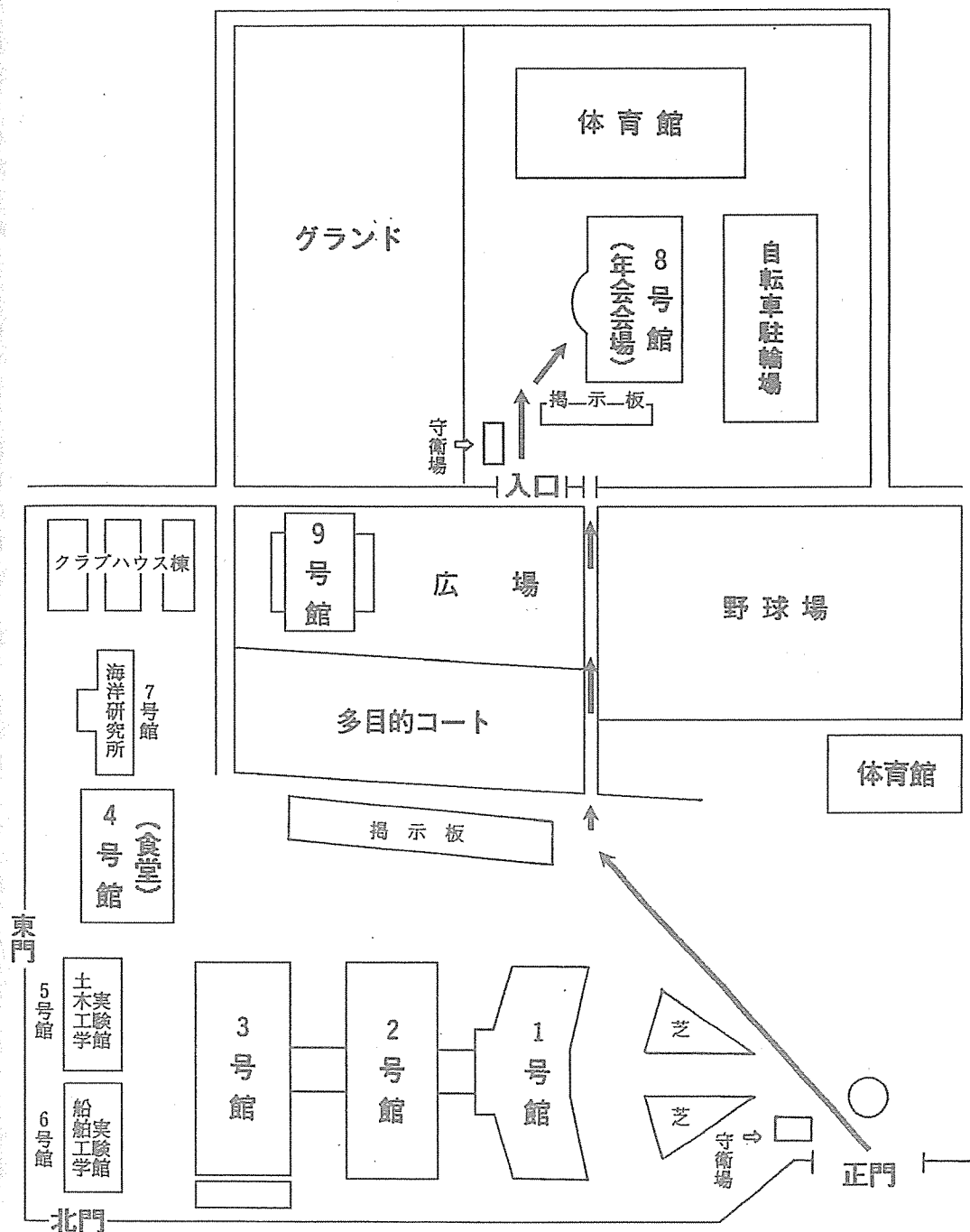
日時：平成7年11月10日(金) 18:30-20:30

場所：東海大学海洋学部

話題：

- ・地球化学の教育・研究をめぐる日本の状況
- ・地球化学の教育・研究体制に関する将来計画(日本地球化学会将来計画委員会、日本学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡委員会)
- ・日本地球化学会の財政状況とその対応(日本地球化学会財政委員会)

駿河湾



*キャンパス内には駐車場がほとんどありません。車での来場はなるべくご遠慮下さい。

1995年度日本地球化学会年会
プログラム

第1日(11月10日)

A会場

課題講演2「海底における記録と変質—古海洋復元に
向けて—」

コンピーナー 大場忠道・加藤義久

(9:00~10:20) 座長: 増澤敏行

- 10A01 東シナ海における過去1万年間の環境変化(地
調)○斉藤文紀・片山 肇・池原 研
- 10A02 沖縄トラフ及び琉球海溝斜面の2本のコアの安
定同位体解析(北大院地球環境)○ワヒュディ・
南川雅男・大場忠道
- 10A03 数百年~数千年スケールの気候変動(Dansga
ard-Oeschger Cycle)に対する日本海海洋循
環の応答(東大院理学・北大院理学)○多田隆
治・入野智久・小泉 格
- 10A04 日本海における更新世—完新世古海洋循環—堆
積性有機物炭素・窒素同位体比記録と海水準変
動(東北大理・名大年代測定研・京大生態研)
○箕浦孝治・星野耕一・中村俊夫・和田英太郎
(10:20~12:00) 座長: 箕浦孝治
- 10A05 過去3万年の日本海堆積物中のステロールの
 $\delta^{13}\text{C}$ 値(都立大理)○松本公平・奈良岡 浩・
山田桂太・石渡良志
- 10A06 過去8.5万年間の日本海の環境変動: 陸生およ
び海生有機物の炭素同位体比(都立大理)○山
田桂太・石渡良志・松本公平・奈良岡 浩
- 10A07 日本海における過去15万年間の黄砂の粒度およ
びフラックスの変動(東大院理学)○入野智久・
多田隆治
- 10A08 Euxinic 環境指標としての還元態硫黄と硫黄
安定同位体比(名大大気水圏研)増澤敏行
- 10A09 海洋堆積物中の長鎖脂肪酸と地球化学サイクル
(都立大理)○奈良岡 浩・石渡良志
(13:00~14:20) 座長: 石渡良志
- 10A10 有孔虫殻の酸素・炭素同位体比からみた過去の
黒潮変動(北大院地球環境)○大場忠道・高村
章・山根雅之
- 10A11 西七島海嶺域より採取されたピストンコアにお
ける過去12万年の ^{230}Th excess フラックス(東
大海洋研・北大院地球環境)○阿波根直一・成
田尚史・玄 相民・大場忠道・平 朝彦
- 10A12 長鎖アルケノン分析による日本太平洋沖の第四
紀後期の古海洋環境の復元(名大大気水圏研)
○沢田 健・半田暢彦

- 10A13 シャッキーライズから採取したコアに記録され
た過去12万年間の金属元素フラックスの変動
(東海大海洋・北東大工・北大院地球環境)○
加藤義久・土橋 史・南 秀樹・大場忠道
(14:20~15:40) 座長: 中塚 武
- 10A14 北太平洋深海底コア中の石英の堆積量と粒度の
変動(名大大気水圏研・地調)○岡本孝則・松
本英二・川幡穂高
- 10A15 北部中央太平洋海盆から採取されたピストンコ
アの粘土鉱物化学組成から見た古環境(東洋
大教養・産医総研)○青木三郎・神山宣彦
- 10A16 電子スピン共鳴を用いた古環境解析(東大海洋
研・九大理)○多田井 修・谷崎久美子・徐
垣 平 朝彦
- 10A17 西部赤道域堆積物のトリウム同位体とAl/Ti
の鉛直変化(北大院地球環境)成田尚史・○小
池素子・乗木新一郎・角皆静男
(15:55~16:55) 座長: 川幡穂高
- 10A18 深海底堆積物中に含まれる脂質のもつ古環境情
報(京大生態研・都立大理・地調・東大海洋研)
○大河内直彦・河村公隆・川幡穂高・平 朝彦
- 10A19 過去20万年間の西太平洋赤道域の古海洋: 有機
地球化学的考察(都立大理)○石渡良志・石丸
圭
- 10A20 堆積物窒素同位体比を用いた海洋表層の栄養塩
利用効率の復元(名大大気水圏研)中塚 武
(17:00~18:00) 座長: 松本英二
- 10A21 西太平洋北半球における沈降粒子と過去30万年
間の基礎生物生産力(地調・関西総合環境)○
川幡穂高・本山 功・鈴木 淳・太田秀和
- 10A22 北太平洋深海底堆積物コアサンプルにみられる
Sr 同位体比変動の周期性について(名大理・
地調)○浅原良浩・田中 剛・上岡 晃・西村
昭・山崎俊嗣
- 10A23 氷期大気中の二酸化炭素濃度とアルカリポンプ
(東大海洋研)野崎義行

B会場

課題講演1 「西部北太平洋域の大気化学」

コンピーナー 秋元 肇・植松光夫

(9:30~11:50) 座長: 田中教幸

- 10B01 東アジア太平洋周縁地域におけるオゾンの長距
離輸送と光化学的生成(東大先端研)秋元 肇
- 10B02 海洋大気中の微量ガス成分(HCl , HNO_2 ,
 HNO_3 , SO_2 , NH_3 , HCHO , CH_3CHO ,
 H_2O_2)の自動連続測定とその動態解析(慶大
理工)○駒崎雄一・成田 祥・田中 茂
- 10B03 大気および海水中の過酸化物の測定(広大総合

科学)○佐久川 弘・山下敏広・高見 朗・竹
田一彦・藤原祺多夫

- 10B04 冬季西太平洋における窒素酸化物の航空機観測
(PEM-West B)(名大太陽地環研)○川上修
司・近藤 豊・小池 真・中島英彰
- 10B05 西部太平洋上の上層大気中の微量ガス濃度(気
象研・日本航空)○松枝秀和・井上久幸・石井
雅男・杉山之男
- 10B06 日本周辺海洋上における窒素酸化物の空間分布
(大阪府大工・環境研・公衆衛生院・群馬大教
養・東大先端研)○坂東 博・畠山史郎・村野
健太郎・渡辺征夫・大和政彦・秋元 肇
- 10B07 冬季日本海上の自由大気における高濃度 NO_x
の検出(名大大気水圏研)○藤森俊雄・加藤喜
久雄

(13:00~15:00) 座長: 河村公隆

- 10B08 西部北太平洋のエアロゾル化学成分の分布と変
動(北東大工)植松光夫
- 10B09 日本上空のガス・エアロゾルの化学組成(名大
太陽地環研)○森 育子・松永捷司・長田和雄・
林 政彦・岩坂泰信
- 10B10 日本海, 東シナ海上空の大気汚染物質の分布と
その起源(環境研・大阪府大工・公衆衛生院・
群馬大教養・慶大理工・東大先端研)○畠山史
郎・村野健太郎・向井人史・酒巻史郎・坂東
博・渡辺征夫・大和政彦・田中 茂・秋元 肇
- 10B11 若狭湾上空のヒコーキ観測による Volatile S
の研究(名大太陽地環研)○松永捷司・長田和
雄・林 政彦・岩坂泰信・猪俣弥生
- 10B12 大気中の硫化ジメチルの酸化過程(資環研)古
賀聖治
- 10B13 洋上大気における粒子状硫黄成分及び水溶性有
機炭素成分の性状と挙動(名大大気水圏研)○
松本 潔・田中 浩・永尾一平・石坂 隆

(15:00~17:20) 座長: 佐久川 弘

- 10B14 レーザーアブレーション/ICP-MSを用いた北
太平洋海域での大気粉塵試料中の微量金属元素
の測定(慶大理工・環境研・横河アナリティカ
ルシステムズ)○田中 茂・深澤孝志・野尻幸
宏・山中一夫
- 10B15 海洋エアロゾル中の脂質成分と極性有機物: 陸
源物質の大気輸送と光化学的変質(都立大)河
村公隆
- 10B16 日本海沿岸域における大気中の人為起源物質の
広域輸送(北東大工)○駒井信晴・土谷晋之介・
植松光夫
- 10B17 西部北太平洋における非海塩硫酸イオンの沈着

量(気象大学校・気象研・九大理)○土器屋由
紀子・宮尾 孝・広瀬勝巳・広岡俊彦

- 10B18 大気中 N_2O 濃度の連続観測—日本における季
節変化—(農環研)鶴田治雄
- 10B19 東経155度線沿いの CO_2 と CH_4 の濃度分布—
気象庁・凌風丸による1990年から1993年の夏の
観測結果—(気象庁海洋・気象研)○村田昌彦・
廣田道夫・根本和宏・伏見克彦
- 10B20 西部北太平洋における大気・海洋間の二酸化炭
素フラックスの季節変動(気象研・気象庁海洋・
科技厅・神戸海洋気象台)○伏見克彦・廣田道
夫・根本和宏・村田昌彦・矢野敏彦・中村知朗

C会場

一般講演「鉱床・温泉・熱水」

(9:30~10:45) 座長: 千葉 仁

- 10C01 北投温泉の放射性核種分析(台湾中原大化学系)
○黄金旺・曾連生
- 10C02 八幡平トロコ地すべり地における地下水の起源
及び混合について(秋田大鉱山・秋田県衛生研)
○小林勝人・川原谷 浩・松葉谷 治・武藤倫
子
- 10C03 温泉水中での塩類と pH 変化に伴う鉄とシリカ
の挙動(名大理)○三浦典子・杉崎隆一・山本
綱志
- 10C04 地熱水中の水銀含有量とその分布(鹿児島大理)
坂元隼雄・○谷山純一郎・富安卓滋・米原範伸
- 10C05 希ガス, 炭素同位体組成から見たチベット高原
の地熱活動(東大理)○横山哲也・中井俊一・
脇田宏
(10:45~11:45) 座長: 坂元隼雄
- 10C06 地熱井のスケールから単離したスメクタイトの
酸素と水素の安定同位体組成と化学組成(大阪
市大理・フィリピン国営石油・岡山大固体地球)
○中村正和・益田晴恵・R.P.Solis・日下部
実
- 10C07 沖縄トラフ熱水域における底層水中のメタン
(北大水産・北大院地球環境・海洋科技セ)○
鶴島修夫・渡辺修一・角皆静男・日下部正志
- 10C08 モリブデナイトの変質実験: 変質と Re-Os 年
代及び近赤外光の透過度との関係(東大教養・
筑波大物質・東大海洋研)○鈴木勝彦・鍵 裕
之・野崎義行
- 10C09 愛知県津具地方の多元素濃度分布(名大理)○
戸上 薫・田中 剛
一般講演 「陸水」
(13:00~14:15) 座長: 吉岡崇仁
- 10C10 久慈川河川水中の溶存腐植物質の特徴(1): 三次

- 元蛍光スペクトルによる検討 (近大理工・原研)
○鈴木康弘・長尾誠也・中口 譲・松永 武・村岡 進・平木敬三
- 10C11 久慈川河川水中の溶存腐植物質の特徴(2): 分子量分布による検討 (原研・近大理工) ○長尾誠也・鈴木康弘・松永 武・天野 光
- 10C12 屈斜路湖湖水の pH 変動について (信州大理・道環境研) ○福島和夫・望月 誠・阿部利宏・福山龍次
- 10C13 複循環湖野尻湖の冬季における溶存亜酸化窒素濃度の変動 (東水大・環境研・筑波大生物) ○野沢岳史・野尻幸宏・中村岳史・内海真生・大槻 晃
- 10C14 複循環湖野尻湖の冬季における溶存メタン濃度の変動とメタン酸化 (筑波大生物・環境研・東水大) ○内海真生・野尻幸宏・中村岳史・野沢岳史・渡辺 信・関 文威
(14:15~15:30) 座長: 長尾誠也
- 10C15 中国 Qarhan 塩湖の湖水および湖水からの沈殿物中に含まれるランタノイド元素の定量 (上智大理工) ○油井瑞明・大井隆夫・小坂知子・向田政男
- 10C16 東濃地域における地下水の地球化学的研究ー化学平衡論に基づく水質形成機構のモデル化ー (動燃東濃地科学) ○岩月輝希・瀬尾俊弘・濱克宏
- 10C17 濃尾平野の地下水の流動 (愛教大) ○杉浦 孜・長沼 健
- 10C18 熊本県緑川流域における地下水水質と地質構成との関連 (名大大気水圏研・京大原子炉) ○小牧香織・加藤喜久雄・高田實弥・松下緑治
- 10C19 大流域河川における直接流出と地下水流出の分離の試み (Ⅱ)ー熊本県白川流域を例としてー (名大大気水圏研) ○一柳錦平・小牧香織・加藤喜久雄
(15:30~16:45) 座長: 渡久山 章
- 10C20 畑作地帯周辺の地下水の化学成分に及ぼす減肥対策の効果ー岐阜県各務原台地の事例ー (岐阜県保健環境研・名大大気水圏研・富山県大・岐阜大農) ○寺尾 宏・加藤喜久雄・吉岡龍馬・堀内孝次
- 10C21 沖縄本島北部の比較的高いウラン比をもつ湧水について (琉球大理) ○友寄善貴・棚原 朗・平良初男
- 10C22 バリ盆地地下水における希ガスと安定同位体、溶存元素とのカップリング (阪大・BRGM・CRPG) ○Pinti D.L.・J.M.Matray・B.

- Marty・J.Matsuda
- 10C23 中国、新疆、吐魯番盆地における地表水、地下水についての考察 (理研・放医研・広大・三菱マテリアル・中国科学院新疆生物土壤沙漠研) ○矢吹貞代・岡田昭彦・高橋和也・井上義和・佐野有司・上田 晃・樊自立・常青
- 10C24 新潟地域油田水の続成作用に伴う組成変化について (石油資源開発) 安田善雄
(16:45~17:45) 座長: 福島和夫
- 10C25 淡水植物プランクトンの炭素同位体分別 (名大大気水圏研) 吉岡崇仁
- 10C26 多価金属塩化物水溶液における水の気液二相間の水素同位体分別 (学習院大理) 垣内正久
- 10C27 地球化学的手法による降雨後の土壌水の変化について (秋田大鉦山) ○川原台 浩・松葉谷 治
- 10C28 環境と生物のやりとり (琉球大理・琉球大農) ○渡久山 章・喜屋武祐子・下地洋子・新里孝和
- D会場
課題講演4 [自然災害の地球化学]
コンピーナー 野津憲治・川邊岩夫・和田秀樹
(9:00~12:00)
- 10D01 地下水・地球化学観測から何がわかるか (東大理) 大野正夫
- 10D02 地震前の地球化学的变化 (東大理) 脇田 宏
- 10D03 兵庫県南部地震前後に見られた中部地方の温泉ガスの変動 (名大理・名大工) ○伊藤貴盛・永峰康一郎・杉崎隆一・川邊岩夫
- 10D04 海底の鉄、マンガンのアノマリーによる地震予知の可能性について (滋賀県大・京大化研・東大海洋研・京都工繊大・海洋化学研・高知女子大) ○中山英一郎・丸尾雅啓・小畑 元・岡村慶・柄谷 肇・紀本岳志・一色健司・蒲生俊敬
- 10D05 1986年伊豆大島火山の噴火時に、伊豆大島元町地区で観測された水質の変動について (地調) 高橋正明
- 10D06 火山活動とヘリウム同位体比 (広大理) 佐野有司
- 10D07 火山ガスと温泉水の化学組成および同位体比から推定する霧島火山の活動 (東工大草津白根火山観測所) ○大場 武・野上健治・平林順一
- 10D08 地球化学者の自然災害へのとりくみが少ないのは何故か (富山県大短大) 吉岡龍馬
- 10D09 空気中のラドン娘核の長期連続測定による地震予知の研究 (京産大理) 山田 治

- 課題講演3 [地球表層生物圏の微量元素の化学]
コンピーナー 鈴木 款・豊田恵聖
(13:00~14:20) 座長: 中山英一郎
- 10D10 海水中の酸素酸イオンの挙動と生物活動 (静大理) 鈴木 款
- 10D11 海水中における微量ヒ素の化学形態別濃度分布とその挙動 (慶大理工) ○スリジュアリサントサ・目代博茂・高橋美帆・田中 茂
- 10D12 北太平洋における微量元素 (電力中研・広大) ○下島公紀・坪田博行
- 10D13 天然水中のモリブデンの存在状態と微生物活動の効果 (近大理工) ○山崎秀夫・合田四郎
(14:20~15:40) 座長: 下島公紀
- 10D14 北太平洋における鉄、マンガンの挙動 (京大化研・滋賀県大・高知女子大・東大海洋研・電力中研) ○小畑 元・中山英一郎・一色健司・岡村 慶・武田重信
- 10D15 ベーリング海とその付近の堆積物と間隙水の重金属の分布 (東大海洋研・静大理) ○児玉幸雄・石塚明男・近藤洋徳
- 10D16 沈降粒子、懸濁粒子及び海水の REE 存在度及び Nd 同位体比の比較 (北大西洋) (UMR39, CNES/CNRS, OMP, France) ○立川和代・C.Jeandel・B.Dupre
- 10D17 琵琶湖水中溶存希土類元素の分布と存在状態 (名大工) ○伊藤彰英・三輪 肇・木全千泉・原口紘丞
(15:40~17:00) 座長: 児玉幸雄
- 10D18 阿武隈地域炭酸塩岩中の微量成分 (地調) 岡井貴司
- 10D19 XAFS 法による粘土鉱物表面に吸着された重金属元素の状態分析 (東大教養) ○宮崎あかね・松尾基之
- 10D20 日本の土壌に対するヨウ素 (I^- と IO_3^-) の吸着 (放医研) ○吉田 聡・村松康行・内田滋夫
- 10D21 土壌ー植物ー大気系における微量元素及び放射性物質の挙動について (放医研) ○村松康行・吉田 聡
(17:00~18:00) 座長: 鈴木 款
- 10D22 大気中の金属化合物の挙動に関する研究 (近大理工) ○林 裕一・山下厚志・中口 譲・平木敬三
- 10D23 マルチレーザー法による微量元素の環境挙動に関する研究: フミン酸との錯生成およびシダ植物への取り込みについて (東大理・理研) ○薬袋佳孝・高橋嘉夫・尾崎卓郎・榎本秀一・阿部静子・劉斌・阿部文敏・富永 健

- 10D24 ヒザラガイの菌に濃集した鉄の XAFS 法とメスbauer分光法による状態分析 (東大教養)
○沼子千弥・松尾基之・高野稔一郎

第2日 (11月11日)

A会場

一般講演 [海洋]

(9:00~10:00) 座長: 鈴木 淳

- 11A01 浦神湾の海水交換にともなう栄養塩の分布挙動 (近大理工・近大農・近大水産研) ○吉岡信二・中口 譲・平木敬三・田中裕志・津田良平・熊井英水
- 11A02 トレーサー実験に用いる海水中の SF₆ 測定法の検討 (静大理) ○岩田樹哉・鈴木 款
- 11A03 噴火湾水のラドン-222の鉛直分布 (北大院地球環境) 成田尚史・○川村嘉勝・角皆静男
- 11A04 西部北太平洋の南北断面におけるトリチウム (北大院地球環境) 渡辺修一・○春日井智恵・角皆静男
(10:00~11:00) 座長: 野尻幸宏

- 11A05 ガス半透膜を用いた fCO₂ 測定器の試作 (北大地球環境) 渡辺修一・○尼岡利崇・角皆静男
- 11A06 表面海水の二酸化炭素分圧に対する塩分の影響 堀部純男
- 11A07 サンゴ礁における海水中二酸化炭素分圧測定のカロスチェック (琉球大理・電力中研) ○金原五月・与那城拓己・長岡智子・下島公紀・大森保
- 11A08 中部太平洋マジュロ環礁におけるラグーン海水の全炭酸・全アルカリ度収支 (地調・関西総合環境) ○鈴木 淳・川幡穂高・後藤浩一
(11:00~12:00) 座長: 大森 保

- 11A09 東京湾から相模湾にかけての表面海水中の二酸化炭素分圧 (環境研・広大総合科学・新日本気象海洋) ○熊本雄一郎・藤原祺多夫・坪田博行
- 11A10 定期貨物船を利用する北太平洋高緯度域の海水中二酸化炭素分圧のモニタリング (環境研・IOS・海洋化学研) ○野尻幸宏・C.S.Wong・紀本岳志
- 11A11 大気ー海洋間の炭素同位体の動的平衡の成立について (名大大気水圏研) ○加藤喜久雄・小牧香織・M.L.Islam

- 11A12 海洋の炭酸系に関する3つの誤解 (北大院地球環境) 角皆静男

B会場

一般講演 [地球外物質]

(9:00~10:15) 座長: 平田岳史

11B01 CMコンドライト中の始源的希ガス(九大理・岡大固体地球)○高岡宣雄・中村智樹・長尾敬介

11B02 大型テクタイトの破碎による希ガス測定(阪大・ウーン大)○松田准一・丸岡照幸・D.L. Pinti・C.Koeberl

11B03 地球外環境を模した光反応による高分子有機化合物の合成(九大理)村江達士・○平山隆博

11B04 火星表面での土壌生成のシミュレーション(大阪府立工専)○伊藤和男・勝元慎吾・藤岡千鶴

11B05 原始地球および火星上での有機物生成とその検出法(横浜国大工・三菱生命研・大林組・東工大生命理工・東薬大生命科学・東大宇宙線研)○小林憲正・笠松隆志・金子竹男・河崎行繁・石川洋二・小池淳平・大島泰郎・齊藤 威

(10:15~11:30)座長:三澤啓司

11B06 親鉄性元素存在度からみた鉄隕石の形成過程〜特に Anomalous 鉄隕石の多様性について(東工大・北里大・丸文)○平田岳史・島村匡・高橋隆子

11B07 隕石の酸不溶残渣の Cr 同位体組成から見た原始太陽系星雲の進化(東大宇宙線研・東大核研)○狩野直樹・今村峯雄

11B08 ユレイライト隕石中の軽希土濃縮相の起源:地球大陸地殻の Sm-Nd 系との比較(地調・神戸大理・米国地調)○木多紀子・三澤啓司・立本光信

11B09 ユレイライト隕石の化学的・同位体的特徴とその成因における意味(理研・筑波大・電気通信大)○高橋和也・鍵 裕之・増田彰正

11B10 ランタノイド・アクチノイド存在度に基づくオーディナリコンドライト熱変成作用の研究(都立大理)○篠塚典一・日高 洋・海老原 充・中原弘道

(14:00~15:30)総会

(15:30~17:50)1995年度日本地球化学会学会賞等受賞講演

日本地球化学会奨励賞 平田岳史 会員
(東京工業大学理学部地球惑星科学科助手)
「ICP 質量分析計による微量オスミウム同位体比精密測定法の開発と鉄隕石-石鉄隕石の起源解明への適用」

日本地球化学会奨励賞 杉谷健一郎 会員
(名古屋大学情報文化学部自然情報学科助手)
「元素存在度比の解析によるマンガニクロノジェール、マンガニバンド、チャートならびに綿状鉄鉱

床の堆積古環境の研究」

日本地球化学会賞 和田英太郎 会員
(京都大学生態学研究センター教授)
「窒素安定同位体による生物地球化学的研究」

柴田賞 本田雅健 名誉会員
(東京大学名誉教授)
「隕石中の宇宙線生成核種に関する研究」

C会場
一般講演 [火山]

(9:00~10:00)座長:北 逸郎

11C01 水素同位体比から見たマグマの脱ガス(岡大固体地球研・神戸大理)○日下部 実・佐藤博明・北村俊博

11C02 GC/C/MSを用いた火山ガス中のメタンの炭素同位体比の測定(東大理)○佐藤雅規・角皆潤・石橋純一郎・脇田 宏

11C03 中部日本における火山性二酸化炭素と炭化水素について(富山大理)清棲保弘

11C04 背弧海盆玄武岩中の炭素およびヘリウム同位体比(東大理・東大海洋研・広島大理)○西尾嘉郎・佐々木 晶・蒲生俊敬・比屋根 肇・佐野有司

(10:00~11:00)座長:清棲保弘

11C05 カムチャッカにおけるヘリウムの同位体比の研究(東大理・東邦大医・東大教養・Inst.Volcanol.Russia)○上井裕徳・中井俊一・脇田 宏・杉森賢司・高野穆一郎・M.S.Fazlullin

11C06 草津白根山における低温噴気ガスの研究(武蔵高・桐朋女子高・陸自少年工科学学校)○高江洲螢・梅野 正・原 久雄

11C07 カルパチア造山帯(ルーマニア)に沿った第四紀火山の火成活動評価に関する気体地球化学的研究(秋田大鉱山・岡山固体地球研・金沢大文・ルーマニア地質研)○北 逸郎・長尾敬介・守屋以智雄・小野真嗣・A.Szakacs・I.Seghedi

11C08 桜島火山の火山灰中の水銀含有量(鹿児島大理)○坂元隼雄・朝日宣雄・富安卓滋・米原範伸

(11:00~11:45)座長:日下部 実

11C09 噴気孔ガス中の水銀測定の試み(鹿児島大理)坂元隼雄・○朝日宣雄・富安卓滋・米原範伸

11C10 火成岩中ホウ素の即発γ線分析(学習院大理・原研・東大原子力)○福岡孝昭・米沢伸四郎・松江秀明・澤幡浩之

11C11 神戸市東部地域におけるγ線による活断層探索の試み(神大発達科学)寺門靖高

D会場
一般講演 [有機物]

(9:00~10:15)座長:高田秀重

11D01 天然水中の発蛍光物質に関する研究(近大理工・原研)○工藤充雄・鈴木康弘・中口 譲・平木敬三・長尾誠也・村岡 進

11D02 中規模閉鎖系内の植物プランクトンブルームに伴う溶存有機物の生成とその化学的特性(名大大気水圏研・カナダ海洋科学研)○西田民人・半田暢彦・C.S.Wong

11D03 海洋表層中の高分子有機物の分子量分画法の検討(静大理)○大西由香・鈴木 款・滝 雅人

11D04 海水中の溶存有機炭素定量的ための保存方法の検討(近大理工・関西総合環境)○木村宗人・服部裕史・中口 譲・平木敬三・坪田博行

11D05 赤潮発生にともなう有機態セレンとアミノ酸の相互関係(近大理工)○船木 篤・栗巢康彦・中口 譲・平木敬三

(10:15~11:15)座長:西村弥亜

11D06 日本の地熱水・温泉水中のアミノ酸(地調・生命工学工技研)○猪狩俊一郎・三田直樹・高橋正明・高田 亮・丸山明彦

11D07 アミノ酸水溶液中でのジペプチドの生成(筑波大化学)○竹田真子・下山 晃

11D08 紫外線照射によるアミン類からのアミノ酸の生成(筑波大化学)○横山裕文・下山 晃

11D09 K/T境界における地球外起源アミノ酸の存在について(筑波大化学)○三田 肇・下山 晃

(11:15~12:00)座長:猪狩俊一郎

11D10 加熱実験によるクロロフィル a の変化(筑波大化学)○善養寺一也・下山 晃

11D11 アモルファスシリカと生体有機物との相互作用内についての実験的検討(東大理)○伊藤由紀・中嶋 悟

11D12 モノメチルおよびジメチルナフタレンの粘土存在下における加熱実験(筑波大化学)○萩原正義・下山 晃

P会場
ポスターセッション
(13:00~14:00)

11P01 大気降下物及びエアロゾル中の炭化水素類の挙動(桐蔭横浜大工)○森永茂生・浜野佳代・尾崎達也・中新一弘・横山誠司

11P02 エアロゾルに含まれる硫酸の硫黄同位体比の季節変化(山形大理・鶴岡高専)○大日方 裕・柳澤文孝・小谷 卓

11P03 湿性降下物の非海塩性硫酸イオンのイオウ同位体比(山形大理・三菱マテリアル中研・NTTリース・東邦大理)○柳沢文孝・大日方 裕・

上田 晃・佐々木みどり・加藤 賢

11P04 富士山頂における⁷Be, エアロゾル, オゾンの同時観測(1994年7月)(気象研・函館海洋気象・徳島地気象・気象大学校)○五十嵐康人・広瀬勝己・堤 之智・関野裕功・坪井一寛・土器屋由紀子

11P05 太平洋における大気中の⁷Be・¹⁰Be濃度の緯度分布(日大文理・北大院地球環境・東大海洋研・東大核研・東大原子力)○永井尚生・村山雅史・阿波根直一・池原 実・今村峯雄・小林紘一

11P06 スピッツベルゲン島ニーオルスンにおける大気中²¹⁰Pb, ²¹⁰Po濃度の時間変動(山形大理・極地研)鈴木利孝・○中山典子・渡辺興亜

11P07 スピッツベルゲン島ブロッガー氷河における陸源金属成分の鉛直分布(山形大理・極地研)鈴木利孝・○山田光太郎・渡辺興亜

11P08 1.7μm半導体レーザーを用いた大気中メタン濃度の連続観測(横浜国大工・東農工大農・アンリツ・東京ガスIT研)○中谷俊郎・小林憲正・赤木 右・米村祥央・養毛康太郎・木村 潔・田井秀男

11P09 微生物共生系における水素とメタンの生成について(京大生態研)杉本敦子

11P10 立山弥陀ヶ原における炭化水素について(富山大理)○清棲保弘・小栗理恵

11P11 宮古島サンゴ礁における二酸化炭素の挙動と収支に関する調査(琉球大理・静大理・地球環境産技研)大森保・○長岡智子・金原五月・陳中笑・森矛都美・井波秀敏・平良初男・鈴木 款・平賀哲男・出口哲也

11P12 富士山における湧水および地下水のトリチウム濃度(学習院大理・地調)○垣内正久・丸井敦尚

11P13 山形蔵王の着雪と積雪の化学組成(山形大理・寒河江高)吉田知也・○柳沢文孝・安部博之・矢野勝俊

11P14 底質と土壌からみた印旛沼湖水と周辺湧水中の臭化物イオンの挙動(東邦大理)○八木邦代・今橋正征・栗原 勇・高松信樹

11P15 琵琶湖水中におけるウラン濃度の季節変動について(金沢大理・滋賀県琵琶湖研)○小藤久毅・山本政儀・横田喜一郎・小村和久・上野 馨

11P16 尾瀬ヶ原への鉄の溶出量の推定(東農工大農・資源研)○養毛康太郎・田尾博明・赤木 右

11P17 南極マクマードおよび昭和オアシス湖沼水中の塩の起源と変遷-アルカリ金属からの解釈-(東邦大理・東邦大医・大妻女子大社会情報・

- 横浜国大教育・日本極地研究振興会) ○高松信樹・加藤尚之・松本源喜・村山治太・鳥居鉄也
- 11P18 少量岩石標準試料の分析における測定精度の検討(地調) ○寺島 滋・今井 登・氏家真澄
- 11P19 酸分解-アルカリ融解- ICP 質量分析法による花崗岩類の希土類元素の分析(地調) ○氏家真澄・今井 登
- 11P20 マルチコレクター ICPMS による高精度同位体分析の試み(東工大) 平田岳史
- 11P21 質量分析計によるセリウム同位体比の測定-マルチコレクターダイナミック方式(地調・電通大自然科学) ○上岡 晃・増田彰正
- 11P22 レーザー連続観測データを用いるメタン発生量の推定法(東農工大農・横浜国大工・アンリツ・東京ガス IT 研) ○赤木 右・養毛康太郎・中谷俊郎・米村祥央・小林憲正・木村 潔・田井秀男
- 11P23 セリウムアノーマリーの平衡論的解釈(東農工大農・電通大自然科学) ○赤木 右・増田彰正
- 11P24 新標準試料 JSy-1 (閃長岩), JMn-1 (マンガン団塊) の調整とその組成(地調) ○寺島 滋・白井 朗・今井 登
- 11P25 陸生マンガノジュール中の希土類元素について(琉球大理) ○平良初男・除磊明・棚原 朗
- 11P26 南極海マンガノジュールの地球化学的研究(名大・金属鉱業事業団) ○太田充恒・内藤耕・川邊岩夫
- 11P27 マンガン酸化物(団塊・クラスト等) による古海洋環境復元の可能性(地調) 白井 朗・○西村 昭
- 11P28 鹿児島県菱刈金山で産出したトラスコタイト(九大理・九大工) ○横山拓史・野間弘昭・松田義尚・林 秀・井沢英二
- 11P29 北九州市門司鉾山から産する二次生成鉱物の成因(九大理・福大理・都立大理・北九州自然史博) ○吉村和久・鮎沢 潤・浦田健作・藤井厚志
- 11P30 九州中部における黒瀬川構造帯の古期花崗岩類および二疊系小崎層中の花崗岩質礫の地球化学的特徴の比較(熊本大理・理研) ○吉村潤也・清水 洋・高橋和也
- 11P31 しんかい「6500」で採集された東太平洋海膨南部の熱水チムニーの地球化学(琉球大理・地調・京大原子炉) ○大森 保・李受映・井内紀子・棚原 朗・平良初男・浦辺徹郎・高田實弥・松下録治
- 11P32 大西洋23°N の TAG 熱水マウンドにおける熱

- 水性堆積物の分布と化学組成(大阪市立大理・九大理・東大海洋研・海洋科技セ) ○益田晴恵・千葉 仁・蒲生俊敬・藤岡換太郎・中村正和
- 11P33 海水環境におけるメタンハイドレートの安定条件(地調) ○前川竜男・猪狩俊一郎・坂田 将・今井 登
- 11P34 中国の砂漠砂・レスに含まれる硫酸塩の硫黄同位体比(山形大理・地調・三菱マテリアル中研) ○伊藤 博・柳沢文孝・金井 豊・鈴木利孝・上田 晃
- 11P35 河口域底質中の硫酸還元菌による鉄化合物の状態変化(東大教養・東邦大医) ○川上美也子・松尾基之・杉森賢司
- 11P36 長鎖アルケノンによる北海道西方沖日本海の古水温推定(地調) ○古宮正利・寺島美南子・井内美郎
- 11P37 日本海北部から得られた堆積物の有機物組成(地調・名大) ○寺島美南子・古宮正利・加藤喜久男・井内美郎
- 11P38 能登半島〜秋田周辺海域における海底堆積物中の各種微量元素の広域分布特性(地調) ○今井登・寺島 滋・片山 肇・池原 研
- 11P39 日本海中部地震(1983) 及び北海道南西沖地震(1993) に誘発されたタービダイト(地調) ○金井 豊・中嶋 健
- 11P40 長野県保科温泉で見られる極近距離の地震に対する温泉ガス組成の応答変化(名大理・名大工) ○伊藤貴盛・長峰康一郎・杉崎隆一・川邊岩夫
- 11P41 芦屋市内伏在断層の放射能探査(海技大学校教養) 藤谷達也
- 11P42 地球化学図による愛知県瀬戸市周辺の地図環境評価(名大理) ○田中 剛・川邊岩夫・山本鋼志・岩森 光・平原靖大・三村耕一・浅原良浩・伊藤貴盛・米澤千夏・ドラグシャヌクリスチャン・神田 聡・清水乙彦・林 正人・三浦典子・青木 浩・太田充恒・戸上 薫・鳥海貴弘・松村陽子・梶原智康・谷水雅治・水谷嘉一・宮永直澄・村山正樹・大森扶美子
- 11P43 仙台市周辺地域の地球化学図による環境評価の研究(地調) ○今井 登・遠藤秀典・田口雄作・石井武政・岡井貴司・上岡 晃
- 11P44 R グループコンドライトの化学組成(都立大理・原研・東大原子力) ○尾寄大真・海老原充・中原弘道・米沢伸四郎・松江秀明・澤幡浩之
- 11P45 新しい星間分子 C₄S の探査観測(名大理・理研・国立天文台・ケルン大) ○平原靖夫・笠井

- 康子・川口建太郎・C.M.Walmsley
- 11P46 単結晶⁴⁰Ar/³⁹Ar年代によるスレーブ地区アカスタ地域の熱史(岡山理大自然研・姫路工大理) 佐藤 恵・兵頭博信・板谷徹丸・松田高明
- 第3日(11月12日)
A会場
一般講演 [海洋]
(9:00~10:00) 座長: 加藤喜久雄
- 12A01 Separating biological and physical changes in dissolved oxygen concentration in a coral reef(東大工・静岡大理) OS.Kraines・鈴木 款
- 12A02 サンゴ礁におけるリンの循環とモデリング(静大理・東大工・延岡市役所) ○水上英樹・鈴木款・渡部貞陽・S.Kraines
- 12A03 サンゴ礁における海水中的カルシウム濃度の日変動(静大理) ○石井芳明・鈴木 款
- 12A04 サンゴによる有機・無機炭素生産と光量との関係-水槽飼育実験-(琉球大理) ○長原智子・金原五月・大森 保
(10:00~10:45) 座長: 野崎義行
- 12A05 造礁サンゴ骨格の金属元素を用いた海洋環境復元(名大大気水圏研・名工大) ○三ツ口丈裕・松本英二・内田哲男
- 12A06 石垣島サンゴ年輪の $\delta^{13}\text{C}$, $\delta^{18}\text{O}$ による環境変動の復元(名大大気水圏研) ○阿部 理・松本英二
- 12A07 炭酸カルシウムの結晶生成におけるランタンイオンの影響(東農工大農・筑波大物質工) ○津野 宏・鍵 裕之・桂 一匡・赤木 右
(10:45~12:00)
- 12A08 北西太平洋における海水中のインジウムの濃度(東大海洋研) 天川裕史・○ディア ソット アリボ・野崎義行
- 12A09 表面電離型質量分析計を用いた海水中の Th の定量に関する基礎的研究(東大海洋研) ○井田雅也・天川裕史・野崎義行
- 12A10 北部日本海における懸濁粒子の化学組成と粒径の関係(北東大工) 植松光夫・○岡本治夫
- 12A11 海水と懸濁粒子間の希土類元素の分配(東農工大農・都立大理) ○付風富・篠塚一典・海老原充・赤木 右
- 12A12 海底近傍における希土類元素の濃度異常(東大海洋研) ○張勁・野崎義行
(13:00~14:00) 座長: 乗木新一郎
- 12A13 中部北太平洋における沈降粒子中の生物指標有

- 機物の季節変動(名大大気水圏研・資環研) ○早川和秀・半田暢彦・原田 晃
- 12A14 北西太平洋セジメントトラップに見る浮遊性有孔虫群集の季節変動(東大海洋研・地調) ○江口暢久・川幡穂高・平 朝彦
- 12A15 カロリン海盆でのフラックスに関する研究(東大海洋研・地調・東海大海洋) ○石塚明男・川幡穂高・杉森 力・豊田恵聖
- 12A16 堆積環境の復元を目指したモデリング(東大気候システム研) 山中康裕
(14:00~15:00) 座長: 天川裕史
- 12A17 西部北太平洋で採取された沈降粒子中の Al/Ti 比(北大院地球環境) 乗木新一郎・○澤田理栄子・野田幸子・成田尚史・角皆静男
- 12A18 沈降粒子中のバリウム-主成分との関連-(北大院地球環境) 乗木新一郎・○野田幸子・成田尚史・角皆静男
- 12A19 沈降粒子中のカドミウムとリン-高緯度域と赤道域との比較-(北大院地球環境・資環研) 乗木新一郎・○濱原和広・成田尚史・角皆静男・原田 晃
- 12A20 沈降粒子の主成分と²³²Th の親和性(北大院地球環境・北大水産) ○竹川郁夫・金泳壹・成田尚史・乗木新一郎・角皆静男
(15:00~16:00) 座長: 石塚明男
- 12A21 沿岸海底境界層における物質の変質と移動-間隙水溶存成分に対する排水時の温度の影響-(北大院地球環境・東海大海洋) 乗木新一郎・○佐々木建一・成田尚史・角皆静男・加藤義久
- 12A22 北西太平洋海盆堆積物中におけるマンガンの挙動(北東大工・東海大海洋) ○南 秀樹・加藤義久
- 12A23 海底堆積物中の自生鉱物の組み合わせおよび形成過程と間隙水の化学組成との関係(大阪市大理・ミシガン大) ○益田晴恵・D.R.Peacor
- 12A24 噴火湾の海洋環境変動の記録としてのウランの分布(北大院地球環境) 成田尚史・○佐藤昌泰・角皆静男
(16:00~17:00) 座長: 益田晴恵
- 12A25 東部太平洋低緯度海域(9°N, 145°W) で採取された堆積物の化学的・放射化学的特性(資環研・日本海生研) ○原田 晃・柴本陽子
- 12A26 マルチコレクターによるマンガノジュールのCe 同位体比の精密測定(東大海洋研・電通大自然科学) ○天川裕史・野崎義行・増田彰正
- 12A27 太平洋マンガノジュールに見られる Ce 異常と Co/(Ni+Cn+Zn) 比の関係について(名

- 大・愛媛大) ○太田充恒・石井 暁・榎原正幸・水野篤行・川邊岩夫
- 12A28 微生物の媒介に伴うマンガンの酸化速度とその鉱物組成(東海大海洋・理研) ○林 淳子・佐藤義夫・竹松 伸
- B会場
一般講演 [大気・降水]
(9:00~10:00) 座長: 松枝秀和
- 12B01 メタンとハロゲンラジカルとの反応の際の同位体分別効果(北大院地球環境) ○田中教幸・イチエンカオ・川崎昌博
- 12B02 シベリア永久凍土地帯の湖から放出されるメタンの同位体組成(名大大気水圏研・環境研・ロシア科学アカデミー永久凍土研) ○中川書子・吉田尚弘・野尻幸宏・V.A.Makarov
- 12B03 日本、中国およびタイにおける水田からのメタン発生量の測定(農環研・農生資研・国際農研・南京土壌研・タイ国農政局) ○八木一行・鶴田治雄・加藤邦彦・陽捷行・Z.Cai・P.Chairoj・W.Cholithkul
- 12B04 尾瀬ヶ原における温室効果ガスのフラックス測定とその変動要因(東農工大工・東農工大農・農環研) ○米村祥史・蓑毛康太郎・赤木 右・楊宋興・鶴田治雄
(10:00~11:00) 座長: 杉本敦子
- 12B05 遠心力の下にある容器内の気体の定常状態(学習院大理) 木越邦彦
- 12B06 家畜排泄物に由来する N_2O の窒素安定同位体比の測定: “重い” N_2O の発生源の候補として(東農工大・畜産試験場・静岡県農試・資環研・農環研・国際農研) ○楊宋興・長田 隆・戸田任重・上田真吾・八木一行・渡辺 武・鶴田治雄
- 12B07 沿岸域におけるDMS酸化反応に及ぼす NO_x 濃度と気温の影響(慶大理工・名大太陽地環研) ○田原玲二・池原庸介・小林祐司・平原崇彦・田中 茂・松永捷司
- 12B08 東アジア近海及びベンガル湾におけるバージ&トラップ/GC/MSによる海水中の揮発性有機化合物の測定(東水大・環境研) ○山本英輝・横内陽子・大槻 晃
(11:00~11:45) 座長: 鈴木利孝
- 12B09 北極エアロゾル中の脂質成分: 高分子ジカルボン酸の分布と挙動(都立大理・カナダAES) ○柳瀬彩子・河村公隆・L.A.Barrie
- 12B10 南極海を中心とした南大洋エアロゾル中の有機物: 脂質成分の分布(都立大理) ○庭井毅治・

- 河村公隆
- 12B11 南極昭和基地エアロゾル中の脂質成分の分布と季節的特徴(都立大理・名大太陽地環研・極地研) ○錦織陸美・河村公隆・林政彦・藤井理行
(13:00~14:00) 座長: 白幡浩志
- 12B12 降水時の雨及びエアロゾル中のジカルボン酸類の経時変化: 除去機構の検討(都立大理) ○今井美江・河村公隆
- 12B13 都市郊外で採取したエアロゾル及び雨水中の脂質成分(都立大・電力中研) ○田中伸幸・河村公隆
- 12B14 大気・降水中の粒子状炭素の濃度と粒径分布(静大理) ○横堀尚之・鈴木 款
- 12B15 大気・降水中の有機リンの存在とその挙動(静大理) ○江頭 毅・鈴木 款
(14:00~15:00) 座長: 坂田昌弘
- 12B16 北海道室蘭都市浮遊塵の鉛濃度及び同位体比の季節変化(室蘭工大) ○尹 松・白幡浩志
- 12B17 北海道胆振地域における湿性降下物銀の季節的濃度変化(室蘭工大・北海道調査測量) ○白幡浩志・尹 松・大浦宏照
- 12B18 陸源トレーサーを用いた大気浮遊塵と降下塵のキャラクタリゼーション(山形大理) ○鈴木利孝・塩野秀樹・丸山 裕
- 12B19 降雨中の硝酸イオンと硫酸イオン(1994横浜)(横浜国大教育) 村山治太
(15:00~16:00) 座長: 百島則幸
- 12B20 酸性雨による植物の金属成分の溶出—植物および酸の種類による溶出量の差—(元東邦大理・東邦大理・日本工業用水協会) ○大森慎子・吉池雄蔵・岡村 忍・岩崎岩次
- 12B21 山地小流域のスギ林における酸性物質の湿性/乾性沈着(電力中研) ○高橋 章・佐藤一男・藤田 慎一
- 12B22 関東平野におけるスギ衰退木の葉の炭素同位体比(電力中研) 坂田昌弘
- 12B23 植物のセルロース酸素同位体組成と水循環(京大生態研・マイアミ大) ○杉本敦子・L.Sternberg
(16:00~17:00) 座長: 吉田尚弘
- 12B24 埋没樹幹試料セルロースの炭素同位体組成(名大理・静大理) ○青木 浩・和田秀樹
- 12B25 樹木年輪における炭素安定同位体比の記録と短期気候変化(京大生態研) ○半場祐子・和田英太郎
- 12B26 樹木年輪中の放射性核種と安定元素—酸性雨の森林生態系への影響評価手法に関連して—(九

- 大理・九電総研・九環協) ○百島則幸・小池正実・今泉幸男・原田達朗・高島良正
- 12B27 木質部に内蔵された樹皮に見られる環境変動(環境研) ○田中 敦・木村勝彦・佐竹研一
- C会場
一般講演 [岩石・地殻]
(9:00~10:00) 座長: 赤木 右
- 12C01 ランタニドシリーズの第三イオン化ポテンシャルとランタニドテトラド効果(名大理) 川邊岩夫
- 12C02 ランタニド元素に見られるテトラド現象の本質的背景: 多軸立体対称モデルとテトラド効果の数値化(電通大自然科学) 増田彰正
- 12C03 チャートのY/Ho比とテトラド効果(電通大自然科学・熊本大理・名大理) ○南 雅代・清水 洋・足立 守・増田彰正
- 12C04 メリライト中の希土類元素の拡散: I (東大理・学習院大理) ○森岡正名・長沢 宏
(10:00~11:00) 座長: 森岡正名
- 12C05 二次イオン質量分析計を用いたかんらん石中の陽イオンの拡散係数の測定(学習院大理・東工大地惑・東大理) ○伊藤元雄・塚本尚義・森岡正名・長沢 宏
- 12C06 斜方輝石中の銅(II)—銅(II)を含む輝石の合成とX線解析(学習院大理・東大理) ○館壽永・堀内弘之・長沢 宏・伊藤元雄
- 12C07 標準岩石中のリチウム同位体組成(上智大理工・東工大原子炉研) ○小田切隆行・大井隆夫・小坂知子・向田政男・野村雅夫
- 12C08 地球起源のジルコニウム同位体比の変動(電通大自然科学) ○サラタ クマール サブー・増田彰正
(11:00~12:00) 座長: 溝田智俊
- 12C09 Geochemistry and petrogenesis of the amphibolites from Fagaras Mountains (Southern Carpathians) (名大理) ○D.Cristian・田中 剛・岩森 光
- 12C10 武蔵花崗岩のRb-Sr年代(名大理) ○松村陽子・田中 剛
- 12C11 日本の列島表層部の平均組成; 島弧地殻の地球化学(地調・名大理) ○富樫茂子・今井 登・奥山康子・狛 武・岡井貴司・青山秀喜・田中剛
- 12C12 西オーストラリア・ビルババブロックに産する始生代チャートの微細構造と化学組成(名大情報文化・名大理) ○杉谷健一郎・山本鋼志・杉崎隆一

- (13:00~14:00) 座長: 富樫茂子
- 12C13 酸素同位体組成から見た中国内陸砂漠石英粒子の均質化機構(地調・岩手大農・新疆生物土壤砂漠研) ○松久幸敬・溝田智俊・K.Faure・錢亦兵
- 12C14 石英の酸素同位体組成から見た西アフリカ土壌中の風成成分(岩手大農・地調) ○溝田智俊・山本道開・K.Faure
- 12C15 酸素同位体交換平衡における異常質量効果(東工大原子炉研) 小高正敬
- 12C16 水—岩石相互反応におけるガンマ線照射の影響(名大理・地調) ○米澤千夏・田中 剛・上岡晃
(14:00~15:00) 座長: 松久幸敬
- 12C17 岩手県葛根田の第四紀花崗岩の酸素・水素同位体比(秋田大鉱山) ○松葉谷 治・菅原 透
- 12C18 岩石の酸性変質に伴うランタノイド元素の挙動(上智大理工・武蔵工大原研) ○木川田喜一・大井隆夫・小坂知子・向田政男・本多照幸
- 12C19 ESR(電子スピン共鳴)による石英脈の年代測定の可能性(McMaster Univ.Geol.) ○豊田 新・J.W.Rink・H.P.Schwarcz
- 12C20 著しく成長の速い鍾乳石(ストロー管)の成長速度について(琉球大理) ○棚原 朗・平良初男・山川 健
(15:00~16:00) 座長: 中井俊一
- 12C21 熱蛍光法を用いた炭酸カルシウム試料の年代測定法の確立(琉球大理) ○波平智茂・棚原 朗・平良初男
- 12C22 熱蛍光年代測定における年間線量の評価(琉球大理) ○高嶺朝一郎・平良初男・棚原 朗
- 12C23 カルボナドダイヤモンドの光物性と炭素同位体比との関係(筑波大物質工・東農工大農) ○鍵裕之・蓑毛康太郎・赤木 右
- 12C24 天然ダイヤモンドの包有不純物の炭素同位体比(東農工大農・電通大自然科学) ○赤木 右・増田彰正
(16:00~17:00) 座長: 松葉谷 治
- 12C25 上部マントルの希ガス同位体組成: ダイヤモンドを用いた推定(阪大理) ○和田直子・松田准一・小嶋 稔
- 12C26 シチリア島エトナ山周辺のマントルの希ガス同位体の特徴(東大理・バレルモ地球化学研) ○中井俊一・脇田 宏・M.Nuccio・F.Italiano
- 12C27 コマチアイト中の希ガス同位体組成(阪大理) ○丸岡照幸・三宅弘二・松田准一
- 12C28 かんらん石、フォルスデライトに対する希ガス

- の溶解度（阪大理・東工大理）○柴田智郎・高橋栄一・松田准一
- D会場
一般講演 〔地球外物質〕
（9：00～10：00）座長：高橋和也
- 12D01 衝突溶融 H-コンドライト隕石（Y-790746）の化学組成、Rb-Sr 系、及び K-Ar 年代の研究（神戸大・岡大固体地球・極地研）○中島 剛・中村 昇・長尾敬介・藤原敏記・三澤啓司・加々美寛雄・矢内桂三・小島秀康
- 12D02 炭素質隕石（CV3 グループ）のコンドリュールの Rb-Sr 同位体系（神戸大・岡大固体地球・極地研）○可見智美・中村 昇・加々美寛雄・三澤啓司・小島秀康
- 12D03 普通コンドライト隕石中の SiO₂ に富むクラストの成因（神戸大理・大英博）○三澤啓司・金澤昌紀・J.Bridges・中村 昇・R.Hutchison
- 12D04 隕石の Sm, Gd 同位体比測定に基づく宇宙線生成中性子束の見積もり（その2）（都立大理・国立科博）○日高 洋・海老原 充・米田成一
一般講演 〔堆積物・有機物〕
（10：00～11：00）座長：松本源喜
- 12D05 京都府加茂町周辺の大坂層群の堆積物の化学分析（京都府警科研）平岡義博
- 12D06 堆積物への Zn（II）の収着挙動に関する研究—分別抽出・ラジオトレーサー法の適用—（北大工）○五明智夫・藤吉亮子・沢村貞史
- 12D07 多摩川底質中の鉄化合物の化学状態に関する研究（東大教養）○久野章仁・松尾基之・加藤拓弥・高野穆一郎
- 12D08 河口域堆積物の間隙水に含まれる硫黄化学種の挙動（東大教養）○加藤拓弥・高野穆一郎・久野章仁・松尾基之
（11：00～12：00）座長：高野穆一郎
- 12D09 河口・沿岸域における懸濁・堆積有機物の相互関係に関する同位体的評価（京大生態研・東農工大農）○小川奈々子・小倉紀雄
- 12D10 有機物から見た噴火湾中央部の堆積環境（北大院地球環境）乗木新一郎・○増山新平・角皆静男
- 12D11 東京湾堆積物中のジペプチドの分布（筑波大化学系）○小笠原 亮・下山 晃
- 12D12 東京湾における過去100年間の堆積有機物の変動（創価大教育・ベルタニアンマレーシア大・都立大理）○山本修一・M.K.Abdul Rasid・石渡良志
（13：00～14：00）座長：小倉紀雄
- 12D13 黄海・東シナ海における黄河・揚子江系堆積物の挙物（地調・東大海洋研・気象大学校・気象庁）○野原昌人・児玉幸雄・土器屋由紀子・大山準一
- 12D14 東シナ海・黄海堆積物中の脂質成分の分布と特徴（長崎大教育・都立大理）○近藤 寛・川口智子・石渡良志
- 12D15 中海堆積物における過去8000年間のプランクトンと陸源有機物量比の変化（島根大理・名大大気水圏研）○三瓶良和・松本英二・永瀬昌広
- 12D16 北東シベリアの永久凍土コア試料中の有機成分からみた古堆積環境（大妻女子大社情・Florida State Univ.・Inst.Soil Sci.Photosynthesis・RAS）○松本源喜・E.I.Friedmann・D.A.Gilichinsky
（14：00～15：00）座長：相沢省一
- 12D17 バイカル湖湖底堆積物（VER 92/1-ST10-GC2）中の無機成分から見た堆積環境（東邦大理・東邦大医・大妻女子大社情・South Carolina Univ.）○高橋伸樹・加藤尚之・松本源喜・E.B.Karabanov
- 12D18 Paleocene/Eocene 境界付近の底性有孔虫絶滅事件—有機物組成および含有量の変動—（都立大理・東北大理）○有信哲哉・石渡良志・海保邦夫
- 12D19 遠洋深海性チャート層中の鉄の化学状態変化—古生代/中生代境界の環境変動の考察（東大教養・東工大理）○久保建一・松尾基之・磯崎行雄
- 12D20 二疊系大野ヶ原石灰岩中の希土類元素存在度（名大理）○鳥海貴弘・川邊岩夫
（15：00～16：15）座長：三瓶良和
- 12D21 球磨川流域における三宝山帯チャートの地球化学的特徴の時代変化（熊本大理・理研）○國丸貴紀・尾崎悦子・清水 洋・高橋和也・矢吹貞代
- 12D22 化学組成・粒度組成から見たタクラマカン砂漠の風成堆積物の運搬・移動機構について（熊本大理・理研）○本多将俊・清水 洋・高橋和也・岡田昭彦
- 12D23 トUFFAに関する研究（I）（九大理・九大農・佐賀大農）○吉村和久・井上眞理・染谷 孝・松浦健太郎・峯元 愛
- 12D24 知来ミクライト質石灰岩の酢酸処理残留物における希土類元素の濃集（名大理）○神田 聡・川邊岩夫・鈴木和博
- 12D25 南部北上山地石灰岩中のカドミウム含量（群馬

- 大工）○相沢省一・赤岩英夫
（16：15～17：00）座長：山本修一
- 12D26 自動車由来汚染の指標としてのbenzothiazole類：PAH との安定性の比較（東農工大農）○熊田英峰・高田秀重・小倉紀雄
- 12D27 東京湾の柱状堆積物中の微量有機汚染物質の鉛直分布（東農工大農）○佐藤 太・高田秀重・小倉紀雄
- 12D28 海洋堆積物中の polychlorinated dibenzo-p-dioxin および polychlorinated dibenzofuran の分析（新日本気象海洋・東海大海洋）○松村 徹・加藤義久

##

結論としては、今後会計収支を均衡させるために、会員増大による会費収入の増大、雑誌購読数増大で売り上げ収入の目減りをくい止める、広告を中心とした会費以外の収入の確保、会の運営の合理化による支出の削減、など、努力による収入増、支出減が必要であります。しかしながら、200万円の経常的に予想される赤字を完全に埋めることは困難であり、近い将来に年額2000円程度の値上げを含む会費改定が避けられないことを、財政委員の間では確認いたしました。会費問題に関しましては、今後さらに財政委員会、幹事会、評議員会での議論を経て、結論を得た後、総会で会員各位にご提案することとなります。

(1995年会員名簿掲載の1984-1994年決算表をご参照下さい)

学会費の早期納入と学会費口座 自動引き落とし登録のお願い

-1996年度自動引き落とし登録は9月30日までに-

本学会では会費はその年度の3月31日までに納入(会則第6条)となっています。会費未納の場合にはGeochemical Journalと「地球化学」は送付されませんが、会費請求票、ニュース、会員名簿は送付されています。学会事務センターでの会誌等送付手数料、郵送料、合同学会分担金を含め年間1未納会員あたり約2500円となり、またニュース、会員名簿(隔年発行)の製作費、等を含めると、1未納会員あたり年約4000円の経費となります。また会費の納入がなされますと未送の会誌をお送りすることになりますが、この追加送付のための超過手数料が1冊当たり100円で1年未納ですと8冊で800円が余分にかかります。「地球化学」およびGeochemical Journalの編集委員会の御努力により、「地球化学」の発行は、1994年には1号が3月に、2号は9月に発行されました。Geochemical Journalも、1994年には12月までに5号が発行され、本年は12月迄に6号が発行される予定です、1996年の第1号は2月には発行の見込みです。両学会誌の計画日程通りの刊行が実現されることにより、会則通り3月末までに納入された場合でも、会誌が発送できず、超過手数料が余分にかかる事態が生じますので、会員の皆様には、年度当初までの会費納入をお願いする次第です。

本学会も1995年度より年会費の預金口座からの自動引き落としを実施し、1995年度は164名の会員が登録されています。未登録の会員には、会費請求票に同封しております預金口座振替依頼書に記入、捺印(銀行等の口座の登録印)のうえ、9月30日までに学会事務センターの本学会宛にお送りいただければ、1996年度からの自動引き落としが実施されます。引き落とし日は1月23日です。

初期登録手数料250円と毎回の引き落とし手数料200円は学会が負担いたします。学会の財政基盤の安定化のためにもまた各会員の便利のためにも、是非この主旨に賛同いただき、会費の自動引き落とし登録をしていただければ幸いです。なお、退会等で会費の自動引き落としを中止したい場合には、12月に送られる自動引き落としの確認の通知に対して、中止する旨通告していただくだけで結構です。

現在学会の財政がかなり難しい事態にあり、評議員会では財政委員会を発足させ、検討を開始いたしました。本学会の全活動は会員の皆様の会費でなっておりますので、まだ会費を未納の会員の皆様には、是非とも、早急な会費の納入をお願いするとともに、会費の自動引き落としにも登録していただけますようお願い申し上げます。

庶務幹事 増澤敏行

会計幹事 野尻幸宏

1995年第2回評議員会議事録要旨

1995年第2回評議員会は、6月17日(土)14時より半田会長を始め19名が出席して、東京大学山上会館地階001号室で開かれた。以下に議事録の概要をまとめる。正式な議事録は次回評議員会で承認後、「地球化学」に掲載する。

1. 庶務、会計、編集、行事、会員に関する報告および各委員会ならびに学術会議研連等からの報告があった。

2. 平成6年度日産学術助成に対する採択通知を受領した(奨励研究2件採択)。

3. 兵庫県南部地震被災会員への特別措置に対する、評議員の意見聴取、確定案の送付、関西圏8府県の会員(105名)へのお知らせの送付を行った。

4. 1995年1月1日から4月30日までの入会13名(正会員13名、内学生8名)、退会37名(正会員37名、内学生1名)を承認した。その結果正会員965名(学生87名を含む)、賛助会員17名、名誉会員10名、計992名(在外35名を含む)となった。

5. 1995年度第1回鳥居基金助成として3件を承認した: 海外派遣、益田晴恵(大阪市立大学理学部地球学科)、10万円; 海外派遣、平原靖大(名古屋大学理学部地球惑星科学科)、10万円; 国内研究集会、青野辰雄(放射線医学総合研究所海洋放射生態研究部)1995年度地球化学若手会、10万円

6. 1995年4月24日付けで実施した兵庫県南部地震被災会員への特別措置を承認した。

7. 平成7年度科学研究費研究成果公開発表(B)に申請していた学術講演会「深海底の温泉を知っていますかー海底熱水活動の科学」の内定通知を受領(内定額110万

円)したため、その実施を承認した: 1995年11月26日(日)科学技術館サイエンスホール(東京都千代田区)実施責任者 蒲生俊敬会員(東大海洋研)。

8. 1995年度学会賞等の受賞者として以下4名を承認した。

柴田賞 本田 雅健「隕石中の宇宙線生成核種に関する研究」

学会賞 和田英太郎「窒素安定同位体による生物地球化学的研究」

奨励賞 平田 岳史「ICP質量分析計による微量オスミウム同位体比精密測定法の開発と鉄隕石-石鉄隕石の起源解明への適用」

奨励賞 杉谷健一郎「元素存在度比の解析によるマンガンマイクロジュール、マンガンバンド、チャートならびに縞状鉄鉱床の堆積古環境の研究」

9. 受賞者選考委員会(田中剛委員長)からの提案を受け、日本地球化学会学会賞受賞者選考細則第2条の「6名の委員」を「5名の委員」と改正することを承認した。

10. 平成7年6月15日付け地球化学宇宙化学研連委員長からの、平成8年度科学研究費補助金の、分科「地球科学」の第2段階審査委員候補者2名(大気水圏生物圏関係1名、固体地球関係1名)および細目「地球化学」の第1段階審査委員候補者4名(大気水圏生物圏関係2名、固体地球関係2名)の推薦依頼(締切7月22日)に対し、前者については4名連記の、また後者については8名連記の、郵送による評議員による投票を行い、それぞれ、上位4名および8名を選出し、会長と副会長とが分野も考慮して、それぞれ2名および4名を推薦することを承認した。

11. 日産科学振興財団からの平成7年度日産学術助成の課題1および2について一般研究2件以内、奨励研究全件推薦の依頼(財団締切8月31日)に対し、学会締切を7月28日とし、推薦委員会の構成を昨年度と同じ(半田会長、高岡副会長、野津評議員)とすることを承認した。

12. 1995年度年会の開催地として北海道大学大学院地球環境科学研究科(札幌市;代表者 角皆静男会員)とすることを承認した。

13. 名誉会員推薦委員会からの、北野康会員を名誉会員に推薦したいとの提案に対し、無記名投票の結果、同会員を名誉会員として総会へ推荐することを承認した。

14. 野尻会計幹事からの1994年度決算案の結果、学会の財政状況が危機的状態にあることが明らかとなり、緊急に財政委員会を発足させ現状の理解と今後の対策を検討することとした。委員長として野尻会計幹事を、委員

として野津、大隅、中井、加藤、増澤の各評議員を委嘱した。

なお、第3回幹事会11月4日(土)(東京大学本郷)、第3回評議員会11月9日(木)(東海大学海洋学部;清水)第4回評議員会(新旧合同)11月12日(日)(清水市内)の予定

【新入会員紹介】 (1995.1.1-4.30)

正会員13名(内学生7名)

S中川 明	広島大学大学院生物圏科学研究科
山中 康裕	東京大学気候システム研究センター
金子 恒顕	日本電子(株)分析機器技術本部
S平井 誠	大阪大学理学部宇宙地球科学科D1
李 鍾益	韓国海洋研究所極地研究センター
S折橋 裕二	北海道大学理学研究科地球惑星物質科学D1
S小棚木章直	北海道大学大学院地球環境科学研究科
S森川 徳敏	神戸大学大学院自然科学研究科
岩森 光	名古屋大学理学部地球惑星科学科
大河内 博	神奈川大学工学部応用化学科
S米澤 千夏	名古屋大学理学部地球惑星科学科
S伊藤 貴盛	名古屋大学理学部地球惑星科学科
S DRAGUSANU Cristian	名古屋大学理学部地球惑星科学科

【変更者紹介】

学生→一般 3名

三村 耕一	名古屋大学理学部地球惑星科学科
福永 一哉	山形大学理学部地球科学科
熊本雄一郎	国立環境研究所化学環境部
下川 修司	(株)ダイヤコンサルタント東京事業本部

国内→海外 1名

黒田 吉益	中華人民共和国北京市亜運村
-------	---------------

海外→国内 1名

米田 成一	国立科学博物館理工部
-------	------------

所属変更 17名(内学生3名、在外1名)

宮崎 章	資源環境技術総合研究所水圏環境保全部
才野 敏郎	名古屋大学大気水圏科学研究科
小出 良幸	神奈川県立博物館(自然科学)
北山 憲三	新潟工科大学工学部物質生物システム工学科
粕 武	筑波総合科学研究所
水谷伸治郎	日本福祉大学情報社会科学部
山本 鋼志	名古屋大学理学部地球惑星科学科
大淵 聡	同和工営(株)資源事業部調査部
S萬谷 祐子	東北大学理学部地球物質科学科
佐藤 博明	神戸大学理学部地球惑星科学教室
渡辺 晃二	信州大学工学部社会開発工学教室

大山 準一 神戸海洋気象台海洋課
小野寺 毅 宮城県気仙沼水産試験場
伊藤 孝 茨城大学教育学部地学教育
S長谷川英尚 (財)環境科学技術研究所
S猪股 弥生 名古屋大学太陽地球環境研究所
坂巻 幸雄 JICA Project Team, Ulaanbaatar,
Mongolia

地球惑星科学関連学会1995年合同大会, 1995 年度日本地球化学会春季シンポジウム報告

1995年の地球惑星科学関連学会合同大会は3月27日(月)～30日(木)に、萩原幸男実行委員長の下、日本大学文理学部に於て開かれました。本年度は日本鉱物学会がセッション参加学会に移り、また第四紀学会が新たにシンポジウム共催学会に加わりましたので、セッション参加学会は8学会、シンポジウム共催学会は6学会となりました。この結果、過去最大規模の合同大会となりました。後で述べる緊急フォーラムを除いても、参加者は一般1480名、学生780名、計2260名と、昨年より約500名増え、発表件数も講演833件、ポスター384件、計1217件と昨年より約100件増加しました。ポスターが全体の30%を越え、さらに、ポスター会場にアルコールが用意されたのは画期的事件でした。また、応募された地球惑星科学関連学会合同大会のシンボルマークが会期中発表され、投票がありました。佳作となったシンボルマークは連絡会ニュースに載っています。

直前に阪神大震災が起こったため、プログラム編成関係者の努力により、一般の市民にも開かれた兵庫県南部地震緊急フォーラムが組まれ、招待講演6件、ポスター86件の発表がありました。また、会期前の3月26日(日)に一般公開シンポジウム「惑星地球と地震」が北の丸公園内の科学技術館で開催され、地震に関連した研究を一般市民に対し発表しました。日本地球化学会からは脇田宏会員が発表しました。

今回の合同大会では13件の共通セッションが開催され、そのうち8件を日本地球化学会が共催参加しました。また、8件のシンポジウムが開催されました。日本地球化学会の春季シンポジウムは固有セッションとして合同大会会期中の28日(火)に開催されました。発表件数は、講演16件、ポスター9件、計25件でした。昨年と比較すると発表件数は少なくなりましたが、固体の分野に偏らず、水、堆積物、大気など、幅広い地球化学の分野について万遍なく発表がありました。日本地球化学会会員以外の聴衆も多数集まり、短時間ながらも盛況でした。

来年度の合同大会は1996年3月26日～29日に大阪大学豊中キャンパスで開催される予定です。

(赤木 右 東京農工大学)

第2回「鳥居基金」受賞者決定

「鳥居基金」委員会委員長 脇田 宏
第2回の「鳥居基金」助成について4名の会員から応募がありました。慎重に選考を行った結果、下記の方に決定しましたので、ご報告いたします。

海外派遣

鶴島修夫会員 (北海道大学水産学研究科博士課程在学)
10万円

「沿岸域における物質輸送に関する国際シンポジウム」に出席、論文を発表

中華人民共和国 (1995年11月15日～17日)

1995年度第1回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-01)

氏名: 平原靖大 (名古屋大学理学部地球惑星科学科)

助成: 海外派遣 (ドイツ連邦共和国)

課題: ドイツ・マックスプランク研究所との共同研究

今年3月下旬から4月上旬にかけてドイツ・マックスプランク電波天文学研究所に滞在し、星間分子の観測を行った。観測に用いた装置は、ボン市郊外に設置された直径100mという世界最大の電波望遠鏡である。今回の研究目的は、硫黄と炭素からなるラジカル、C_sSの回転スペクトルを星間分子雲において検出することにあった。2年前、同じ研究課題で観測を試みたが、天候不良のため期待した成果が得られず今回の再挑戦となった。このため渡航前から天候が最大の気がかりであり、文字通り運を天に任せて3月31日から6日間の観測を開始した。

この時期、観測天体の牡牛座分子雲は昼間の時間帯に10時間程度観測できる。野球場ほどの大きさの白いパラボラ鏡が天体を追尾する様はまるでSF映画を見るようである。だが観測初日はすぐ脇の制御塔からも望遠鏡が震んで見えるほどの大雨であった。2日目、一転して快晴となり、丸1日の観測データの積算後、C_sSの遷移周波数23.6626GHz (ギガヘルツ) に非常に弱い輝線スペクトルが浮かび上がった。もしや、の期待を胸に、翌日も観測・積算を行ったところノイズレベルはアンテナ温度で1mK (ミリケルビン) に下がり、スペクトルの強度は4mKで消えずに残った。この段階で既に最高水準のノイズレベルだが、スペクトルの同定には更なるS/N比の改善が必要である。翌日、下り坂の天気予報を睨みつつ、20GHz帯にあるC_sSの別のスペクトルの検出に賭けることにした。観測の結果、分光実験で得たものと同じ周波数20.7018GHzにスペクトルをとらえた。これも信号雑音比3σではあるが、100m鏡の性能を最大限に発揮し、C_sSの2本のスペクトルの高品位観測ができた。他のライバル達は後追いを諦めるだろう。

帰国後マックスプランク研究所に対し、今回の観測で

得た2本のスペクトルチャートを添付し、「あと6日間の観測でC_sSの発見が確定する」と書いた共同研究申請書を送付した。硫黄族炭素鎖分子CCS, C_sSは1987年に、化学と天文学の両分野にまたがる日本の研究グループが発見し、その熱気にあてられて私は星間分子の研究に足を踏み入れることになった。C_sSは当時から注目されていたが、幸い1992年にマイクロ波分光実験によって分子構造を明らかに出来た。C_sSとは長いつきあいになっているが、何とか星間雲でも検出して“私の星間分子”にしたい。末尾になりましたが、今回の鳥居基金助成に對し深く感謝いたします。観測結果の詳細については今年の地球化学会で報告します。

1995年7月24日

1995年度第1回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-03)

氏名: 青野辰雄 (放射線医学総合研究所海洋放射生態学研究部)

助成: 国内研究集会

題目: 1995年地球化学若手会 1995年8月4日～6日 (静岡)

地球化学若手会は、主な大気圏や水圏の地球化学の研究に携わる全国の若手研究者が一同に会し、共に議論し、情報交換し、親睦を深めることを目的に活動してきた。8年目を迎える今年は、8月4日から6日にかけて(財) 培本塾会館 (静岡県榛原町) において1995年度地球化学若手会を開催した。大学や研究所等の16研究機関から36名の参加 (一般7名、学生29名) があり、参加者全員による研究テーマの紹介と12件の一般講演が行われた。数年前より単に参加するだけでは折角の機会が無駄であるとの意見が出され、自己紹介を兼ねて各自の研究テーマの紹介を参加者全員で行うことを始めた。当初は、OHPシート一枚に氏名、所属、研究テーマを書いたものを使用しての一人当たり3分程度の発表であった。今年は自己紹介の要旨を当日準備、配布して、これをもとに各自が研究テーマの紹介を行った。研究目的、方法や成果等をOHP数枚にまとめて研究テーマを紹介する参加者が多く、自己紹介というよりは一般講演に相当する内容が盛り込まれた形式で、全員の紹介を終えるために半日以上時間を費やした。一般講演では、有機物、基礎生産関連で4件、二酸化炭素の分圧や除去などの関連が2件、海水や湖水中の重金属の分布や挙動などの関連が4件、また安定同位体を用いた水蒸気の輸送等に関する研究や堆積環境に関連する研究の発表があった。各講演共に、単に化学的手法をもとに分析した結果のみを発表するのではなく、研究背景や意義などレビュー的要素を多く含んだ内容で結果等の解釈およびその研究の重要性が異なる研究分野の参加者にも理解できる講演が多く見られた。

また、時には学会では聞けないような苦労話も折り込んだ講演もあり、最後まで興味深く聞くことができた。また各講演終了後、かなり踏み込んだ内容の質問や素朴な疑問からの質問が多数出て、度々議論が長引くこともあった。時間の関係上きつい日程であったが、盛会のうちに終了した。

1995年8月21日

1996年度「女性科学者に明るい未来を の会・猿橋賞」の受賞候補者及び研究 助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立) は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞 (猿橋賞) を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム賞等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

記

猿橋賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者 (ただし、下記の推薦締切日で50才未満) に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金 (30万円) をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件 (1名) です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由 (400字程度)、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務局までお送り下さい。
5. 締切は1995年11月30日 (必着)
6. 第16回の賞贈呈式は、1996年5月、東京において行なう予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

猿橋賞受賞者

第13回 (1993) 東京大学教養学部教授 黒田 玲子博士
第14回 (1994) 岡山大学理学部助教授 白井 浩子博士
第15回 (1995) 東京工業大学理学部助教授 石井志保子博士

研究助成

1. 海外のシンポジウム等に参加し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
2. 助成金は1件10万円とし、月に数件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者 (各締切日において満40才未満) の略歴、研究業績、国際会議名 (主催団体、開催場所、年月日)、発表論文題目、推薦理由等を

記入して、本会事務局までお送りください。

4. 締切は1995年11月末日と、1996年4月末日の2回。

問い合わせ先 女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

TEL 03-3330-2455 (FAX 兼用)

東京工業大学理学部 地球・惑星科学科 教官公募
助手 1名

1. 専門分野：今回は下記の2つの分野の方々の応募を
特に歓迎いたします。但しこれまでの地球
科学での経験は問いません。

惑星科学（理論）：理論的手法で惑星科学を推進で
きる方

鉱物物理学：物性理論的手法で地球惑星の物
質科学を推進できる方

2. 着任時期：平成8年3月までの可能な限り早い時期

3. 応募書類：

・履歴書

・業績目録（査読雑誌掲載「論文」とそれ以外の
「総説等」に分けてください）

・主要論文（8篇以内）の別刷（あるいはそのコピ
ー）

・今後の研究計画、抱負など

・応募者に関する所見をうかがうことのできる方1
ないし2名の氏名及び連絡先

4. 応募書類の締切：平成7年10月2日（月）必着

5. 応募書類送付先ならびに問い合わせ先：

〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学理学部地球・惑星科学科

学科長 高橋栄一

TEL 03-5734-2338

FAX 03-3727-4662

応募書類の封筒には「助手応募」などと朱書して
下さい。

東大国際シンポジウム「宇宙年代学と
同位体地球科学」の御案内

1996年1月17日から20日の4日間にわたり、東京大学
山上会館において「宇宙年代学と同位体地球科学」と題
する国際シンポジウムを開催致します。このシンポジウ
ムは1989年（箱根）及び1991年（中国、広州）に開催さ
れた日中同位体シンポジウムの流れを含んでおり、本年
1月に急逝された故山越和雄宇宙線研究所教授が委員長
としてとりまとめの努力をされておりました*。今回は
国際シンポジウムとしての実質を活かすべく、日中両国
以外からも現在活発に研究を行っている国際的に著名な
研究者を多く招待しております。東大国際シンポジウム

は、東大創立100周年を記念して創設された基金により
その開催費の一部が補助されて行われるシンポジウムで
す。

このシンポジウムでは、宇宙・惑星・地球などに関す
る年代学や宇宙線に関連した研究、同位体を用いて行う
地球惑星科学などを含み、それらの基礎的な面から応用
面に至る広い分野を対象としております。シンポジウム
は招待講演者による講演と、5分間程度の口頭による内
容説明を伴ったポスターによる発表とを組み合わせで行
いますが、公募による発表はポスターによるものと致し
ます。参加者全員が全ての講演及びポスターによる発表
に参加出来るようにするため、それぞれのセッションを
同時に行うことは致しません。このシンポジウムの場を
利用して、その研究成果を発表すると共に外国の研究者
達と積極的な議論を交わし、今後の研究等の指針を探る
機会とされるよう、特に若手の研究者などのシンポジウ
ムへの積極的な参加を期待しております。

会 期 1996年1月17日（水）～1月20日（土）

場 所 東京大学山上会館

登録料 一般；10,000円（予約登録は12月22日まで。
以後は12,000円。レセプション、パーティ代
を含む）

学生；5,000円（予約登録は12月22日まで。

以後は6,000円。レセプション、パーティ代
を含む）

*なお、本シンポジウムの前日（1月16日）に東大原子
核研究所講堂において、“Kazuo Yamakoshi
Memorial Symposium on Cosmic Dust”が開催
されます。

講演申し込み、講演要旨提出、予約登録

講演申し込み及び予約登録については別紙に必要事項
を記入し、また、講演要旨については別紙要領にそって
作成し、下記に送付して下さい。

〒113 東京都文京区弥生2-11-16

東京大学大学院理学系研究科地球惑星物理学教室

杉浦 直治宛

講演申し込み締切 1995年10月10日（火）

講演要旨提出締切 1995年11月15日（水）

予 約 登 録 締 切 1995年12月22日（金）

IGBP-NES シンポジウムのご案内

IGBP-NES シンポジウム国内委員会
（代表 井上 元）

IGBP のコアプログラムであるBAHC, IGAC, GC
TEは共同でインターコアプロジェクトとしてIGBP-N
ES (Northern Eurasian Study) を開始することを
呼びかけています。このIGBP-NESの全体のテーマは

炭素循環で、具体的には次の4課題です。

1. シベリアのツンドラと寒帯の生態系での炭素循環
やその他の重要な要素に対する気候変動の直接の影
響を予測する。特に大気微量成分の発生や吸収およ
びその制御に重点を置く。

2. シベリアのツンドラと寒帯系での水やエネルギー
の地表面－大気交換と地下水文に対する気候変動の
直接の影響を予測する。特に水循環と炭素循環の結
合に重点を置く。

3. シベリアのツンドラと寒帯生態系の構成と構造お
よび生態系の機能に対する気候変動の直接影響（水、
エネルギー交換、生物地球化学）を予測する。

4. 人間が引き起こした土地利用の変化と擾乱（最も
重要な火災）のシベリアのツンドラと寒帯生態系の
機能、構造、構成への直接影響を予測する。

その第一歩として更に広い科学者の間にIGBP-NES
の趣意を紹介し、その計画立案や研究への参加を呼びか
け、更に、研究計画に改善を加え具体化していくことを
目的とし、シンポジウムを開催することになりました。

この会議では、すでに調査研究を行っているロシアや
外国の研究グループの活動の紹介、北米・ヨーロッパで
の研究に基づくロシアでの研究計画、どこでどのような
形態で研究を行うかといった具体化の討議、組織問題な
どが議論される予定です。みなさまの参加をお待ちして
おります。

日 時 1995年11月28日（火）から12月1日（金）午前中
場 所 国立環境研究所

問い合わせ先

〒305 茨城県つくば市小野川16-2

国立環境研究所 大気圏環境部 井上 元

TEL 0298-50-2402 FAX 0298-50-2468

e-mail inouegen@nies.go.jp

東レ科学振興会第45回 科学講演会のご案内

と き 平成7年10月13日（金）

開演 18時00分 終演 20時45分

ところ 有楽町朝日ホール 【有楽町マリオン11階】

東京都千代田区有楽町2-5-1

（JR有楽町駅前）

テーマ “ダイヤモンドに見る地球・宇宙の歴史”

I. 星屑とダイヤモンド

東京大学名誉教授 小嶋 稔

II. ダイヤモンドー生い立ち、性質・成因

東北大学名誉教授

山梨県立宝石美術専門学校校長 砂川 一郎

その他 ★入場無料、定員638名（当日会場先着順・開
場 17時30分）

★予約の必要はありません。

★ご来聴の方には、後日講演記録を進呈いたし
ます。

第9回（1995年度）地質調査所研究講演会

表 題 「地質年代測定法の進歩とその応用」

日 時 平成7年11月8日（水） 10：00開場

会 場 三会堂ビル9F石垣記念ホール

東京都港区赤坂1-9-13

TEL. 03 (3582) 7451

交 通 ・地下鉄銀座線虎ノ門駅下車徒歩5分

・地下鉄丸ノ内線・千代田線国会議事堂前駅下
車徒歩7分

主 催 工業技術院地質調査所・（財）日本産業技術振興
協会

協 賛 日本地球化学会他

内 容 46億年前に地球が誕生、約400万年前には人
類の祖先が出現し、地球環境に影響を及ぼすま
で文明を発展させました。人類が将来にわたっ
て地球と共存していくために、過去の地球の歴
史を解明することの重要性が増しています。地
球の歴史で起きた様々な地質現象に時間のメモ
リをいれるために、これまでも様々な年代測定
法が開発され適用されてきました。特に最近
は、測定法の技術開発がめざましく、鉱物単位
の年代測定法の開発、具体的に地質現象に直接
関連した年代測定法の開発が行われつつあり
ます。本講演会では、年代測定法とその応用
について最近の進歩と地質調査所の取組みに
ついて紹介します。

参加費 聴講無料（ただし、一般参加者はテキスト代実
費）

申込先 （財）日本産業技術振興協会

〒105 東京都港区虎ノ門1-19-5

虎ノ門1丁目森ビル5F

TEL. 03 (3591) 6272

FAX. 03 (3592) 1368

申込方法 参加申込書に参加者の氏名・所属等をご記入
の上、申込先へお送り下さい。FAXでの申込
もお受けいたします。申込済みの方は当日会場
へ直接おいで下さい。

問い合わせ先 工業技術院地質調査所総務部業務課広報係

〒305 茨城県つくば市東1-1-3

TEL. 0298 (54) 3520

日本雪氷学会全国大会における特別セッションのお知らせ

来る10月24日から26日にかけて開かれる日本雪氷学会全国大会において、極地雪氷分科会の主催で下記の特別セッション「極地雪氷コア解析結果の解釈に向けて」を開催いたします。これまでの大気や雪氷の研究成果を踏まえて、今後の「氷床ドーム深層コア解析結果の解釈を拡充するプロセス研究」として何があるのかを議論する場を設けました。深層コア解析の学際性に配慮し、雪氷学会員以外の方の招待講演も予定されておりますので、多数の方のご参加をお待ちしております。

本件に関するお問い合わせは：

世話役 長田 和雄

〒464-01 名古屋市中千種区不老町

名古屋大学 太陽地球環境研究所 東山分室

TEL 052-789-4305, FAX 052-789-4306,

e-mail : osada @ stelab.nagoya-u.ac.jp

特別セッション「極地雪氷コア解析結果の解釈に向けて」

日 時 1995年10月24日(火) 13:30~17:00

場 所 名古屋大学 シンポジオン

招待講演：

R. Koerner 「Ice Core Interpretation : A perspective」

青木 周司 「アイスコアと大気微量成分」

植松 光夫 「南極域における大気中エアロゾルの起源と変動」

林 政彦 「極域エアロゾルはどこからきてどこへゆくのか」

本堂 武夫 氷床コアの物理解析がもたらす新たな情報」

庄子 仁 「南極ドームFにおける積雪の圧密過程の研究の重要性」

他、3件を予定

サイエンス・ボランティア募集について

文部省では平成7年度からサイエンス・ボランティア制度を設けることとし、「サイエンス・ボランティア登録名簿の作成および提供」業務を社団法人日本工学会に委託してまいりました。そこで下記要領でサイエンス・ボランティアを公募いたします。

この制度は人材派遣ではなく、サイエンス・ボランティアを必要とする機関に情報を提供する事業です。

記

1. 応募の期日：いつでも受付けます。本年度は初めてですので、一応の期限を平成7年10月末日とします。

2. 応募資格：とくにありませんが、ボランティアとして青少年・社会人に科学技術の面白さを教えたり、一緒に楽しめる方

3. 応募申込み：ハガキに氏名・年齢・性別・連絡先住所・同電話番号を明記して、日本工学会まで登録用紙を請求して下さい。

4. 資格検査：日本工学会内に設けた「サイエンス・ボランティア企画委員会」において資格審査を行い結果をお知らせします。

5. 登録用紙請求先および問い合わせ先

〒107 東京都港区赤坂9-6-41

乃木坂ビル

社団法人日本工学会「サイエンス・ボランティア係」

TEL. 03-3475-4621

FAX 03-3403-1738

1995環太平洋国際化学会議(PACIFICHEM '95)

参加登録・団体旅行のお知らせ

社団法人 日本化学会

1995環太平洋国際化学会議実行委員会

会 期 1995年12月17日(日)~22日(金)

場 所 ホノルル市、ハワイ州

主 催 日本化学会、アメリカ化学会、カナダ化学会、オーストラリア化学会、ニュージーランド化学会

後 援 日本地球化学会他

- 1) 参加登録、団体旅行のお申込みについて

参加登録の手続きは、旅行と申込と共に一括して指定旅行代理店の近畿日本ツーリスト(株)東京支店に申込んでいただくことといたしました。事前参加登録の締切日は10月20日(金)午後5時〔近ツリ(東京支店)必着〕です。これ以降でも参加登録の受付はいたしますが、登録料が高くなりますので、ご了解下さい。

参加者の種別	10月20日迄	10月21日以降
・日本化学会および化学関連学協会の会員	26,550(円)	32,850
・非 会 員	32,850	37,350
・学 生	4,500	4,500
・同 伴 者	4,500	4,500
(中学生迄は登録料無料)		
・Abstracts	3,150	3,150
(講演予稿集)		

Preliminary Program, その他詳細については日本化学会機関誌「化学と工業」9月号または、アメリカ化学会発行のChem. & Eng. News 7月10日号をご覧ください

下さい。

問い合わせ先

(社)日本化学会 総務部

〒101 千代田区神田駿河台1-5

TEL. 03-3292-6161 FAX 03-3292-6318

用紙請求・申込および団体旅行問合せ先

近畿日本ツーリスト(株)東京支店 環太平洋化学会係

〒100 千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館10階

TEL. 03-3214-5566 FAX 03-3214-6688

書 評

Motoji IKEYA (1993) : New Applications of Electron Spin Resonance—Dating, Dosimetry and Microscopy—

World Scientific Publishing, Singapore, 500p.

ISBN : 9810211996, 9810212003 (pbk)

本書は、ESR年代測定を早くから手掛けて来た著者が、この分野における従来の成果と今後の展望を、とくに隣接科学分野の読者を意識して広範囲にまとめたものである。さらに、本書では年代測定だけではなく線量計や顕微鏡としてのESRの利用についても触れられている。同種の文献としては、1987年にアイオニクス株式会社から出版された同著者による「ESR(電子スピン共鳴)年代測定」という和書があり、内容的にはこれと重複する部分があるが、以降の内外の研究も豊富に紹介されているので、各章末の文献リストだけでも一見の価値がある。

評者の能力とスペースを考えると、本書の内容をここですべて紹介するのは困難なので、以下では、評者の手掛けている第四紀学や地形学・地質学的研究分野から目についた諸点を紹介する。

第1章では、各種の絶対年代測定法を概観し、その中でESR年代測定法の特徴とは何かについて述べられている。ただ、本書のような性格の本を手にする読者が、他の年代測定法についてほとんど知らないということは非常に考えにくいので、この程度の記述内容であるならば本章は不要の様に思える。

第2章には、ESRの原理、鉱物結晶の格子欠陥のタイプとESR信号、結晶軸の方向とg値との関係、ESR信号に見られる微細構造・超微細構造など、ESRに関する基礎的な解説がなされている。物理・化学の研究者以外の読者にとってはやや難解な部分もあるように思われるので、著者も述べるように、読者によっては、第1章とともに本章を飛ばして先に第3章から目を通した方が読み易いかも知れない。

第2章は年代測定にまでは立ち入って記述されてい

いが、第3章では、ESR年代測定を行う際に必要となる、試料の総被爆線量の評価に関する基礎的な知識と方法について具体的に述べられている。とくにESR年代測定法における時計の0セットの原理や格子欠陥の寿命と信号強度の時間変化に関する記述は、様々な考古・地質年代試料の測定を実際に行い、求められた年代値を評価する際の重要なポイントとなるので参考になろう。従来の付加線量法(additive dose method)では、人工的に被爆させて増加させた信号強度から逆に過去にさかのぼって外挿を行い、試料が現在までに被爆した線量を求めるが、本章では、外挿を行わない被爆線量の求め方が提示されているのが注目される。この部分では、いくつかの具体例を挙げたもう少し詳しい解説があっても良いように感じられた。

ESR年代測定では、通常、試料が現在までに被爆した総放射線量を、試料が年間に被爆する放射線量(年間線量)で除して年代を求める。第4章では主に、この年間線量の評価について必要となる基本的な事項が簡潔にまとめられている。しかしながら年間線量を求めるという実際の作業に直面した場合、試料のエッチングや宇宙線の評価の問題、TLD素子の埋設による外部自然放射線量測定の具体的方法について、もう少し初学者を意識した丁寧な解説があっても良いように思われた。

第5~10章では、年代測定の対象となる地質試料を物質毎に分けて、各試料にみられる格子欠陥のタイプとESR信号の特性、具体的な試料の処理方法、年代測定結果の具体例などについて述べられている。実際に年代測定を行ったり、文献で示された測定結果を検討したりする際には、これらの各章の記述が大変役に立つであろう。鍾乳石、貝・サンゴ化石、蒸発岩、化石骨・歯、火山噴出物など、ある程度確立された手法で既に多くの年代値が得られている試料の他に、断層粘土・深海底堆積物・風成堆積物・粘土鉱物など、年代測定としてまだ実用段階に至っているとは言い難い試料まで、幅広く取り上げられているので、本書を手にした読者は、興味を引かれた章から先に目を通されると良いのではないだろうか。

第11章では、氷床の水や宇宙空間に存在する各種の固体を意識したESRスペクトルについて述べられている。内容的には、萌芽的な研究の比較的簡単な記述にとどまっているが、・OHラジカルが氷床の温度よりもさらに極低温でないと不安定なため、氷床コアのESRスペクトルから年代を求めることは難しいこと、酸性雨起源の電に認められるSO³⁻と同様の信号が南極氷床のコアにも認められることなど、評者にとってはなかなか興味深い話題が記されていた。

第12~14章では、化学反応を利用した有機物のESR

年代測定や ESR 線量計, ESR 顕微鏡に関する話題が取り上げられている。これらの章の内容は、第四紀学や地形・地質学的分野からはやや離れるが、広島・長崎の被爆とともにチェルノブイリ原発事故に関わる記述が加わっているのが印象的である。

前書きによれば、著者は本書を、ESR を使い馴れた物理・化学分野の研究者ではなく、ESR 年代測定に興味を持つ地質学者や考古学者など向けに執筆したとある。各章の扉にはユーモラスなイラストが描かれており、(著者を知る人ならば思わずニヤッとせずにはいられないだろうが、) これも著者のサービス精神の現れであろう。このようなサービス精神は、評者のような物理・化学分野の研究に疎い人間でも読みこなせるように、という配慮が随所に施されていることにも現れている。このような点から、本書の一読を、ESR 全般に興味を持つ研究者はもとより、とくに ESR 年代測定に少しでも興味を持つ地質学者、考古学、さらには第四紀学、地形学、自然地理学の各分野の研究者にお勧めしたい。

最後にあえて希望を述べさせていただければ、これまでに得られてきた ESR 年代値の層序学的検討や、他の年代値との比較検討に関する記述部分は、もう少し多くの具体例で少し詳しく突っ込んで示して欲しい所であった。おそらく、ESR 年代値を自分で測定してはいないが利用したいというユーザーにとっては、この点に関する記述に物足りなさを感じるのではないだろうか。評者は、そのような成果の丁寧な検討・公表が、ESR 年代測定に対する適切な評価や信頼性の獲得につながってゆくものと信ずる。もっとも、このような要求は本書の性格や内容量を考えるとあまり適切なものではないかも知れない。今後、上記のようなテーマに重点のおかれた印刷物が出版されてもよいと思うのだが、いかがなものだろうか。

高田 将志 (奈良女子大文学部)

第16期第2回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会 議事録

日時 1995年2月24日(金) 13時30分-16時40分
場所 日本学術会議第4部会議室(6F)
出席者 石渡良志委員長、青木謙一郎、日下部 実、半田 暢彦、松田 准一、水谷 仁、宮本 正道、矢内 桂三

1. 報告事項

- (1) 学術会議関係(青木委員より)
 - ・関係研連のいくつかの委員会設置について報告があった。
 - ・地質、鉱物各研連と鉱床専門委での討議についての説明があった。特に大学院重点化や改組の際、地学系が縮小の傾向にあるので、今後その対策について研連での議論が必要であるとの指摘がなされた。
- (2) 地球物理学研連から中澤高次委員と水谷 仁委員が推薦された。
- (3) 委員長から今期の研連の活動の概要について説明がなされた。

2. 審議事項

- (1) 前回議事録
議事録(案)を1カ所訂正の上承認した。
- (2) 名大・大気水圏科学研究所運営協議会運営協議委員の推薦:角皆静男教授(北大・大学院地球環境)を推薦した。
- (3) 今期の活動方針
 - ・日下部委員、半田委員、野津委員、石渡委員長からのいくつかの提言の紹介がなされた後、討議した。
 - ・将来のいろいろな情勢の変化に対処するため、将来計画について検討しておく必要性が指摘された。
 - ・任期の前半で地球化学宇宙化学の研究・教育体制の確立について検討し、後半では具体的な将来計画実施案を作成して、何らかの形で(対外報告その他)公表することを目指す。
 - ・上記研究・教育体制の確立および将来計画実施案の作成にあたっては地球化学会の将来計画委員会と緊密な連絡をとるとともに、日本地球化学会に対して調査・検討および原案作製を要請する事とした。
 - ・地球化学関連の研究・教育機関における最近の動向を協議するにあたって、以前に行われた日本地球化学会・将来計画委員会の調査資料を次の委員会で検討する事とした。
- (4) 次回(第3回)委員会
6月9日(金)13時30分からを予定することとした。

日本学術会議だより

№37

戦略研究と高度研究体制の構築を

平成7年5月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、4月に開催された第121回日本学術会議総会の概要と総会第二日に行われた会長基調報告の内容に自由討議の議論を踏まえて修文した「我が国の学術体制を巡って」の一部を紹介します。

日本学術会議第121回総会報告

日本学術会議第121回総会は、平成7年4月19日から3日間にわたって開催されました。

総会初日の午前中は、①「阪神・淡路大震災調査特別委員会の設置」、②「国際農業工学会(Commission Internationale de Genie Rural: CIGR)への加入」の2件が提案され、いずれも賛成多数で可決されました。

阪神・淡路大震災調査特別委員会は、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災が、日本学術会議として緊急に対応すべき課題であるとの結論に達したので、3月27日の第843回運営審議会において新たな臨時(特別)委員会として設置され、総会で承認することとしたものです。審議事項は、阪神・淡路大震災が提起した問題点について、地震学、災害工学等自然科学分野のみならず、人文・社会科学分野を含め総合的に検討することとしています。

また、国際農業工学会への加入は、従来、日本学術会議が日本の科学者の代表機関として、国際学術連合ICSUを始めとする46の国際学術団体に分担金を支払って加入していますが、今回の新規加入の承認によ

り、その数が47となり、国際農業工学会に対応する国内委員会は、農業土木学研究連絡委員会となります。

総会2日目は、伊藤正男日本学術会議会長から、「日本学術会議の課題～高度研究体制を目指して～」と題した基調報告が行われ、会長が提起したさまざまな課題について、会員間の自由討議が繰り広げられました。

この報告は、昨年の第120回総会において第16期活動計画を定めてから既に半年を経過しており、この間の多彩な活動を通じて伊藤会長が考えてきた問題、特に、我が国の学術体制の問題を中心に適宜取捨選択したいいくつかの課題について、伊藤会長自身の見解を述べ、人文・社会科学分野から自然科学分野わたる幅広い会員各位の意見を聞き、会員に共通の基本認識を深めることを目的として行われたものです。

なお、伊藤会長が、基調報告の内容に、自由討議の議論を踏まえて修文した「我が国の学術体制を巡って」は、序文の他7項目から構成されていますが、そのうち2項目について紹介します。

我が国の学術体制を巡って(抄)

—戦略研究と高度研究体制—

日本学術会議会長 伊藤 正男

「戦略研究」とその意義

大学では知的興味に基づく基礎研究を、企業では実用上の重要性を持つ応用研究を、という古典的な役割分担はもはや成り立たなくなっている。最近英米両国で基礎研究と応用研究の間に設けられた「戦略研究」のカテゴリーは、工学、農学、医歯薬学系の研究室では意識しないまま基礎研究として行われてきたものを多く含み、また企業において「目的基礎研究」と呼ばれるカテゴリーとはほぼ対応している。研究者の知的興味と実用価値とは一般的にいて相反するが、そのいずれかに限定せず、両方の要素を両立させるカテゴリーである。研究費を受ける側にとっても、出す側にとっても受容し易い論理を提供し、科学政策上甚だ有効

な整理概念である。(中略)

我が国においては、応用研究に優れる一方、基礎研究は一般に貧弱であり、我が国の応用研究はむしろ国外の基礎研究を基盤とすることが少なくなかった。この点は英国とはちょうど事情が逆であるが、解離した基礎研究と応用研究の間を埋める必要があるのは同様である。この解離の社会的背景にはやはり我が国独自のものがある。我が国の大学においては、研究の自由の主張と産学協同の弊害に対する危惧が強かった一方、企業の方では、我が国の大学の基礎研究にあまり大きな利用価値を見い出さなかったといっている言い過ぎであろうか。率直に言って、今日でも多くの企業家は、大学等で行われる基礎研究に利用価値を認めるのでは

なくて、基礎研究に対する精神的な共感ないし慈善（チャリティ）の気持ちから、人材供給のパイプをつなぐ目的のため、あるいは基礎研究只乗りの非難をかわすために、これを支援する必要があると考えておられるように見受けられるといえは誤解であろうか。企業等から大学への奨学寄付金が平成4年度501億円に及んだのはまことに喜ばしいことであるが、受託研究費が53億円に止まっているのは、依然として企業にそのような潜在意識のあることを示唆するように思えてならない。「戦略研究」の概念は、大学等でこれまで基礎研究として一括されてきたカテゴリーの中で、近い将来に应用される可能性を持つものに特別の照明を当て、その企業との近縁性を意識させる効果がある。また、会社等で使われる基礎研究費は、年間6千50億円にのぼるが、これは実際には大部分が「戦略研究」に向けられていると推測され、ここに大学等の研究者との協力の大きな素地が十分にあることが示唆される。（中略）

「脳の科学と心の問題」特別委員会が4月18日の連合部会で中間報告された問題を例にとると、脳がいかに働いて心を生み出すのかの謎を解くことは、基礎科学の最終問題といってよいほど根源的な人間の知的興味の的である。140億といわれる膨大な数の神経細胞の働きがいかにして一つの意識というまとまった働きに統合されるのかは、それ自体極めて深遠な基礎科学の問題である。しかし、脳の研究はその物質的なメカニズムの解明により、脳神経系の病気を根絶し、脳の老化を防ぐといった医療上の大きな「戦略性」を孕んでいる。また、将来脳の情報処理の仕組みが解明されれば、ニューロコンピュータのような新たな原理を持つ情報機械を生み出す工学上の「戦略性」も極めて大きい。さらに、心のレベルについても、育児や教育の参考になり、産業心理学を助け、災害時の特異な心理状態への適切な対処を示唆するなど、人文・社会科学の広い分野での「戦略性」がある。米国の研究者がいち早く議会で働きかけ、1990年に始まる脳の10年Decade of the Brainが決議され、ブッシュ大統領が行政機関に対して脳の研究への支援を要請したのも、これらの戦略性に着目してのことに他ならない。

このように、「戦略性」に注目して強力な研究支援を行うことは、基礎科学としての脳研究にとっても、助けになりこそすれ妨げになるとは思われない。一般的にも「戦略研究」への支援からその基盤である純粋基礎研究への波及効果が期待できるが、ただ、必ずしもそれが望めない分野も少なくない点は注意を要する。研究者の中には、「戦略研究」を重視すると純粋基礎研究が圧迫され、置き去りにされる恐れがあるとして警戒する向きも少なくない。基礎研究の源は人間本来の知的興味にあり、応用とは無縁のところから始まることは確かな事実である。このような知的興味に基づく基礎研究を重視し、支援することが知的な文化的社会にとって有意義であることはもちろんである。あるいは、レーザーの発見のように純粋基礎研究の成果が長い時間の間に周辺技術の進歩により大きな戦略価値を持つようになった事例は数多くあり、基礎研究に潜在

する戦略性を予見することの困難さも指摘される。最近漸く基礎研究への理解を深めてきた我が国の社会に「戦略研究」の概念を持ち込んで、逆効果を招くことは私の本意ではない。私が強調したいのは、我が国においては本来基礎研究が弱体であったのに加えて、「戦略研究」もまた明確に意識されず、大学と企業の間が空白のままに置かれてきたことである。この空白を埋めるために、基本的なコンセプトにまで遡って大学と企業との関係を再構築することの必要性である。

＜我が国に「高度研究体制」を＞

歴史的な変化の時に当たり、学術の格段の推進が待望される今日、世界と我が国の学術体制にまつわる多くの問題を指摘した。我々は、多くの現実的な制約の下、先行きの不透明さに悩みながらも、次の世紀に向けての見通しを明らかにしようと努力しているが、ここにおいて、特に研究者の立場からの発想を基に「高度研究体制」とも呼ぶべき我が国の将来の学術体制を構想することが重要と考える。

この体制を実施するためには、まずともかく大きな研究資金が必要である。ゆっくりながら堅実に改善を図っていく我が国得意のグレードアップ方式では、この競争的な世界の中で生き残ることは難しい。すでにすっかり体制を整え直し、急速に進みだした世界の進度に遅れないようにするだけでも容易ではない。激しい先取権争いから脱落すれば、すぐ遠く置き去りにされてしまう。これまでのように、他国が多額の犠牲を払って開拓した路を安全に辿っていくことはもはやできない。誰にとっても始めてのフロンティアで、世界と互角に公正に競争していかなければならない。これまでのように、最小の投資で最大の効果を挙げることは望むべくもない。最大の効果は最大の投資をするものにしか保証されない。（中略）

このような「高度研究体制」は、前期において日本学術会議が提案した国際貢献のための新システムの構想を包含し、昨年9月我々が採択した第16期活動計画の精神を凝縮して現するものである。恐らくは我が国の研究者の多くが抱いている強い願望の表現であるが、ただの願望ではなく、このようなものがなければ、我々研究者の未来はありえないという厳しく強い要請を含んだものである。研究者本来の自由で創造的な学問的興味を追求しながら、国や社会の強力な要請に応え、深刻な地球規模問題の解決に尽力することを可能にするためには、なくてはならない体制である。

戦後50年間、営々として築いてきた我が国の学術の現状が、このような要請にどのようにに接近し、あるいはどのようににまだ遠いのか、今こそ冷静に分析すべき時である。日本学術会議の審議の中から、この「高度研究体制」のあるべき姿をより具体的に現せば、それは今日我が国の学術体制の現状を映し出し、それがいかに高度とはいいがたい状態にあり、むしろ至る所に危機的な状況が伏在していることを示すだろう。そして今後、我々が努力を結集すべき明確な目標を与えてくれるであろう。

（全文は、日本学術会議月報平成7年5月号参照）

1995年度日本地球化学会年会 時間割表

於：東海大学海洋学部

会場	午前	午後		18	18:30
11月10日(金)	A B C D	8:00から受付	課題2:海底における記録と変質—古海洋復元に向けて—	総会 奨励賞、学会賞、柴田賞 受賞記念講演 (B会場)	懇親会 ホテルサント潜水
			課題1:西部北太平洋の大気化学		
			陸水		
			課題3:地球表層生物圏の微量元素の化学		
11月11日(土)	A B C D		ポスター(P会場)	講演会「南極と北極の神秘」	
			海		
			地球外物質		
			火山		
11月12日(日)	A B C D		有機物		
			海		
			大気・降水		
			岩石・地殻		
市民	会場		地球外物質		
			堆積物・有機物		

講演時間(討論時間を含む)：一般講演15分、課題講演20分、市民：清水市民会館中ホール

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。関連の研究集会、シンポジウムの案内、人材の募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。海外の学会の参加報告やフィールドでの体験談なども歓迎します。

本ニュースは年4回（大体2月、6月、9月、12月）発行されます。次回143号は11月下旬締め切り、12月中旬発行予定です。

（編集担当 中井俊一）

編集者 中井俊一、鍵 裕之 〒113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部地殻化学実験施設
電話 03-3812-2111（内）4450 ファックス 03-3816-1784
発行者 日本地球化学会 〒113 文京区本駒込5-16-9 学会センター C21
日本学会事務センター内 電話 03-5814-5801

日本地球化学会ニュース

No. 143

1995. XII. 5

日本地球化学会「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」

1996年度受賞候補者推薦の募集

応募期限 1996年1月31日（水）

日本地球化学会授賞規定により、柴田賞、学会賞、奨励賞、功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては、下記ご参照のうえ、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を、自薦他薦を問わずご推薦下さるようお願いいたします。

候補者の資格：

（柴田賞） 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者。

（学会賞） 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

（奨励賞） 1961年4月2日以降に生まれた本会正会員（学生会員を含む）で、地球化学の進歩に寄与する秀れた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる者。

（功労賞） 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

なお、参考までに、1995年度までの受賞者は、会員名簿のハンドブック部に掲載されています。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦書を、1月31日（水）までに学会事務局へ（当日消印有効）。

提出先：〒113 文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

推薦書の書式は、会員名簿のハンドブック部に掲載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用して下さい。なお、この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事（下記）まで。

〒464-01 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大気水圏科学研究所

増 澤 敏 行

Tel. 052-789-3498

Fax. 052-789-3449

日本地球化学会春季シンポジウム開催のお知らせ

1996年地球惑星科学関連学会合同大会（3月26日～29日）の期間中に、固有セッションとして表記シンポジウムを開催します。日本地球化学会は春季シンポジウムでの講演を広く募集します。シンポジウムは例年どおり一般講演を中心として構成されます。日程は合同大会のプログラム編成作業が終了するまで確定できませんが、講演数に応じて会期中の1～2日間を予定しています。春季シンポジウムの講演申し込み、問い合わせは下記のとおりです。

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪市立大学理学部地球学教室

益田 晴恵

Tel. 06-605-2591

Fax. 06-605-2522

E-mail h1657@ocugw.cc.osaka-cu.ac.jp

講演申し込み締め切りは1996年1月8日（必着）です。ファクシミリでの申し込みはできません。期限を厳守してください。講演申し込み用紙は本ニュースと一緒に

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。関連の研究集会、シンポジウムの案内、人材の募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。海外の学会の参加報告やフィールドでの体験談なども歓迎します。

本ニュースは年4回（大体2月、6月、9月、12月）発行されます。次回143号は11月下旬締め切り、12月中旬発行予定です。

（編集担当 中井俊一）

編集者 中井俊一、鍵 裕之 〒113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学理学部地殻化学実験施設
電話 03-3812-2111（内）4450 ファックス 03-3816-1784
発行者 日本地球化学会 〒113 文京区本駒込5-16-9 学会センター C21
日本学会事務センター内 電話 03-5814-5801

15-314

日本地球化学会ニュース

No. 143

1995. XII. 5

日本地球化学会「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」

1996年度受賞候補者推薦の募集

応募期限 1996年1月31日（水）

日本地球化学会授賞規定により、柴田賞、学会賞、奨励賞、功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。

つきましては、下記ご参照のうえ、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を、自薦他薦を問わずご推薦下さるようお願いいたします。

候補者の資格：

（柴田賞） 地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者。

（学会賞） 地球化学の分野で特に優秀な業績を収めた本会会員。

（奨励賞） 1961年4月2日以降に生まれた本会正会員（学生会員を含む）で、地球化学の進歩に寄与する秀れた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる者。

（功労賞） 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者。

なお、参考までに、1995年度までの受賞者は、会員名簿のハンドブック部に掲載されています。

募集の方法：本会会員の推薦による。

推薦の方法：所定用紙に記載した推薦書を、1月31日（水）までに学会事務局へ（当日消印有効）。

提出先：〒113 文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内

日本地球化学会受賞者選考委員会

推薦書の書式は、会員名簿のハンドブック部に掲載されています。これをコピーして使用するか、同様の書式をワープロ等で作成して使用して下さい。なお、この件についてのお問い合わせは本会庶務担当幹事（下記）まで。

〒464-01 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大気水圏科学研究所

増 澤 敏 行

Tel. 052-789-3498

Fax. 052-789-3449

日本地球化学会春季シンポジウム開催のお知らせ

1996年地球惑星科学関連学会合同大会（3月26日～29日）の期間中に、固有セッションとして表記シンポジウムを開催します。日本地球化学会は春季シンポジウムで講演を広く募集します。シンポジウムは例年どおり一般講演を中心として構成されます。日程は合同大会のプログラム編成作業が終了するまで確定できませんが、講演数に応じて会期中の1～2日間を予定しています。春季シンポジウムの講演申し込み、問い合わせは下記のとおりです。

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪市立大学理学部地球学教室

益田 晴恵

Tel. 06-605-2591

Fax. 06-605-2522

E-mail h1657@ocugw.cc.osaka-cu.ac.jp

講演申し込み締め切りは1996年1月8日（必着）です。ファクシミリでの申し込みはできません。期限を厳守してください。講演申し込み用紙は本ニュースと一緒に

に郵送される「地球惑星科学関連学会連絡会ニュース(合同大会特集号)」に刷り込みの申し込み用紙を使ってください。講演申し込みの詳細は同連絡会ニュースをご覧ください。

なお、共通セッションの講演申し込み先は固有セッションとは異なり、大阪大学理学部のプログラム委員会ですので注意してください。

研究助成「鳥居基金」募集のおしらせ

「鳥居基金委員会」委員長 脇田 宏

鳥居基金は本年は4件の助成を行いました。

1996年度も多くの応募をお待ちしています。

1996年度4月～9月分応募期限

1996年1月31日(水)

応募方法：所定用紙に記載した申請書を、1月31日(水)

までに学会事務局へ(当日消印有効)

提出先：〒113 文京区本駒込5-16-9

日本学会事務センター内

日本地球化学会鳥居基金委員会

交付申請書の書式は1995年名簿のハンドブック部に掲載されていますので、これを複写したものをご使用下さい。なお、この件についてのお問い合わせは本委員会委員長もしくは本会庶務担当幹事(下記)まで。

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地殻化学実験施設

脇田 宏

Tel. 03-3812-2111 (内) 4621

Fax. 03-3816-1784

〒484-01 名古屋市中種区不老町

名古屋大学大気水圏科学研究所

増澤 敏行

Tel. 052-789-3498

Fax. 052-789-3449

1995年度日本地球化学会年会報告

1995年度の地球化学会年会は11月10日から12日にかけて東海大学海洋学部で行われた。清水における年会開催は過去2回あり、1971年、1981年に続いて今回で3回目である。本年会の参加登録者数は478名、総講演数は301件(講演取り消し4件を含む)で、その内訳は課題講演67件、一般講演184件、ポスター46件、学会賞等受賞講演4件であった。

本年の課題講演は次の4課題を設けた。(1)西部北太平洋域の大気化学(コンピーナー；秋元 肇、植松光夫)、(2)海底における記録と変質—古海洋復元に向けて—(コンピーナー；大場忠道、加藤義久)、(3)地球表層生物圏の微量元素の化学(コンピーナー；鈴木 款、豊田恵

聖)、(4)自然災害の地球化学(コンピーナー；野津憲治、川邊岩夫、和田秀樹)。これらの課題は現在進行している国際プロジェクト研究に対応したものや、社会との関係の深いテーマを選んだことでタイムリーであったと認識している。また、コンピーナーにお願いして積極的に招待講演に準じた講演依頼をするなど、プログラム編成に努力していただいた。おかげで、どの会場も満席で、一部では立ち見もできるほど参加者が多く、課題4では翌日の静岡新聞にも取り上げられるなど成功であったと自画自賛している。ただし、時間的制約で一部の会員の講演申込を関係する一般講演でお願いせざるを得なかったことは、誠に残念で、この点お詫びします。

一般講演は「鉱床・温泉・熱水」、「陸水」、「海洋」、「地球外物質」、「火山」、「有機物」、「堆積物」、「大気・降水」および「岩石・地殻」の9つの分野に分類した。

ポスターセッションは1会場で、討論時間は2日目総会前の1時間であった。多数の会員が熱気あふれる議論を展開していたことを思えば、46件の発表を行う会場としては幾分狭すぎたのではないかと、また討論時間は少々短すぎたのではないかと感じられた。このことは反省点として、今後プログラム編成等にも工夫を要すると思われる。

学会賞等受賞講演は2日目の総会終了後行われた。まず奨励賞を受賞された平田岳史および杉谷健一郎会員による各講演(座長は清水 洋および川邊岩夫会員)から始まり、学会賞は和田英太郎会員(座長角皆静会員)、そして柴田賞の本田雅健名誉会員(座長木越邦彦名誉会員)による講演があった。どの講演も受賞記念講演として内容の濃い、それでいて分野の異なる会員にもわかりやすい講演で、約200名の参加者に大いに感銘を与えた。特に柴田賞の本田名誉会員による第1線の研究者としての講演と座長との軽妙なやりとりは参加者一同脱帽の感があった。

懇親会は例年通り、2日目夜清水市内のホテル宴会場で開催された。事前申込者は約180名、当日申込が90名あり、鳥居鉄也、木越邦彦、猿橋勝子、本田雅健および北野 康の各名誉会員、招待者として宮城島弘正清水市町、酒匂敏次海洋学部長ほか、静岡県、静岡市、清水市、静岡新聞、中部電力の関係者、それに準備委員会メンバーを合わせると約300名にもものぼる参加者がおり、準備委員会としても予想もしなかった参加者数で、大盛況であった。

夜間集会は1日目夜6時30分から開催された。話題は(1)地球化学の教育・研究をめぐる日本の状況、(2)地球化学の教育・研究体制に関する将来計画、(3)日本地球化学会の財政状況とその対応、の3項目であった。当日はビール等飲み物におつまみを用意し、多くの会員の参加

兵庫県南部地震で異常 清水地球化学学会で報告

ラドンで東海地震
キャッチできるか

静岡新聞 11月20日(月)掲載

を期待したが、約60名と少々残念であった。そこで参加者にはさらにビールを振る舞ったところ、各話題で大いに議論が盛り上がり、特に深刻な学会財政状況に関する話題では白熱した討論が展開された。結局8時30分の予定を大幅に延長し9時閉会となった。

本年会のオプションとして市民対象の講演会「北極と南極の神秘」を開催した。11月12日(日)13時から、会場を清水市民文化会館小ホール(500名収容)とし、講演会に先立ち主催者を代表して半田会長、そして清水市長の挨拶の後、鳥居鉄也名誉会員による「南極から見た地球」、アラスカ大学地球物理学研究所所長赤祖父俊一教授による「躍動する北極圏」の講演が行われた。この講演会は静岡新聞・SBS 静岡放送および中部電力の共催、それに静岡県、静岡市および清水市の後援を得て開催にこぎつけた。なお、約1000名近いはがきによる参加申し込みがあり、抽選で500名とするなど、当初のもくろみは大いにはずれ、関係者一同うれしい悲鳴をあげたこと、また鳥居鉄也名誉会員には南極および北極の地図等資料を参加者に配布していただいたこと、そしてなによりなのは赤祖父教授には参加者による質問に答えていただいたことなど、この講演会が参加した市民に大いに爽りあるものであったことと信ずる。

本年の年会は主として清水・静岡地区の会員と東海大学海洋学部および静岡大学理学部の学生諸氏によって企画運営した。年会当日には北海道東海大学の会員の方々にもお手伝いしていただいた。そして課題後演ではコンピーナーの皆様にご協力頂いた。講演会では多くの人々

にご尽力頂いた。また、賛助会員を含む企業各社に協力賛助を呼びかけたところ、計16社の企業の協賛を得、そのうち休憩室では3社による展示が行われた。加えて野崎義行会員による本の頒布会も開かれた。このように本年会では幸い多数の会員の参加を頂き、また一方では市民の参加を得て本年会を盛況の内に無事終了する事ができたことを感謝したい。例年に比べて年会開催を1ヵ月遅くしたが、その結果富士山から駿河湾にいたる風景も堪能していただいたことと思います。

年会代表者として会員と関係者の方々、それに美しい風景に深甚なる謝意を表します。

(大会実行委員長 東海大学海洋学部 岡部 史郎)

年会夜間集会

「地球化学・地球化学会をめぐる現状と課題」
の開催

半田 暢彦(日本地球化学会会長)

近年、科学および科学技術の急速な進歩は、地球惑星科学の発展を促すとともに、この学問分野における地球化学・宇宙化学研究の役割の重要性が強く指摘されている。従って、これに対する具体的な対応が急務である。

また、本学会の経理は、単年度ベースでは赤字基調となっており、早急に改善すべき時期に至っている。このため、これらの問題点を会員に示し、意見を求めるため、以下の通り夜間集会を開催し、意見をうかがった。

日時：1995年11月10日(金) 18:30-20:50

場所：東海大学海洋学部8号館

- 1) 開催の主旨説明 学会長 半田 暢彦
- 2) 地球化学の教育研究をめぐる日本の状況
—地球化学の教育・研究体制に関する将来計画—
・将来計画委員長 高岡 宣雄
・地球化学宇宙化学研究連絡委員会委員長 石渡 良志
- 3) 会員によるアンケートの集計結果
会員担当幹事 富樫 茂子
- 4) 日本地球化学会の財政状況とその対応

財政委員会委員長 野尻 幸宏

本夜間集会には、比較的高年齢層の会員約40名の参加のもとに開催された。将来計画委員会の報告においては、従来からの地球化学の概念に加え、人(生物)、地球、化学物質の共生の視点からの研究の重要性が指摘された。次期評議員会においても同委員会を発足させ、引き続き地球化学分野の発展のため具体案を検討の予定である。地球化学宇宙化学研究連絡委員会においても、第16期の最重要課題として地球化学・宇宙化学の将来計画と取り上げている。両者の緊密な連携が期待される。

本学会の財政に関しては、日本地球化学会ニュース No. 142 に報告されている。諸般の事情により本学会の

財政状況に黄信号がとまり、それへの対応に関して積極的な意見が出された。会員アンケートでは、若手研究者の育成、教科書の発行などが重要であると指摘された。

会費自動引き落としの際の 通帳記帳の改善について

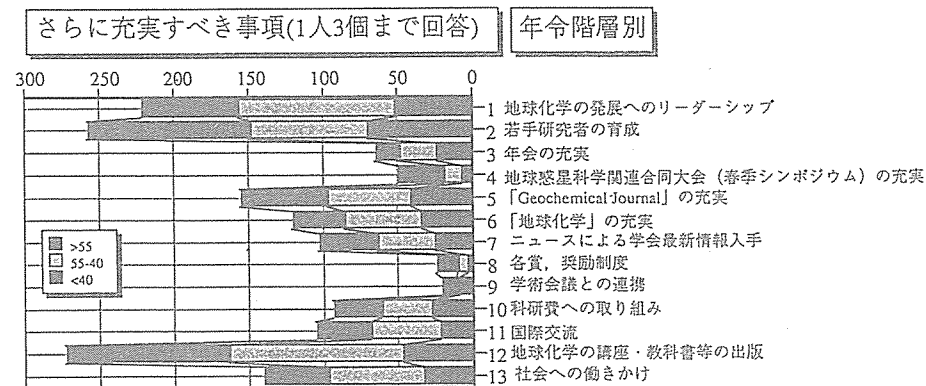
1995年度より本学会も学会費の預金口座からの自動引き落としを開始し、初年度は164会員のまた1996年度からは32会員が新たに登録し計195名が登録しております。さて引き落としの際学会名が記帳されず、複数の学会で自動引き落としをしている場合に解らないという不満が多数寄せられておりましたが、1996年1月23日の引き落としから「MSF（チキュウカガク）と記帳されることとなりました（ただし大和、東京、常陽、静岡、十六銀行など約20%の金融機関では記帳機の制約から従来通りミツイファイナンス、MSF 等と印字されます）。初期登録手数料250円と毎年の引き落とし手数料200円は学会が負担しています。1997年度からの自動引き落とし（毎年1月23日）の登録締切は1996年9月30日ですので、未登録の会員は会費請求票に同封している申込用紙に記入捺印（金融機関登録印）のうえ学会事務センターの本学会宛送付し、是非登録をお願いいたします。

庶務幹事 増澤 敏行

1995年度名簿改定時のアンケートの集計結果

日本地球化学会が今後さらに力を入れることを期待するものを3つ選択してくださいという質問を致しました。「さらに」とお聞きしていますので、既に充実している事項は選択されなかったと考えられます。708枚の葉書が回収され、そのうち576人の方から回答がありました。全会員の約6割の方からの意見をいただいたことになります。

年齢層を、40歳以下、40～55歳、55歳以上の3段階に分けて下図に示しました。年齢層別に大きな違いは見られません。



第1位は「地球化学の講座・教科書等の出版」、第2位の「若手研究者の育成」、第3位は地球化学の発展へのリーダーシップです。第1位と第2位は回答者の約半数の人が選択しています。

補足欄に記入頂いた中では、環境問題への取り組みの強化への意見が最も多く、全ての意見は評議委員会に報告されております。

これらの集計結果が今後の会の活動に活かされることを期待します。

(会員幹事、富樫 茂子)

1995年度第1回「鳥居基金」助成実施報告書

氏名：益田 晴恵（大阪市立大学理学部地球学科）

助成：海外派遣（ロシア共和国）

課題：第8回水-岩石相互作用国際シンポジウムに出席

第8回水-岩石相互作用シンポジウムは8月15日～8月19日の5日間（17日は巡検）にわたって、ウラジオストク市庁舎で行なわれた。シンポジウムを挟んで、前後にはバイカル湖周辺の地熱地帯とカムチャッカ半島の火山地帯の巡検も行なわれた。参加者は22か国からの約170名で、当日発表された論文の件数は発表者数とほぼ同数であったと聞いている。日本からの参加は、主催国であるロシアに次いで多い22名であった。筆者は地殻内部の熱水系のセッションで、Formation mechanisms of authigenic smectite, I/S and illite in mudstones from the Nankai Trough という題目で発表を行った。

発表内容では野外調査に基づいた研究成果が目についた。大陸地殻内部での火山・地熱系や陸水域での汚染を含めた金属イオンの挙動や変質鉱物形成などを扱ったものが多かった。室内実験による成果発表も、天然の系を忠実に再現しようとしたものが目についた。合成実験による微小領域での鉱物形成過程などの発表が目についた前回と較べると、今回の発表論文の傾向は、天然の系での現象を重視するという点で、原点回帰した印象を持っ

た。海底熱水系や生物の関与する鉱物形成などに関する発表は少なかったが、これはブームが去ったというよりは、その分野の人が積極的に参加しなかったととらえるべきだろう。

回を重ねるごとに参加者が増え、前回の出席者は700名近くに及んだと聞いている。今回の規模はそれに較べるべくもない。極東ロシアという移動手段の限られた場所を開催地に選んだことだけが理由ではなく、直前になっての会期日程変更や事務連絡の悪さから、参加をとりやめた人が多かったようである。ロシア共和国の科学を取り巻く情勢は厳しく、こうした悪条件のなかで、とにもかくにも会議が無事に終了したのは、主催者であるOleg Chudaev 博士や組織委員の尽力の賜物であるにちがいない。（1995年8月31日）

【新入会員紹介】（1995.5.1～9.30）

正会員28名（内学生12名）

LIN Saulwood Inst. of Oceanography, National Taiwan Univ., Taipei, Taiwan

S松本 潔 名古屋大学大気水圏科学研究所

S横山 哲也 東京大学理学部地殻化学実験施設

岩月 輝希 動力炉・核燃料開発事業団東濃地科学センター

S熊田 英峰 東京農工大学農学部水環境

S野田 香織 愛媛大学農学部

高木 伸司 神奈川大学理学部化学科

S平岩 万奈 早稲田大学理工学研究科資源工学専攻

中野 聡志 滋賀大学教育学部地学教室

小寺 透 日本海洋事業(株)海技部海技課

S加藤 研 東京都立大学理学部地理学科

廣井 美邦 千葉大学理学部地球化学科

富安 卓滋 鹿児島大学理学部化学科

草地 功 岡山大学教育学部理科地学

S豊田賢二郎 京都大学防災研究所

S張 勁 東京大学海洋研究所

五十嵐康人 気象庁気象研究所地球化学研究部

川瀬 雅也 香川大学教育学部化学

S中村 正和 大阪市立大学理学部地球学科

NARYANTO, Heru Sri Natural Resources Development, Indonesia

丸尾 雅啓 滋賀県立大学環境科学部

田中 弘章 東海大学附属仰星高等学校

S吉岡 秀佳 名古屋大学理学部地球惑星科学科

町野 彰 東京ガス(株)基礎技術研究所

S圓入 敦仁 東北大学理学部地圏環境科学科

S島岡 晶子 東京大学原子核研究所

佐藤 聡美 福島県衛生公害研究所

中村 智樹 九州大学理学部地球惑星科学科

賛助会員 3名

日本電子(株)名古屋支店

昭光通商(株)

日酸商事(株)

【変更者紹介】

学生→一般 9名

皆川 昌幸 水産庁西海区水産研究所海洋環境部

原田 尚美 海洋科学技術センター深海研究部

大河内直彦 京都大学生態学研究センター

鈴木 昌弘 工業技術院資源環境技術総合研究所

中村 純也 日本エヌ・ユー・エス(株)名古屋事業所

長谷川 卓 東北大学理学部地球環境科学教室

長谷川英尚 (株)環境科学技術研究所

狩野 直樹 新潟大学自然科学研究科物質科学専攻

米延 仁志 鳴門教育大学学校教育学部

一般→学生 1名

S佐藤 聡美 Columbia State 大学日本校生理学研究科

国内→海外 1名

MAMBO, Vikandy Silusawa Kampala, Uganda
所属変更

正会員14名（内学生3名）

坂本 充 滋賀県立大学環境科学部

S三浦 弥生 東京大学地震研究所

S大浦 泰嗣 日本原子力研究所東海研究所

S中川 明 地熱エンジニアリング(株)探査部

斎藤 千鶴 海洋科学技術センター海洋観測研究部

北島富美雄 九州大学理学部地球惑星科学教室

城戸 勝利 (株)海洋生物環境研究所実証試験場

宮島 利宏 東京大学海洋研究所

今柴 直也 国立極地研究所

立川 涼 高知大学

上田 晃 三菱マテリアル(株)総合研究所生活環境技術研究所

濱 克宏 動力炉核燃料炉開発事業団東濃地科学センター

阿部 泰行 三井金属資源開発(株)奥会津事務所

伝法谷宣洋 電源開発(株)総合技術試験所

(Sは学生会員)

1995年第3回評議員会議事録要旨

1995年度第3回評議員会は、年会前日の11月9日（木）15：00より20：00まで、半田会長、高岡副会長を始め評議員16名とオブザーバとして角皆静男会員が出席して東海大学海洋学部1号館2階大会議室で開かれた。

以下に議事録の概要をまとめる。正式な議事録は次回評議員会で承認後「地球科学」に掲載する。

1. 議事に先立ち、1995年会実行委員長の岡部史郎会員から歓迎の挨拶があった。
2. 庶務、会計、編集、出版、行事、会員に関する報告および各委員会ならびに学術会議研連等からの報告があった。
3. 平成7年度「研究成果公開促進費（学術定期刊行物）」の補助金（167万円、前年比7万円減）と平成7年度「研究成果公开发表（B）」の補助金（110万円）を受領した。
4. 1995年会員名簿を発行し（全印刷頁118p、1,200部、1,119,259円；E-mail 294件；所属一覧10p、ハンドブック30p、広告5pを含む；1993年に比べ増頁40p、支出増289,235円、広告の増収300,000円で印刷費等の支出増をカバー）。
5. 会費未納会員への会費納入要請書を発送した（4年4名、3年7名、2年15名、1年104名、計130名）。
6. 会費自動引き落としの1996年度よりの新規登録を締め切った（32名で総計195名）。
7. 9件の学会等の共催、後援、協賛を承認した。
8. 平成7年度日産学術助成推薦の応募を7月28日に学会として締切り、一般研究1件、奨励研究6件を日産科学振興財団へ推薦した。
9. 平成8年度科学研究費補助金審査委員候補者として、郵送による評議員による投票を行い、細目「地球化学」の1段審査委員4名（大気水圏生物圏関係2名；固体地球関係2名）の推薦依頼に対しては、8名連記投票による得票の上位8名（田中剛、野崎義行、野津憲治、下山晃、松田准一、和田英太郎、海老原充、清水洋）からそれぞれ2名計4名を、分科「地球科学」の2段審査委員2名（大気水圏生物圏関係1名；固体地球関係1名）の推薦依頼に対しては、4名連記投票による得票の上位4名（高岡宣雄、石渡良志、日下部実、角皆静男）からそれぞれ1名計2名を、会長と副会長が分野を考慮して推薦した。
10. 1995年5月1日から9月30日までに入会28名（正会員25名内学生12名、賛助会員3名）、退会（正会員3名内学生1名）を承認した。その結果正会員990名（学生90名を含む）、賛助会員20名、名誉会員10名、計1020名（39名の在外会員を含む）となった。
11. 会則第5条に基づき、会費を4年以上滞納している4会員の除籍を承認した。
12. 兵庫県南部地震被災会員に対する特別措置を希望した一般正会員12名、賛助会員1名の1995年度会費の免除を承認した（総計111,000円）。
13. 1995年度第2回鳥居基金助成として1件の採択を

承認した：海外派遣、鶴島修夫（北海道大学水産学研究科院生）、10万円。

14. 1996-97年度役員選挙投票の結果を受け、次期役員を承認した：会長：高岡宣雄、副会長：石渡良志、監事：一國雅巳、評議員：野津憲治、清水洋、田中剛、北逸郎、赤木右、松田准一、佐野有司、千葉仁、蒲生俊敬、増澤敏行、長尾敬介、植松光夫、高橋和也、中村昇、南川雅男、村江達士、篠原宏志、下山晃、八木尚義、能田成；次点 福島和夫
 15. 会長が委嘱する追加評議員として角皆静男会員（北海道大学地球環境科学研究科、1996年度年会担当：任期1996年度）を承認した。
 16. 1995年度の総会に提出する議案として、1994年度事業報告ならびに決算報告および監査報告、1995年度事業中間報告ならびに決算中間報告、1996年度事業計画ならびに予算案を承認した。
 17. 学校教育における地学教育の重要性に鑑み、本学会の学校科目「地学」関連学会連絡協議会への参加を承認し、本会からの協議員は次回評議員会で選出することとした。
 18. 学会賞受賞者選考細則第3条に基づき、1996年度よりの任期2年の委員として、投票の結果松田准一次期評議員、半田暢彦会長を選出した（次点は下山晃次期評議員）。なお継続委員は野津憲治、日下部実、石渡良志の3評議員である。
 19. 委員選出に関する規定のない1996年度の1996-97年度鳥居基金委員会委員について（1995年度は脇田宏委員長と高岡宣雄、石渡良志の2委員）、意見交換の結果次期会長となる高岡宣雄委員1名を改選することとし、投票の結果、半田暢彦会長を選出した。なお次回の1995年度第4回評議員会（新旧合同）は11月12日（日）17：30から東海大学海洋学部1号館2階大会議室で開催する。
- 1995年第4回評議員会議事録要旨
- 1995年度第4回評議員会（新旧合同）は、年会最終日の11月12日（日）17：30より半田会長、高岡副会長を始め現評議員13名、新期評議員7名が出席して東海大学海洋学部1号館2階大会議室で開かれた。以下に議事録の概要をまとめる。正式な議事録は次回評議員会で承認後「地球化学」に掲載する。
1. 第32回宇宙空間科学COSPAR総会（1998.7.6-11：名古屋）の本学会からの運営委員を田中剛評議員に委嘱した。
 2. 1996年度学会賞等受賞者選考委員会委員長を野津憲治委員に委嘱することとした。
 3. 1996-97年度鳥居基金委員会委員長を脇田宏現委員

長に委嘱することとした。

4. 学校科目「地学」関連学会連絡協議会への本学会からの協議員は、野津憲治評議員と蒲生俊敬新期評議員のどちらかとする事とした。
5. 1994-95年度の活動の概要と残された課題について各幹事および各委員長から報告があった。なお1996年度第1回幹事会は2月4日（土）14：00-18：00に、第1回評議員会は2月10日（土）14：00-17：00に東京大学本郷で開催の予定。

1995年度日本地球化学会総会報告

1995年度日本地球化学会総会は、11月11日14時より東海大学海洋学部において、下記の総会次第に従って行なわれた。

総会議事次第

1. 開会宣言
2. 議長選出 議長には角皆 静男会員（北海道大学）が選出された。
3. 会長挨拶 半田 暢彦会長
4. 大会実行委員長挨拶 岡部 史郎会員
5. 報告「本学会を取り巻く状況について」 高岡 宣雄副会長
6. 議事
 - 1) 1994年度事業報告ならびに決算報告および監査報告
 - 2) 1995年度事業中間報告ならびに決算中間報告
 - 3) 1996年度事業計画ならびに予算案
 - 4) 1996-97年度役員選挙報告 中井 俊一 選挙管理委員長
 - 5) 鳥居基金助成実施報告 脇田 宏 鳥居基金委員長
 - 6) 財政委員会報告 野尻 幸宏 財政委員長
 - 7) 名誉委員の推挙 半田 暢彦 会長
 - 8) その他
7. 名誉会員証の贈呈 北野 康 会員
8. 1995年度日本地球化学会学会賞等受賞式
 - 1) 柴田賞 本田 雅健名誉会員「隕石中の宇宙線生成核種に関する研究」
 - 2) 日本地球化学会賞 和田英太郎会員「窒素安定同位体による生物地球化学的研究」
 - 3) 日本地球化学会奨励賞 平田 岳士会員「IPC 質量分析計による微量オスミウム同位体比精密測定法の開発と鉄隕石-石鉄隕石の起源解明への適用」
 - 4) 日本地球化学会奨励賞 杉谷健一郎会員「元素存在度比の解析によるマンガンマイクロノジュール、マンガンバンド、チャートならび

に縞状鉄鉱床の堆積古環境の研究」

9. 閉会宣言

1994年度事業報告

1. 会員状況

	正会員(学生)	賛助会員	名誉会員	計(在外)
1994年1月1日	967(66)	17	9	993(31)
入会	51(31)			51(+2)
退会	-24(-3)			-24(-2)
変更	-1(-11+1)		+1	(+7-3)
1994年12月31日	993(84)	17	10	1,020(35)

2. 年会、委員会等の開催

年会（10/12-10/14：名古屋）、地球惑星科学関連学会1994年合同大会（3/20-23）・春季シンポジウム（3/23：仙台）、総会（10/13：名古屋）、評議員会3回（2/5、5/28、10/11）、幹事会3回（1/29、5/21.10/8）、GJ編集委員会6回、地球化学編集委員会2回、学会賞等受賞者選考委員会1回、将来計画委員会、名誉会員推薦委員会1回、日産学術助成推薦委員会1回、GJ等販売委託に関する話し合い3回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 28（1-6）（印刷はテラ学術出版）
地球化学Vol. 28（1、2）（各100部追加復刻）

4. ニュース発行 No. 136（2/25）、137（5/20）、138（8/20）、139（11/10）

5. 日本地球化学会賞等の授与（柴田賞1件、学会賞1件、奨励賞1件）

6. 名誉会員の推挙（1名）

7. 日産学術助成推薦（一般研究2件、奨励研究5件；奨励研究2件採択）

8. 学会等共催、後援、協賛

第7回「学協会共通問題に関する討論会」（学術法人法制定運動賛同180学協会）東京
1994年度質量分析連合討論会（共催）堺
第3回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会（後援）大阪
第10回ESR応用計測研究会（協賛）豊中
第31回理工学における同位元素研究発表会（共催）東京
VM Goldschmidt Conference 1994（supporting）Edinburgh, U.K.
北東アジア地域水産国際フォーラム（後援）兵庫県香住町
第5回地質汚染シンポジウム（後援）東京

1995年度事業中間報告

1. 会員状況

	正会員(学生)	賛助会員	名誉会員	計(在外)
1995年1月1日	993(84)	17	10	1,020(35)
入 会	41(21)	3		44(3)
退 会	-40(-2)			-40(0)
変 更	(-14)			(2-1)
除 籍	-4(0)			-4(0)
1995年9月30日	990(90)	20	10	1,020(39)

2. 年会, 委員会等の開催

年会 (11/10-12; 清水, 東海大学海洋学部), 地球惑星科学関連学会1995年合同大会 (3/27-3/30)・春季シンポジウム (3/28: 東京, 日本大学文理学部), 総会 (11/11; 清水, 東海大学海洋学部), 評議員会 4 回 (2/18, 6/17, 11/9, 11/12), 幹事会 3 回 (2/4, 6/10, 11/4), G J 編集委員会 4 回, 地球化学編集委員会 2 回, 学会賞等受賞者選考委員会 1 回, 将来計画委員会 2 回, 名誉会員推薦委員会 1 回, 財政委員会 2 回

3. 会誌発行

Geochemical Journal Vol. 29 (1-4)

地球化学 Vol. 29(1)

販売のテラ学術出版への移管にともない全バックナンバーを移送

- ニュース発行 No. 140(2/22), 141(6/7), 142(9/7)
- 会費の自動引き落とし実施 (1/23; 164名)
- 会員情報確認作業およびアンケートの実施 (5/31締切)
- 1995年会員名簿発行 (E-mail 追加294件; ハンドブック 30 p; 8/1)
- 1996-1997年度役員選挙
- 日本地球化学会賞等の授与 (柴田賞 1 件, 学会賞 1 件, 奨励賞 2 件)
- 名誉会員の推挙 (1 名)
- 鳥居基金助成の開始: 第 1 回 (海外派遣 2 件, 研究集会 1 件), 第 2 回 (海外派遣 1 件)
- 日産学術助成推薦 (一般研究 1 件, 奨励研究 6 件)
- 兵庫県南部地震被災会員への特別措置の実施 (7/30締切; 1995年度会費 1 年分を免除; 一般正会員 12 名, 賛助会員 1 口)
- 青少年のための自然科学講座「深海底の温泉を知っていますか」(11/26; 科学研究費補助金研究成果公開発表 B)
- 学校科目「地学」関連学会間連絡協議会の設立に参加
- 学会等共催, 後援, 協賛
第 2 回アジア学術会議-科学者フォーラム (後援)

東京

1995年度質量分析連合討論会 (共催) 東京

第32回理工学における同位元素研究発表会 (共催)

東京

アイソトープ・放射線利用100年記念講演会 (協賛)

東京

1995 (Fifth) Goldschmidt Conference (cosponsor) University Park, USA

第 3 回国際沙漠技術会議 (後援) 富士本栖湖

第11回ESR応用計測研究会 (協賛) 豊中

第 6 回地質汚染シンポジウム (後援) 東京

第 3 回「環境と化学」講演会 (共催) 東京

第 9 回「1995年度」地質調査所研究講演会 (協賛)

東京

第 4 回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会 (後援) 北九州

第 7 回ヒ素シンポジウム (協賛) 福岡

日本生物物理学会「地球と生命の共進化」シンポジウム (後援) 札幌

1995環太平洋国際化学会議 (後援) ホノルル, ハワイ

1996年度事業計画案

- 年会 (8/27-29; 札幌, 北海道大学地球環境科学研究科)
- 総会 (8/28; 札幌, 北海道大学地球環境科学研究科)
- 地球惑星科学関連学会1996年合同大会・春季シンポジウム (3/26-3/29; 豊中, 大阪大学理学部)
- 評議員会 3 回
- 幹事会 3 回
- 会誌発行
Geochemical Journal Vol. 30 (1-6)
地球化学 Vol. 30 (1, 2)
- ニュース発行 No. 144, 145, 146, 147
- 日本地球化学会賞等の授与
- 名誉会員の推挙
- 鳥居基金助成, 年 2 回
- 日産学術助成推薦
- 学会等共催, 後援, 協賛
第 8 回掘削による大陸地殻観測に関する国際ワークショップ (後援) 2/26-28, つくば
第 3 回「アジア学術会議-科学者フォーラム」(後援) 3/25-28, 東京
1996年度質量分析連合討論会 (共催) 4/24-26, 福井
第32回理工学における同位元素研究発表会 (共催) 東京
東京湾海洋環境シンポジウム (共催) 夏または秋, 東京

1994年度決算報告

収 支 決 算 書

(自1994年1月1日 至1994年12月31日)

収入の部

科 目	収入額 (円)	予算額 (円)
1. 会費収入	8,700,327	8,000,000
1.1 正会員	7,384,000	
1.2 学生会員	554,000	
1.3 賛助会員	435,000	
1.4 海外会員	209,327	
1.5 入会金	118,000	
2. 刊行物売上	4,639,720	4,600,000
2.1 別刷り代	922,655	
2.2 雑誌売上	3,717,065	
3. 広告料	546,000	400,000
4. 助成金	1,740,000	1,550,000
5. 雑収入	178,132	300,000
6. 前年度名簿積立金	0	0
7. 前年度基本財産充当引当金	3,400,000	3,400,000
8. 前年度繰越金	14,621,245*	9,800,000
収 入 合 計	33,825,424	28,050,000

* 鳥居名誉会員寄付金5,000,000円を含む。

支出の部

科 目	支出額 (円)	予算額 (円)
1. 事業費	20,147,516	15,890,000
1.1 出版費	16,883,536	12,700,000
1.2 行事費	485,900	500,000
1.3 学会賞経費	13,575	50,000
1.4 委員会活動費	92,020	300,000
1.5 名簿積立金	400,000	400,000
1.6 名簿作成費	0	0
1.7 業務委託費	1,979,740	1,700,000
1.8 会員業務郵税	292,745	240,000
2. 管理費	1,696,462	1,810,000
2.1 庶務費	200,000	200,000
2.2 会議費	74,412	300,000
2.3 通信費	48,113	60,000
2.4 旅費	1,070,730	900,000
2.5 選挙費	0	0
2.6 雑費	51,207	100,000
2.7 会誌保管料	252,000	250,000
3. 予備費	0	500,000
4. 基本財産充当引当金	3,400,000	3,400,000
5. 次年度繰越金	8,581,446*	6,450,00
支 出 合 計	33,825,424	28,050,000

* 鳥居名誉会員寄付金5,000,000円を含む。

[出版費明細]

	編 集	印 刷	発 送	計
英文誌	1,200,000	10,031,613	512,465	11,744,078
和文誌	250,000	2,519,998	116,020	2,886,018
ニ ュ ー ス	50,000	1,388,440	815,000	2,253,440
計	1,500,000	13,940,051	1,443,485	16,883,536

貸借対照表 (1994年12月31日現在)

資 産 の 部	(円)
現 金	128
銀 行 預 金	10,153,908
郵 便 貯 金	2,764,071
学会事務センター	2,584,339
合 計	15,502,446
負 債 ・ 正 味 財 産 の 部	(円)
前 受 け 会 費	3,121,000
名 簿 積 立 金	400,000
基本財産積立充当引当金	3,400,000
正 味 財 産	8,581,446
合 計	15,502,446

1995年度中間決算報告

収支決算書 (1995年1月1日~6月30日)

[収入の部]

科 目	収入額 (円)	予算額 (円)
1. 会費収入	7,481,126	8,200,000
1.1 正会員(学生を除く)	6,426,000	
1.2 学生会員	408,000	
1.3 賛助会員	405,000	
1.4 海外会員	190,126	
1.5 入会金	52,000	
2. 刊行物売上	2,966,925	4,600,000
2.1 1994年度分売り上げ	918,225	
2.2 1995年度版権料半期分	2,048,700	
3. 広告料	420,00	800,000
4. 助成金	0*	1,740,000
5. 雑収入	137,930	200,000
6. 前年度名簿積立金	400,000	400,000
7. 前年度基本財産充当金	3,400,000	3,400,000
8. 前年度繰越金	88,581,446**	12,500,000
収 入 合 計	23,387,427	31,840,000

* 10月13日付けで国庫金送付通知書より1,670,000円を換金した

** 鳥居名誉会員寄付金5,000,000円を含む。

[支出の部]		
科 目	支出額 (円)	予算額 (円)
1. 事業費	11,391,361	16,600,000
1.1 出版費	8,295,682	12,700,000
1.2 行事費	452,000	500,000
1.3 学会賞経費	0	50,000
1.4 委員会活動費	121,836	500,000
1.5 名簿積立金	0	0
1.6 名簿作成費	1,491,049	900,000
1.7 業務委託費	1,000,634	1,750,000
1.8 会員業務郵税	30,160	200,000
2. 管理費	1,265,912	2,460,000
2.1 庶務費	200,000	200,000
2.2 会議費	42,209	150,000
2.3 通信費	16,189	60,000
2.4 旅費	945,940	1,600,000
2.5 選挙費	0	100,000
2.6 雑費	61,574	100,000
2.7 会誌保管料	0	250,000
3. 基金設立費	5,000,000	5,000,000
4. 予備費	0	500,000
5. 基本財産充当引当金	0	3,400,000
6. 次年度繰越金	0	3,880,000
支 出 合 計	17,657,273	31,840,000

[出版費明細]				
	編 集	印 刷	発 送	計
英文誌	1,200,000	4,678,757	325,845	6,204,602
和文誌	250,000	973,350	49,560	1,272,910
ニュース	50,000	461,440	261,190	772,630
その他			45,540	45,540
計	1,500,000	6,113,547	682,135	8,295,682

1995年度鳥居基金中間決算報告 収支決算書 (1995年 1 月 1 日～ 6 月 30 日)	
[収入の部]	
科 目	収入額 (円)
1. 基金設立費	5,000,000
2. 利 息	0
合 計	5,000,000
[支出の部]	
科 目	支出額 (円)
1. 助 成 内訳助成100,000円 3 件	300,000
2. そ の 他	0
合 計	300,000

資産状況 (1995年 6 月 30 日現在)	
科 目	金額 (円)
郵 便 貯 金	4,700,000
合 計	4,700,000
1995年11月11日現在 後期分助成 1 件100,000円	

1996 年度予算			
[収入の部]			
科 目	1996年(円)	1995年(円)	増 減
1. 会費収入	8,000,000	8,200,000	-200,000
2. 刊行物売上	4,100,000	4,600,000	-500,000
3. 広告料	600,000	800,000	-200,000
4. 助成金	1,670,000	1,740,000	-70,000
5. 雑収入	15,000	200,000	-185,000
6. 前年度名簿積立金	0	400,000	-400,000
7. 前年度基本財産充当金	3,400,000	3,400,000	0
8. 前年度繰越金	1,980,000	12,500,000	-10,520,000
収 入 合 計	19,765,000	31,840,000	-12,075,000

[支出の部]			
科 目	1996年(円)	1995年(円)	増 減
1. 事業費	14,525,000	16,600,000	-2,075,000
1.1 出版費	11,240,000	12,700,000	-1,460,000
1.2 行事費	450,000	500,000	-50,000
1.3 学会賞経費	15,000	50,000	-35,000
1.4 委員会活動費	150,000	500,000	-350,000
1.5 名簿積立金	500,000	0	500,000
1.6 名簿作成費	0	900,000	-900,000
1.7 業務委託費	2,050,000	1,750,000	300,000
1.8 会員業務郵税	120,000	200,000	-80,000
2. 管理費	1,500,000	2,460,000	-960,000
2.1 庶務費	200,000	200,000	0
2.2 会議費	50,000	150,000	-100,000
2.3 通信費	40,000	60,000	-20,000
2.4 旅費	1,000,000	1,600,000	-600,000
2.5 選挙費	0	100,000	-100,000
2.6 雑費	90,000	100,000	-10,000
2.7 会誌保管料	120,000	250,000	-130,000
3. 基金設立費	0	5,000,000	-5,000,000
4. 予備費	340,000	500,000	-160,000
5. 基本財産充当引当金	3,400,000	3,400,000	0
6. 次年度繰越金	0	3,880,000	-3,880,000
支 出 合 計	19,765,000	31,840,000	-12,075,000

[出版費明細]				
	編 集	印 刷	発 送	計
英文誌	1,200,000	5,700,000	440,000	7,340,000
和文誌	250,000	1,900,000	100,000	2,250,000
ニュース	50,000	900,000	520,000	1,470,000
その他		90,000	90,000	180,000
計	1,500,000	8,590,000	1,150,000	11,240,000

1996～1997年度 日本地球化学会役員選挙結果報告			
1995年度選挙管理委員長 中井俊一 委員 富樫茂子			
1. 投票総数	129,	有効投票	129
2. 会 長	当選	高 岡 宣 雄	120
	次点	半 田 暢 彦	3
		(1票 3名)	
		白 票	3
3. 副会長	当選	石 渡 良 志	115
	次点	角 皆 静 男	4
		高 岡 宣 雄	2
		(1票 2名)	
		白 票	6
4. 監 事	当選	一 國 雅 巳	45
	次点	半 田 暢 彦	7
		脇 田 宏	5
		安 部 喜 也	4
		中 井 俊 一	4
		松 久 幸 敬	4
		(他16名, 23票)	
		白 票	37
5. 評議員			
	当選	野 津 憲 治	94
	当選	清 水 洋	92
	当選	田 中 剛	89
	当選	北 逸 郎	85
	当選	赤 木 右	83
	当選	松 田 准 一	83
	当選	佐 野 有 司	78
	当選	千 葉 仁	78
	当選	蒲 生 俊 敬	77
	当選	増 澤 敏 行	75
	当選	長 尾 敬 介	72
	当選	植 松 光 夫	71
	当選	高 橋 和 也	68
	当選	中 村 昇	67
	当選	南 川 雅 男	66

当選	村 江 達 士	66
当選	篠 原 宏 志	65
当選	下 山 晃	62
当選	圀 本 尚 義	62
当選	能 田 成	58*
次点	福 島 和 夫	58*
	中 村 俊 夫	56
	石 橋 純一郎	55
	川 辺 岩 夫	55
	吉 田 尚 弘	49
	大 隅 多加志	10
	野 崎 義 行	10
	(他122名, 227票)	
	無 効	11
	白 票	578
	投票総数	2580

*役員選出細則第 6 条 (2) 1 の抽選の結果

1996年度 質量分析連合討論会	
表記の共催学会が開催されますので、お知らせします。	
主 催	日本質量分析学会
共 催	本学会他
期 日	1996.4.24 (水)～26 (金)
会 場	フェニックスプラザ 福井市田原町 1-13-6
	TEL (0776) 20-5060 [交通] JR 福井駅より市内
	バスまたは京福電車で約10分、車の場合は北陸自動車
	道福井北インターより約15分。(会場の駐車場は有料
	です。)
発表申込締切	96.1.10 (必着)
要旨原稿締切	96.2.19 (必着)
(96年度は学会日程、発表申込締切および要旨原稿締切が例年より約半月繰り上がっておりますのでご注意ください。)	

参加申込締切	96.3.31
討論主題	質量分析の関与するあらゆる分野領域・装置・理論・その応用に関する研究
発表形式	(A) 口頭発表, (B) ポスター発表, 特別講演, 奨励賞受賞講演, ワークショップ
発表申込方法	申込 1 件ごとに A 4 用紙に①発表形式 (プログラム編成上ご希望に添えない場合があります。)②演題・所属・氏名 (発表者に○) ③申込者氏名・連絡先 (所属・住所・Tel・Fax) ④概要 (約200字)をご記入の上, 下記申込先まで郵送してください。
要旨原稿	申込者には, 1 月中旬に要旨集原稿作成要領をお送りします。
参加申込方法	参加者 1 名ごとに B 5 用紙に①氏名②所属③連絡先 (住所・Tel・Fax) ④所属学会名⑤送付

金額および内訳（参加登録費・懇親会費・要旨集送料）を明記して郵便またはFaxで下記連絡先にお申し込みいただき、必要費用を郵便為替または現金書留にてお送り下さい。登録者で要旨集の送付を希望される方は、送付金額に送料（500円）を加算し、送付先を記入したシール（そのまま宛先として封筒に貼れるもの。）を同封してください。

参加登録費 事前登録 主催学会員5,000円、共催・協賛学会員6,000円、一般7,000円、学生2,500円（いずれも要旨集代を含む・当日登録は1,000円、学生は500円加算）

懇親会 1996.4.25 18:30 福井ワシントンホテル 福井市大手3-12-20 Tel. (0776) 27-8811 懇親会費 6,000円、学生 3,000円

申込先 福井大学教育学部 伊佐 公男 〒910 福井市文京3-9-1 Tel. (0776) 23-0500 内線2434 Fax. (0776) 27-8524 [参加登録費の振込先] 郵便振替 口座番号 00710-5-9064 口座名: 質量分析連合討論会(福井)事務局

第33回理工学における同位元素研究発表会

表記関連学会が開催されますので御案内いたします。

主催 日本アイソトープ協会

共催 日本地球化学会他

会 期: 1996年7月1日(月)～3日(水)

会 場: 国立教育会館(東京都千代田区霞が関3-2-3)

内 容: それぞれの研究分野において、その専門的成果を得るにいたった放射性および安定同位元素ならびに放射線の利用の技術に重点をおいた論文と、これら同位元素、放射線の利用の基礎となる研究とします。

発表形式: 口頭発表またはポスター発表

発表申込区分: 地球科学・宇宙科学・環境科学安定同位体その他の区分があります。お問い合わせ下さい。

発表申込: 所定の申込書(1件1通)により申込む。申込書は下記宛請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込2-28-45

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会

運営委員会

Tel. 03-3946-9681 (ダイヤルイン)

発表申込締切: 1995年2月29日(木)

講演要旨: 発表申込あり次第、所定の原稿用紙をお送りします。口頭発表、ポスター発表とも、1件につき原稿用紙1枚。

講演要旨原稿締切: 1995年4月15日(月)

研究発表会への参加: 無料

第8回 掘削による大陸地殻観測に関する国際ワークショップ開催案内

本学会後援の表記ワークショップの開催案内がまいりましたのでご案内いたします。

場 所: 工業技術院共用講堂(茨城県つくば市)

日 時: 1996年2月26日～28日(ワークショップ)

1996年2月29日～3月2日(巡検)

科学プログラム

発 表: 口頭、ポスター

言 語: 英語

内 容:

1. 超深度掘削(レビュー、ドイツ KTB、ロシア Kola、中国、アメリカ、フランス)、ICDP、海洋掘削との関連
2. 活断層掘削、地殻変動過程と地殻ダイナミックス
3. 地殻内における熱・物質移動(流体の生成、移動、トラップ; エネルギーおよび鉱物資源、堆積盆の進化、マグマ作用、変成作用および熱水作用)
4. 地球環境変動(バイカル湖掘削を含む)
5. 坑井を利用した調査(検層、流体試料のサンプリングと試験; 坑井内での物理・化学的実験および観測、坑井の深部実験室としての利用; 掘削・コアリング・コア解析)

巡 検

1. 神戸・淡路島
2. 根尾谷・土岐
3. 葛根田地熱フィールド
4. 房総
5. 柏崎テストフィールドおよび新潟県の深掘井掘削作業現場

参加申込

ワークショップ参加費: 20,000円(学生 10,000円)

巡検参加費: 実費

詳しくは英文2ndサーキュラーをご覧になるか、下記担当者までご連絡ください。

池田 隆司

〒305 茨城県つくば市天王台3-1

科学技術庁防災科学技術研究所

Tel. 0298-51-1611 (ex. 630)/54-0638

Fax. 0298-54-0629

E-mail ikeda@geo.bosai.go.jp

浦辺 徹郎

〒305 茨城県つくば市東1-1-3

工業技術院地質調査所

Tel. 0298-54-3636

Fax. 0298-54-3533

E-mail urabe@gsj.go.jp

『国際シンポジウム: 地下水・地球化学による地震予知・火山噴火予知研究』開催のお知らせ

表記シンポジウムの開催案内がまいりましたのでお知らせいたします。

International Symposium: Prediction Studies on Earthquake and Volcanic Eruption by Geochemical and Hydrological Methods

日 時: 1996年3月5日(火)～8日(金)

場 所: 東京大学山上会館

東京大学理学部地殻化学実験施設では、これまで国内の地球化学の研究者を中心として、地震や火山噴火の予知に関連した研究会を毎年1回開催してきてました。今年の6月には22回目の研究会を開きました。

この度、文部省国際シンポジウムを標記課題で開催することが認められましたので、広い分野の方々にご参加をいただきたく、ご案内いたします。年度末でご多忙な時期にあたりますが、どうか皆様、万障お繰合せの上ご参加くださるようお願いいたします。現在、国外から15名の方の参加が申し込まれています。

日 程

1996年3月5日(火) 登録受付 午後より研究発表会 夕方リセプション

3月6日(水) 終日研究発表会

3月7日(木) 研究発表 午後から野外見学(箱根温泉泊) 懇親会

3月8日(金) 伊豆半島における野外見学 夕方帰京・解散

参加申し込み締切: 1995年12月末日

問い合わせ先

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部地殻化学実験施設

脇田 宏

Tel. 03-3812-2111 内線4621

Fax. 03-3816-1784

E-mail wakita@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

第2回大気化学討論会

表記の討論会が開催されますので、お知らせします。

1994年9月に第8回CACGP/第2回IGAC国際シンポジウムが富士吉田で開催されたのがきっかけで、この大気化学討論会が発足しました。本討論会は、各所属学会で大気化学を中心に研究発表されている方々が集い、最新の研究成果や、今後の研究計画案などを忌憚なく話し合うことを目的としています。

記

日 時: 1996年6月6日(木)～8日(土)

会 場: 札幌市南区定山溪温泉西2丁目5番地

札幌市職員共済組合定山溪保養所「溪流荘」

Tel. 011-598-2721

発表申込締切: 1996年3月25日(月)

参加費: 20,000円(宿泊費、食事、懇親会費、プログラム集代を含む)

申込方法: A4用紙を用い、A5横(立て11cm×横16cm)一枚のサイズ内に講演題目、所属、氏名(発表者の前に○)、発表の概要を記入し、余白に申込者氏名、連絡先(住所、Tel., Fax, e-mail)を下記宛にお送り下さい。お送りいただいた原稿はそのまま当日、プログラム集として印刷しそのままお配りします。または電子メールでお送りいただいても結構です。ただし、編集はこちらにおまかせ願います。

申込先: 〒005 札幌市南区南沢5条1-1-1

北海道東海大学工学部海洋開発工学科

植松光夫

Tel. 011-571-5111 (内線614)

Fax. 011-571-7879

E-mail uematsu@dm.htokai.ac.jp

岡山大学固体地球研究センター 共同利用について

本学会宛に、表記の共同利用公募の案内がありましたので、お知らせいたします。

岡山大学固体地球研究センターでは、全国の地球科学の研究者を対象とした共同利用研究員制度が設けられています。斬新なアイデアによる共同研究の応募を歓迎します。当センターでは、公募は年1回としております。

申請用紙の請求および照会は、当センター共同利用係宛連絡してください。

記

1. 公募人員 各研究分野ごとに若干名
2. 研究期間 平成8年4月～平成9年3月
3. 申込資格 国・公・私立大学及び研究所等の教員・研究員並びにこれに準ずる研究者
4. 申込方法 共同利用研究員申請書(別紙様式)に必要事項を記入のうえ提出のこと。
5. 応募締切 平成8年1月26日(金) 必着
6. 採否の決定通知 3月末までに書面により通知する。
7. 問合せ先

〒682-01 鳥取県東伯郡三朝町山田827

岡山大学固体地球研究センター共同利用係

Tel. 0858-43-1215 内線503
Fax. 0858-43-2184 (事務用)
0858-43-3450 (研究連絡用)

新化学発展協会 研究奨励金交付対象研究計画の募集について

表記研究奨励事業の公募が本会あてにまいりましたのでご案内いたします。

㈱新化学発展協会では、基礎研究の推進と研究者の育成を通じ新化学の発展を図ることを目的に、下記に従って研究奨励金を交付いたします。希望される方は、下記の研究課題の中から1つを選び研究計画を作成し、略歴、既発表論文一覧表と共に協会事務局まで提出して下さい。なお、研究課題の説明および応募要項等の詳細は、協会事務局までお問い合わせ下さい。

記

1. 研究課題

触媒化学分野、コンピューターケミストリー分野、新素材技術分野、電子素材技術分野、ライフサイエンス分野（以上の5分野で7課題、課題名省略）

地球環境関連分野（1課題）

酵素、微生物、生体ハイブリッドを用いた化学品製造のための新しい反応プロセスに関する研究

2. 応募資格

大学またはこれに準ずる研究機関において研究活動に従事し、昭和31年4月1日以降に出生の者

3. 件数および金額

原則として各課題1件とし、それぞれに150万円を交付

4. 条 件

1～2年以内に協会の研究会などで研究成果を報告する

5. 応募の締切 締切 平成8年3月8日（金）

6. 交付の時期 交付 平成8年6月（予定）

7. 応募および問い合わせ先

〒101 東京都千代田区神田駿河台1-5
(化学会館4階)

Tel. 03-3294-8031

Fax. 03-3294-8034

社団法人 新化学発展協会 研究奨励金係

首都圏における多摩川およびその流域の
環境浄化に関する基礎研究、応用研究、
環境改善計画のための研究、募集

表記助成事業の公募が本会あてにまいりましたのでご案内いたします。

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 横田二郎）

は、昭和50年度より、多摩川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に318件の研究に助成金を交付し、251件の研究成果が完成しています。

平成8年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

1. 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究

2. 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究

3. 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査、試験研究

4. 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査、試験研究

3. 公募締切日 平成8年1月16日

応募についての詳細は、下記財団事務局へお問い合わせ下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号
(渋谷地下鉄ビル)

財団法人 とうきゅう環境浄化財団

Tel. 03-3400-9142

アサヒ・フェローシップのお知らせ

表記研究奨励事業の案内が本会にまいりましたので、お知らせいたします。

記

アサヒ・フェローシップ（朝日国際奨励金）は、日本に関心を持ち、さらに研究を進めたいと願う外国人の有望な学者、ジャーナリスト、芸術家らを日本に1年間招き、活動、交流を通じて日本理解を深めてもらおうというものです。

内 容

・2～4人を採用し、1年間（原則として毎年9月から）日本に招聘します。

・奨励金の総枠は1500万円です、研究内容に応じて選考委員会が適切な額を決定します。

・来日中は、支給金で研究費、生活費をまかない、計画にもとづいて研究・交流活動を行います。

応募資格

・外国国籍の個人

・学術研究分野は、Ph.D取得者もしくはそれに相当する学識を持つ人を希望します。

・日本に関する研究、学習活動などを行おうとし、日本に滞在の必要がある人。

・日本に現在長期滞在中の人、および今後長期にわたり居住する見込みのある人は受け付けません。

応募方法

・1996年分の募集は1995年12月1日から1996年2月29日まで行います。

詳しくは下記までお問い合わせ下さい。

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

朝日新聞社文化企画局文化・スポーツ部内

アサヒ・フェローシップ事務局

Tel. 03-5565-3849

03-3545-0131 内線54218

Fax. 03-3541-8999

書 評

「縞々学」 川上 紳一 著

東京大学出版会、253 P、(3,090円)

ポストプレートテクトニクス時代といわれる。プレートテクトニクスによって地球上に見られる様々な地学現象（火成作用、変成作用、造山運動、地震、鉱床の生成など）を統一的に説明することができる。しかし、プレートテクトニクスでは、流体地球（大気、水）の現象や地球の深部の現象についての説明はできない。地球全体を我々が理解するためには、大気、水、地殻、マントル、核、さらに、生物、人間からなるトータルな地球システムを理解しないといけない。そこで登場したのが、NASA が1988年に提唱した地球システム科学である。我国では、最近、地球多圏相互作用研究計画（MULTIER）や全地球史解読計画が進められているが、これらはこの地球システム科学と密接に関係している。一方、1989年に自然界のリズムや縞状構造の成因や意味を解明しようという研究者が集まって「縞々学研究会」が発足した。本書の著書は、この研究会の提唱者の1人であり、かつ上記2つのプロジェクトの主要メンバーである。

著書は、46億年の地球の歴史の中で、地球上で起こった周期的な変動（リズム）や突発的な出来事（イベント）を手がかりに、地球の動的状態を理解しようとして本書を記したと述べている。

本書で取り上げられているのは、全て地球システム科学にとって最も重要なテーマである。すなわち、年輪年代学、エルニーニョ、気候変動、ミランコビッチサイクル、大気・海洋・氷床等の変動、太陽黒点周期、月の起源と潮汐のリズム、銀河のリズム、生物の大量絶滅のリズム、地球磁場のリズムが扱われている。

本書の特徴として以下の3点があげられよう。

1. 従来の地球科学では地球を分解し、それぞれの構成物質、それにみられる地学現象を明らかにする研究が中心であり、それぞれの相互作用についてはあまり考えられてそのままなかった。ましてや地球と宇宙との相互作用については考えられてこなかった。本書では、地球と太陽、銀河との関係について書かれている。地球システムは、これらの外的作用において支配されていることがわかりやすく述べられている。

2. 本書では、個々のテーマについて、どのような問題であるのかを、歴史的に述べており、読者が理解しやすいような配慮のもとに書かれている。学部学生にとってもよく読めば十分理解が可能である。

3. 本書を読むと、個々のテーマがお互いに密接に関連していることがよくわかる。本書で取り上げられたテーマは重大であるのに拘らず、上記のテーマについて日本語で書かれたものはほとんど無いので地球のサイエンスにかかわる多くの方が本書を熟読されることを薦める。従来の本ではそれぞれのテーマについて詳細に書かれたものはあるが、個々のテーマが密接に関連したものであるのかを示したものは皆無である。

縞々学で扱われる事象は数多いので、本書で扱われていない事象もいくつかある。本書では時間変動を中心に述べられているが、空間変動（組織）についての記述はされていない。組織の解明も重要なテーマであり、この空間変動と時間変動との関連性について述べられても良かったと思う。縞々学とはどのような学問であるのかについてのもう少し詳しい説明も必要であろう。しかしながら、縞々学は確立された学問ではない。これからの学問である。私なりの解釈をするならば、地球惑星にみられる現象の時間・空間変動に関する動的学問である。地球システム科学の場合は、地球のサブシステムとはどういうものか、サブシステム間の熱・物質に関する相互作用を扱い、従来の地球科学及び縞々学を包含している。現在、時間・空間変動の現象がどのようなものであるのかについて明かにされつつある。しかし、その変動要因については殆ど明らかにされていない。したがってこの縞々学が今後の地球システム科学にとって最も重要な位置を占めることは確かである。

本書を読むことによって、縞々学は地球システムを理解するために最も重要な分野であることが強く認識され、大いに啓発され、研究意欲をもわきたててくれる書であることは間違いないと言えるであろう。動的扱いになれていない多くの地球科学者が読まれることを薦めたい。

（慶應義塾大学 鹿園直建）

公開講演会「産業空洞化問題を考える」開催さる

平成7年9月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、7月に開催された日本学術会議主催公開講演会「産業空洞化問題を考える」の概要について紹介します。

日本学術会議は、学術の成果を市民に直接還元するための活動として、日本学術会議会員が講師となって、市民を対象に年2回、日本学術会議主催の公開講演会を開催しています。

日本学術会議のグローバリゼーションと社会構造の変化特別委員会は、いわゆるグローバリゼーションの進展によって我が国の経済・社会が受ける諸種の影響と、それに伴う様々な問題点を吟味し、今後、我が国がとるべきそれらへの対応策の在り方を検討することをその任務とし、特に、現在の我が国にとっての最も重大な危機的事態とも言うべき「産業空洞化」の問題の分析に最重点を置いて、審議を進めつつあります。

今回の公開講演会では、この特別委員会によるそのような分析・審議の成果を踏まえて、3人の講演者によって、まず、(1)我が国の経済を全体として見てマクロ的に考察するという経済学的な視点からは、現在の長期不況と異常な「円高」に伴って余儀なくされつつある我が国産業の「空洞化」という事態をどう捉え、また、それに対応するべき経済政策はどうあるべきか、そして、次に、(2)技術工学的な観点からすれば、このような現在の状況はどのように把握され、また、それについて、どのような問題点が指摘されるべきか、そして、さらに、(3)企業経営の面から見た場合、このようなグローバリゼーションのインパクトはどのような意味を持ち、我が国の企業はどのようにそれに対応しつつあるのか、という3つの視角からの分析が行われました。

この講演会は、平成7年7月14日(金)の午後1時20分から、日本学術会議講堂において約200名の聴講者を集め開催されましたので、その概要をお知らせいたします。

◇次 第

- | | |
|--------|------------------|
| ○ 司 会 | 吉田 民人(第1部会員) |
| 1 開会の辞 | 利谷 信義(日本学術会議副会長) |
| 2 挨拶 | 吉田 民人(第1部会員) |
| 問題提起 | |
| 3 講演 | |

- | | |
|--------------------------|------------------|
| (1) 日本経済再生の方途 | 丹羽 春喜(第3部会員) |
| (2) 技術移転と空洞化 | 富浦 梓(第5部会員) |
| (3) グローバリゼーションと日本企業の多国籍化 | 岡本 康雄(第3部副部長) |
| 4 質疑応答 | |
| 5 閉会の辞 | 西島 安則(日本学術会議副会長) |

◇問題提起

吉田 民人(第1部会員、中央大学文学部教授)
空洞化という言葉は、英語でフォローイングアウトと言われ、これが最初に問題になったのは1960年代のアメリカであり、当時ECにアメリカの自動車あるいは電機産業が出て、アメリカの労働組合が、ジョブ、つまり仕事の輸出であるということとかなり反対したといったようなところから始まって、日本でも、1960年代の後半には東南アジアに直接投資が開始されていた。もちろんこの種の問題は、経済のグローバリゼーションという、まさにグローバリゼーションと社会構造の変化特別委員会が担当しているテーマの一つであるが、その空洞化が特に最近、円高の状況の中で国際競争力の著しい低下を招くということで、ますます加速されるというふうにみられているわけで、この種のテーマをグローバリゼーションと日本の社会構造の変化の中でも最も緊急のテーマの一つとして取り上げることになった。

空洞化といっても産業の空洞化、金融の空洞化、技術の空洞化、あるいは産業の空洞化も生産の空洞化、経営の空洞化あるいは雇用の空洞化といったさまざまな側面があるわけで、主としてその辺の問題を「産業の空洞化」という一言である意味でラフに総括させていただいた企画である。

中身は三つあり、(1)日本経済をマクロ的な角度から見ての空洞化の原因とその対策について、(2)技術の空洞化に関して、(3)ミクロ的な企業がグローバリゼーションの中で国際化していく。まさにそういう意味で言えばミクロ的であると同時にグローバルな、その意味

でマクロ的な観点から、それぞれ講演が行われる。

ここで出る問題は多岐にわたるが、基本的には空洞化の原因の究明と、それに対する対応策という二つの側面からの講演となるが、例えば大蔵省の立場あるいは日銀の立場、あるいは地方公共団体の立場、あるいは企業の立場、それぞれの立場によって微妙に特殊利益が反映せざるを得ないような問題構造になっているが、研究者というのはそういう特定の、つまり職業的な集団の利益から比較的解放されて、非常に客観的な判断をすることができる職業集団に属しておることから、できるだけ客観的に、一般的に特殊な利害にとらわれない角度からの検討をさせていただくことになっているので、研究者としてはこういう見方をしているんだということをぜひお聞きいただきたい。

◇日本経済再生の方途

～円高と産業空洞化問題をどう考えるべきか～

丹羽 春喜

(第3部会員、グローバリゼーションと社会構造の変化特別委員会委員長)

- ・ ケインズ 対 反ケインズ
- ・ 経済学の50～100年の退歩
——ベトナム後遺症のニヒリズム——
- ・ 政策の不合理性と長期経済停滞
- ・ 三重の悪循環的ジレンマによる不況の永続化
- ・ 「信賞必罰」システムのフロート制と「円高」の責め苦、そして産業空洞化
- ・ 「低成長→低税率→財政赤字→緊縮財政→不況永続化」の悪循環
- ・ 「リストラ不況」の危険性
- ・ 20年以上もの超長期不況
- ・ 結果としての「近隣窮乏化」政策(対外経済摩擦の根本的原因)
- ・ 「正常な」国際分業と「異常な」空洞化とを混同するな
- ・ ミスリーディングな「成熟経済」パラダイム
- ・ 歴大なデフレ・ギャップ
——それを直視しようとし「経済白書」の危険性——
- ・ 「規制緩和」、「リストラ」、「行革」、「市場開放」、等々の限界と欺瞞性
- ・ 「合成の誤謬」の問題をまじめに直視しようしない風潮
- ・ 朝野をあげての幼児化現象
- ・ 必要な「最善のシステム」ビジョン(市場経済+国民経済予算)への回帰
——むしろ、デフレ・ギャップこそ「真の財源」——
- ・ 震災復興と被災者支援の政策はどうあるべきか
——国家の本質的な機能とは何か——
- ・ 混迷からの脱却へ

およそ、上記のような諸項目について、問題点を解

きあかし、日本経済再生の方途について、国民経済予算制度を現在の市場経済をベースにしている経済体制に組み込むべし等の提言を行いました。

◇技術移転と空洞化

富浦 梓(第5部会員、新日本製鐵㈱常任顧問)

製造業は全て技術の発明と、その移転によって、拡大、発展を成し遂げてきた。鉄鋼業における技術移転の歴史を振り返ってみると、一般的に技術の個人依存性が高いものほど移転が困難であり、技術の表象可能性の高いものほど移転が容易である事に気がつく。

技術の完全な表象には多くの困難が存在し、それ故に未だ経験に依存するところが多い。技術の表象可能性を高めるには、製造に伴って生ずる現象を分析して、基本過程を取り出し、それ等を統合して新たなシステムを発現するという行為の繰返しが必要とされる。

このような経験の科学化を継続的に行われないとすると、技術の空洞化が生じやすくなる。

このような点について着目し、技術移転と空洞化について、生産技術としての工学から社会技術としての工学へのシフト等の具体的提案としてまとめました。

◇グローバリゼーションと日本企業の多国籍化

岡本 康雄(第3部副部長、青山学院大学国際政治経済学部教授)

日本の製造企業は、1960年代後半東南アジアに生産拠点を軸とした海外直接投資を始めた。そして70年代に入ると、貿易摩擦回避がらみで米国向けの海外直接投資が、電機・電子、さらに乗用車といった分野において大規模に行われるにいたった。EUにも同じ様な分野での生産拠点の形成が進められた。この間、日本企業の競争優位資源の海外移転が果たしてどのように行われるか、が重要な課題であった。

他方、世界規模では、各国、特に先進国間の所得水準の平準化と市場の同質化技術水準の均等化と革新の同期化が進み、情報通信技術の急速な進歩とそれによる伝達コストの低下、各国制度の自由化がこれに加わって、80年代国境なき経済——グローバリゼーションが急速に進展し、グローバル規模での競争が重要な課題であった。

そして80年代後半からは、アジアNIES、90年代にはアセアンが台頭し、東アジア全体がグローバルな注目を浴びるにいたっている。そして日本は、急速な円高によりアセアンへの生産移転を急テンポに進めざるをえなくなっている。それは、日本国内の空洞化を誘発している。

これら三つは、今現在、同時解決を求められている課題である。このトライアドについて考察しました。

※ なお、この講演会の模様については、前回の講演会と同様、日学双書No24「産業空洞化問題を考える」として、(財)日本学術協力財団より刊行予定です。

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。関連の研究集会、シンポジウムの案内、人材の募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。海外の学会の参加報告やフィールドでの体験談なども歓迎します。

本ニュースは年4回（大体2月、5月、8月、11月）発行されます。次回144号は1月下旬締め切り、2月中旬発行予定です。（編集担当 中井 俊一）

編集者 中井 俊一、鍵 裕之

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学理学部地殻化学実験施設

電話 03-3812-2111（内）4450 ファックス 03-3816-1784

発行者 日本地球化学会 〒113 文京区本駒込 5-16-9 学会センター C21

日本学会事務センター内 Tel. 03-5814-5801

日本地球化学会ニュース

No. 144

1996. II. 5

1996年度地球化学会春季シンポジウム

地球惑星科学関連学会合同大会が3月26日～29日に大阪大学豊中キャンパスで開催されます。日本地球化学会固有セッションのプログラムは次ページ以下のように決定しました。口頭発表のセッションは大会4日目の29日午前にG会場で行われます。ポスターセッションの展示は28日～29日で、コアタイムは29日12時～12時45分です。

日本地球化学会が主催するシンポジウム「西太平洋の海洋環境」（コンビーナー：川幡穂高・原田 晃）は28日午前にB会場で行われます。固有セッションとともに多くの方の来聴を期待します。

その他のプログラムや会場に関する詳しい情報は連絡会ニュースでご覧下さい。

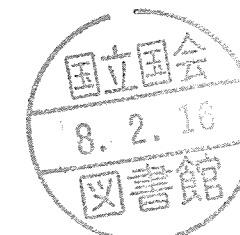
連絡先：益田晴恵

大阪市立大学理学部地球物質学1研究室

大阪市住吉区杉本3-3-138

Tel. 06-605-2591（直通）

Fax. 06-605-2522



1996年度日本地球化学会年会のお知らせ（I）

本年度の年会は、8月27日（火）—8月31日（土）に北海道大学の旧教養部を会場にして開かれます。次号に詳細を掲載しますが、会期が早いので、大要をお知らせしておきます。

- ・総会（29日）
- ・口頭研究発表（27, 28日）
- ・ポスター研究発表（29日には1会場でOHP1枚で1分の講演も行う）
- ・課題討論（27, 28日 地球化学の全体にかかわるような課題を取り上げ、分野を超えての討論を行う）
 - 1) 地球化学におけるパラダイムの創設（新しい地球化学をめざしての試み-戦略-を取り上げるとともに、他分野からの助言を受ける）
 - 2) 地球化学における新技術、新手法（地球化学の大きな発展につながる技術や手法-戦術-の革新、開発の試みを取りあげる）
 - 3) 地球史と地球化学（地球の誕生から現在まで、関

連する諸科学の中にあって、地球化学の果たした役割と今後果たすべき役割を取りあげる）

4) 地球環境変化と地球化学（将来の地球と人類に関連する諸科学の中にあって、地球化学の果たした役割と今後果たすべき役割を取りあげる）

上記の課題討論の講演者は、特に公募しませんが、講演を希望する方、講演を依頼してみたい方、その他企画（パネル討論を含め、いろいろな形式が考えられると思います）についてのご提案を大歓迎しますので、早めにご連絡をお願いします。

・夜間セッション（28日）

21世紀の地球化学に向けて（名誉会員等地球化学の先輩が得た貴重な経験を後輩に伝えとともに、博士の学位をとったばかりの若手に展望と先輩への注文を語ってもらう。当日の配布資料とするために、94, 95年度に学位を得た者と96年度に得る可能性のある者の氏名と論文名をお知らせください）。